

月、ころてる

鈴木恭一

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

VOICEEROID小説です。

以下の設定のゆづきです。

- ・ 結月ゆかりさんと継星あかりさんが従姉妹
- ・ 年齢も中学生と小学生
- ・ お互い奇妙な生物が見える
- ・ 夏休み、ゆかりさんの家に遊びに来たあかりさんのお話
- ・ シリアス
- ・ 戦闘シーンあり

目次

序章：台風ハンターゆかりさん	1
第1幕・第1章：屋上から降ってきた結月ゆかり	4
第1幕・第2章：廃材置き場	11
第1幕・第3章：水鉄砲、夏休み	20
第1幕・第4章：夜の海	27
第2幕・第1章：電話。夏祭りへ	37
第2幕・第2章：邂逅	41
第2幕・第3章：金世界	49
第2幕・第4章：きれいなあのこ	54
第2幕・第5章：さんがむりや vs よろうてつ（前哨）	63
第3幕・第1章：屋上にやってきた継星あかり	69
第3幕・第2章：ばうちすも	76
第3幕・第3章：さんがむりや vs よろうてつ（開幕）	82
第3幕・第4章：はらいそのけらくを知らぬあんじよ 中天よりころてるに下りけり	88
第3幕・第5章：さんがむりや vs よろうてつ（骨髓を灼く熱情。骨肉。相愛）	97
第3幕・第6章：さんがむりや vs よろうてつ（さんがむりや・ありかんじよ）	108
第3幕・第7章：さんがむりや vs よろうてつ（あかり、再洗礼）	119
第3幕・第8章：さんがむりや vs よろうてつ（さろめ）	134
第3幕・第9章：ゆかり vs あかり	157

第3幕・第10章：決着

終幕：人間火力発電所あかりさん、講和条約を締結

178 172

序章：台風ハンターゆかりさん

継星あかり（11）：他人には見えない生物が見える女子小学生
結月ゆかり（14）：あかりの従姉妹。不思議な生物をその身に宿す

○海辺からの帰りの坂道（昼）

坂を登っていく結月ゆかりと継星あかり。

夏のもやつとした空気の中、ゆかりの周囲だけが（物理的に）涼しげだ。

車道に近い方を歩くゆかりが平坦な口調で言う。

結月ゆかり「台風が好きです」

継星あかり「そうなの？」

結月ゆかり「そうなのです。台風ハンターゆかりさんとは私のことです」

継星あかり「なんで台風が好きなの？」

結月ゆかり「私の中に同居人が住んでいる事は、前に話しましたね？」

継星あかり「うん。〴〵さんがむりや〴〵のことでしょ」

結月ゆかり「名前はなんでもいいです。その同居人はなんでも食べてエネルギーにしています」

継星あかり「エネルギー」

結月ゆかり「そのエネルギーで私の同居人は空気や水やアスファルトを分解し、有機化合物を作り、最終的にゆかりさんの栄養になります。凄いでしょ？」

継星あかり「すごい」

結月ゆかり「しかも食べたエネルギーは肉体とは別の、よく分からないところに貯蓄できます」

継星あかり「どこ？」

結月ゆかり「私も知りません。体重計には出ないのでたぶん異次元にでも収納しているでしょう」

継星あかり「ずるいよゆかりさん！」

結月ゆかり「なんとでも仰つて下さい。とにかく同居人は色々なことを私にしてくれるのですが、そのためのエネルギー源が要ります」
継星あかり「あ、だからこの前アパートの屋上から身投げしてたの？」

結月ゆかり「そうです。落下の位置エネルギーを同居人に食べさせていました」

継星あかり「単なる自殺にしか見えなかったよ」

結月ゆかり「高い位置まで昇るエネルギーはエレベーターが肩代わりしてくれるので、ゆかりさんは労せずエネルギーを稼げる良いアイデアだと思つたのですが……」

継星あかり「ですが？」

結月ゆかり「よくよく考えればそのエレベーターのモーターパワーや電力を同居人に食べさせれば良い事に気付いてしまいましたので、あれ以降やっていません」

継星あかり「普通に騒ぎになつてたからじゃないの？」

結月ゆかり「そうとも言います」

継星あかり「台風にウキウキで近づくのも騒ぎになるんじゃない？」

結月ゆかり「ゆかりさんはその辺りプロですから」

喋るふたり。誰もすれ違わない。熱も音も何かが吸収してるかのように控えめ。

継星あかり「ていうか、普通に栄養欲しかつたらご飯を食べればいいんじゃない？ ゆかりさんのお母さんのご飯、とつても美味しいのに」

あかり、小首を傾げて不思議そうにする。

結月ゆかり「……あかりさんは、あれが美味しいのですか？」

ゆかり、若干間を開け、殊更に無機質な口調で言う。

継星あかり「うん。すっごい美味しい」

結月ゆかり「美味しいのですね？」

継星あかり「？ 美味しいよ？」

結月ゆかり「では今度から私の分も差し上げましょう。私は食べる必要がないので」

継星あかり「……ゆかりさん？」

あかり、訝しげにゆかりを見上げる。ゆかりは坂の上を見上げている為、表情が分からない。

結月ゆかり「あかりさんが我が家に来てくれて、本当に嬉しいです」

ゆかり、目線を合わせないまま言う。

あかり、不安げにゆかりを見詰める。ゆかりが何を言いたいのかわく分らない。

結月ゆかり「美味しいものを美味しいと感じる人が食べてこそ、正しい料理と食事だとゆかりさんは思っています」

継星あかり「ゆかりさんは、美味しくなかったの？」

あかり、驚きに目を瞪る。足を止め、ゆかりを凝視。

ゆかり、合わせて足を止める。涼しげな表情をあかりに向ける。

結月ゆかり「月に住むウサギは、地球のウサギとは違います。似てるのは見た目だけ。その中身は異形なのです」

ゆかり、歩みを再開する。前だけを見て、視線をあかりに合わせて見詰める。
ない。

継星あかり「ゆかりさん……」

あかり、ゆかりを追わず、その細い背中をじっと見詰める。

熱気と喧噪が大きくなる

ゆかりから離れると、夏の空気が復活する。

ゆかりとの距離が遠のく。

第1幕・第1章：屋上から降ってきた結月ゆかり

継星あかり「モノローグ。以下M）ゆかりさんと初めて会った夏の日。あの人は空から降ってきた」

○ゆかりのマンションの中庭。（昼）

あかり、中庭を不安げに進む。

そのあかりに陰が掛かる。

継星あかり「？」

あかり、見上げる。

昼の青空。半月。上弦の月。

それを背景にして、何かが地面へ飛び降りてきた。

あかりが何か反応する間もなく、地面に激突する。

衝撃音、なし。

結月ゆかり「失礼。驚かせましたか」

激突音の代わりに、その落下してきたものが喋る。

少女。

あかりよりずっと年上。手を付いて綺麗に着地している。

結月ゆかり「屋上からあなたが見えたので、少しショートカットをして参上した次第です」

ゆかり、パンパンツと軽く服と手を払いながら立ち上がる。

あかり、自分より年齢も背丈も上のゆかりを見上げる。

継星あかり「…屋上？」

結月ゆかり「昔はよく飛び降りたものですが、最近だと久しぶりで
す」

継星あかり「あそこから…？」

あかり、指をさしながらマンションの屋上を見やる。10階建て
のマンション。

結月ゆかり「屋上に入ることにも飛び降りることも、このゆかりさん
には何の問題もないのですが、どうも何か問題になるようです」

継星あかり「…ゆかりさん？」

結月ゆかり「はい、結月ゆかりです。こうしてお会いするのは初めてですね、継星あかりさん」

ゆかり、ほんの僅かに唇を笑ませる。

結月ゆかり「父と母が待っています。ひと夏だけですが、ごゆるりお過ごし下さい」

継星あかり「(M) 誰とも触れ合えない私は、その年の夏休みを従姉妹であるゆかりさんの家で過ごすことになった。

私の両親は、私のことで疲れていた。私在家の中になると、それだけで傷ついてしまうくらいに。

これはひと夏の思い出。私にだけ見えるものをみんなに教え、そしてみんなが私から離れてしまったあの年の夏のこと」

○(回想) あかりの小学校の教室(昼)

あかり、自分の机に突っ伏している。

同級生たち、教室の端で群れ、遠巻きにあかりを見やる。

同級生「……………」

同級生たち、あかりを見ながら眉根を寄せ、ひそひそと囁き合う。

表情はみな暗い。

小声なので話の中身は分からない。

そのひそひそ声が教室に染み渡る。

継星あかり「(うつむき、表情を硬くする)……………」

誰もあかりに近づかない。

ひそひそ声がいつまでも続く。

○ゆかりのマンション(外廊下・昼)

ゆかり、廊下を進む。

あかり、うつむきながら付いていく。

結月ゆかり「あかりさん、ご気分は大丈夫ですか？」

継星あかり「あ、大丈夫。少し暑かったただけだから」

結月ゆかり「そうですか……（ふと思いついたように）そう言えば、この辺りのことで、少し注意していただきたいことがあります」

継星あかり「え、なに？」

結月ゆかり「大したことではありません。我が家の近所に、それに名の知れた神社があります。その神社の裏手に小さな池があります」

ゆかり、一拍だけ間を置き、目をあかりに合わせる。

あかり、僅かに身構える。

結月ゆかり「そこには決して近付かないようお願いします」

継星あかり「……危ないの？」

結月ゆかり「あかりさんは、あれが見えますか？」

継星あかり「え？」

結月ゆかり「あの緑のアパート」

ゆかり、足を止め、廊下から外を指さす。

結月ゆかり「アパートの壁に、何か見えますか？」

継星あかり「ゆかりさん？」

結月ゆかり「見えますか？ アパートではなく、アパートの壁にいるそれが、見えますか？」

あかり、驚きで息を呑む。ゆかりは何も反応しない。

継星あかり「……」

あかり、アパートの方を向き、目を眇める。

少しの無言を挟み、告げる。

継星あかり「……黒くて細長いのが、ヤモリみたいに壁に張り付いてる。でもヤモリとかトカゲよりずっと細長くて、手足からムカデみたいなウネウネしたのがたくさん生えてて、それがアパートの壁を全部覆ってる」

結月ゆかり「なるほど。では、そのアパートの右に見える車両用信号には？」

継星あかり「……小さなのがたくさん群がってる。サワガニみたいなのがうじゃうじゃ。いっぱい集まって信号機からカーテンみたい

に垂れ下がってる」

結月ゆかり「信号の奥に見える鉄柱は？」

継星あかり「ワタアメみたいにふわふわしたのが、鉄柱を全部包んでる。表面の一部が風に煽られて千切れちゃってるけど、千切れた方が触手みたいなのを伸ばして戻ってきてる」

結月ゆかり「あれはわざと千切られて遊んでいるのです。風が好きなので高いところに棲んでいます」

継星あかり「……ゆかりさんにも、あれが見えるの？ 私だけじゃないの？」

あかり、驚きと興奮を隠さないまま振り向く。

ゆかり、無機質な表情で向き直り、頷く。

結月ゆかり「私も、祖母以外では初めてです。あれらを視ることのできる人間と会うのは」

ゆかり、一礼する。

結月ゆかり「改めまして、よろしく願いますね、あかりさん」

○結月家の居間（昼）

あかり、ゆかりに連れられて部屋に入る。

ゆかりの両親、部屋に入ったあかりを見て、微笑みながら迎え入れる。

ゆかり母「いらっしやい、あかりちゃん」

ゆかり父「お昼まだだろう？ そば作っておいたよ。アレルギーとかは特にないって聞いてるけど大丈夫？」

継星あかり「あ、はい。平気です。なんでも食べられます」

ゆかり母「じゃあすぐ準備するから、先に部屋をゆかりに案内してもらって。あ、うちに着いたこと、姉さんには私から連絡しておくから」

ゆかり父「クーラー大丈夫かい？ 寒かったら教えてくれると助かるよ」

継星あかり「大丈夫です。全然、ちょうどいいです」

結月ゆかり「ではあかりさん、部屋をご案内します」

ゆかりの両親、ゆかりが声を発すると、若干体を強張らせる。
ゆかり、それを見て少しだけ目を細める。表情は変わらない。
ゆかりとあかり、居間を出て行く。

○結月家のダイニングルーム（昼）

食卓を囲う四人。

食卓には茹でたそばを並べた大皿と、天ぷらと揚げナスが並ぶ小

皿。

ゆかり母「じゃあ、頂きましょうか」

継星あかり「……これ、おばさん達が作ったの？」

ゆかり父「そうだよ。麺から打った」

継星あかり「麺から!？」

ゆかり母「麺を打ったのはお父さん。天ぷらとか揚げナスとかの具は私」

ゆかり父「加減が分からなくて少し作りすぎたかもしれないから、食べられる分だけでいいよ」

あかり、食卓に並んだ料理の量を見る（継星家の食事量と比べながら）

継星あかり「（不思議そうな顔で）作りすぎたんですか？」

ゆかり母「うちは少食だから……」

ゆかり母、ちらりとゆかりを見る。

ゆかり、置物のように微動だにしない。無言。

ゆかり父「じゃ、頂きます」

ゆかり母「頂きます」

継星あかり「い、頂きます」

結月ゆかり「……」

ゆかりを除いた全員が箸を伸ばす。

ゆかりは箸に触れさえしない。

あかり、それを不思議そうに見ながら、そばを口に入れる。

継星あかり「……美味しい!」

あかり、勢いよく具と麺を箸で取り、食べる。

ゆかりの両親、その勢いを見て驚きの顔を浮かべる。

継星あかり「すごい美味しい！ お店みたい！」

ゆかり母「(おそるおそる) 本当…?」

継星あかり「ほんとに！ おつゆも美味しい！」

ゆかり父「つゆも自作なんだ」

継星あかり「作ったの!? つゆって作れるの!？」

あかり、嬉々とそばを平らげていく。

結月家の三人、じつとそれを見詰める。

あかり、その視線に気付く。

継星あかり「(少し申し訳なさそうに) ……あの、ごめんなさい。食べ過ぎだった？」

ゆかり母「(涙声で) ううん、違うの。違うの」

ゆかり母、目元を抑える。

ゆかり父、ゆかり母の肩を撫でる。

ゆかり、そんな両親を無表情に眺める。

ゆかり父「ごめんね、気にせずどんどん食べて。なんだったら乾麺も茹でるから」

継星あかり「あ、いえ、ええっと」

結月ゆかり「あかりさん」

ゆかり、口を開く。

ゆかりの両親、びくりと体を震わせ、娘へ目を瞞る。

結月ゆかり「もっと食べたいですか？」

継星あかり「(はつきり頷きながら) ……食べたい」

結月ゆかり「では私が麺を茹でてきます。引き続きお食事をお楽しみ下さい」

ゆかり、おもむろに立ち上がり、迷いのない動きで台所に消えていく。

あかり、それをぽかんと眺める。

継星あかり「(不安げに) 何か、怒らせちゃった？」

ゆかり父「(憂いを含む優しい声で) いや、大丈夫。私達に気を遣っただけだから」

ゆかり母「(涙を拭い、泣くのをやめながら) うん、気にしなくてい

いの。ごめんなさい。あの子の言う通り、食事続けましょう」
ゆかりの両親、箸を進めていく。
あかり、得心のいかない顔を浮かべながら、食事続ける。

第1幕・第2章：廃材置き場

○結月家の台所（昼食後）

ゆかり母、皿を洗っている。

あかり、居間から現れる。

継星あかり「あれ、ゆかりさんは？」

ゆかり母「え、いない？」

継星あかり「どこにも。昼食のとき、茹でた麺を持ってきてくれたのが最後」

ゆかり母「溜息とともに）ああ、じゃあきつといつもの廃材置き場ね」

継星あかり「廃材？」

ゆかり母「表の通りを海の方に進んで、ふたつ目の信号の所にあるの。あの子、食事のときはいつもあそこにいるのよ」

継星あかり「なんで？」

ゆかり母「目をそらしながら）……さあ、私には分からないわ。ゆかりに何かご用だった？」

継星あかり「あの、学校の宿題があるから、図書館の場所を教えてくださいかったの」

ゆかり母「まあ、うつかりしてた！ それを教えてなかったなんて……ああ、でもあの子、携帯電話とか持ってないから、洗い物が終わったら私が図書館まで一緒に行つてあげる」

継星あかり「いいの？」

ゆかり母「ゆっくりと穏やかに微笑み）あなたのお母さんから、あなたのことを頼まれてるの。それくらい全然平気」

継星あかり「ありがとう！」

○結月家の車内（運転中。図書館からの帰り・夕方）

ゆかり母、運転席。

あかり、助手席。

継星あかり「あの、帰りにゆかりさんのところに寄つてもいい？」
ゆかり母「それはかまわないけど、あの子を車で拾うことはできない

いわ。多分まだしばらくあの廃材置き場にいたいと思うから」

継星あかり「ゆかりさんはそこで何してるの?」

ゆかり母「表情を陰らせ)……ごめんなさい。私には理解できないの」

継星あかり「少々わざとらしく朗らかに)じゃあ、ゆかりさんと一緒に帰るね。図書館、ありがとうございました」

ゆかり母「大丈夫?」

継星あかり「ゆかりさんと一緒に、心配?」

ゆかり母「心配と言えば心配だし、心配ないと言えば心配ないし……」

継星あかり「だめ、ですか?」

ゆかり母「いえ、大丈夫。あの子もあなたを気に入ってたみたいだし」

○廃材置き場前(夕方)

あかり、車を降りてゆかり母にお辞儀。

ゆかり母、車を出す。

あかり、廃材置き場へ進む。

○廃材置き場(夕方)

廃棄された材木、プラスチック製品、鉄骨、スクラップ、廃車のフレーム、そういった雑多な有象無象が山となって積まれている。

ゆかり、その塵芥の山の頂に、佇む。

音も風もない。

その一角だけ空気が変容しているような、異質な雰囲気。

鈍く重たい夏の青空を背景に、悠然と、まっすぐに、ゆかりは立っている。

継星あかり「(ゆかりを見て、息を呑む)……」

しばし無言の間を置いて、

結月ゆかり「(あかりの方を見ないまま)あかりさん、どうかしましたか?」

継星あかり「……図書館を案内してもらってたの。ゆかりさんと一

緒に帰ろうと思って」

結月ゆかり「ああ、それは申し訳ありません。少し、栄養分を調達していたもので」

継星あかり「栄養って?」

結月ゆかり「空気中の窒素と、廃材の炭素と、ここからでは見えませんが地下の水道管からの水ですね」

継星あかり「……?」

結月ゆかり「窒素と炭素と酸素と水素があれば、だいたいの有機化合物が賄えます。ミネラル分は合成できませんから、後で海に行きませんが」

継星あかり「ゆかりさんは空気を食べてるの?」

結月ゆかり「仙人ではないので霞だけというわけにはいきませんが、概ねその通りです」

継星あかり「だから、おそば食べられなかったの?」

結月ゆかり「……概ねその通りです」

継星あかり「普通のご飯は食べられないの?」

結月ゆかり「口を使って養分を摂取することは可能です。単にしないだけです」

継星あかり「どうして?」

結月ゆかり「追々お話ししましょう。少々込み入った話なので」

ゆかり、重さのない動きで廃材の山から下りる。

そのまま、あかりへ手を差し出す。

結月ゆかり「お手を拝借しても?」

継星あかり「(小首を傾げながら) いいよ」

あかり、ゆかりの手を握る。

ゆかり、そっと出口に向かって歩き出す。

○結月家への帰り道(夕方)

ふたり、手をつないで歩く。

身長差があるので、ゆかりが意識的にゆっくりと歩を進めていく。

結月ゆかり「あかりさんのお母様とゆかりさんの母は姉妹ですが、その母親、つまり私達の祖母は、あの生き物達が見える人でした」
継星あかり「そうなの？ ゆかりさん、おばあちゃんに会ったことあるの？ 私ないよ？」

結月ゆかり「私もお会いしたのは一度だけです。子供の頃に。こことは別の、もつと山奥の地方におひとり住んでいました」

ゆかり、懐かしそうに目を細める。

○（回想）ゆかりの祖母の家（夜）

純和風の一室。暗く狭い。

幼いゆかり、ゆかり祖母の膝に抱かれている。

ゆかり祖母「あたしらの先祖はね、他の連中には見えないもんが見えてたんだがね、馬鹿なもんで、下手打ってしくじりやがってね」

ゆかり（幼）「何に？」

ゆかり祖母「下心もなく明け透けに、見えない連中へそういうのを教えちまったのさ」

ゆかり（幼）「いけなかったの？」

ゆかり祖母「見えない連中に親切心で教えてたら、気付けばこんなところに追いやられてたそうだよ。そのあと涙ぐましく頑張って見えない連中の血を入れて入れて、見えるモンが滅多に出ないようにしたらしい、けど、お生憎様」

ゆかり祖母、ひひひ、と冷たい嘲笑をあげる。

ゆかり祖母「残念ながらあたしみたいな、見えるモンが時々出ちゃうのさ。どう頑張ってもね。おかげで親戚中から除け者にされちまった」

ゆかり（幼）「なぜ？」

ゆかり祖母「見える者と見えない奴は一緒に暮らせないのさ。一人寂しいのがイヤだつてんなら、見えないように振る舞いな」

ゆかり（幼）「手遅れだと思っ」

ゆかり祖母「（おかしそうに）そうなのかい？ 運がねえなあ」

ゆかり祖母、ひひひ、と笑う。

○結月家への帰り道（夕方）

結月ゆかり「祖母が私に言いました。あの生き物達は、自分たちを見ることのできる人間に気付くと、積極的に絡んでくるそうです」

継星あかり「絡まれると、どうなるの？」

結月ゆかり「面白がって殺すか、無理やり体の中に住み着くか」

継星あかり「住むの？」

結月ゆかり「……あの目に見えない生き物達には、棲み家にしていく深度みたいなものがあります」

継星あかり「？ なんの話？」

結月ゆかり「水の中に入らなくても、水面近くで遊ぶ小魚は目に見えます。あかりさんが見ているものは、それなのです」

継星あかり「（訝しくゆかりを見上げる）？」

結月ゆかり「より深いところに棲んでいる生き物は、より目を凝らすか、水の中に入らなければ見ることが出来ません。だから、今のあかりさんには見えないのです」

継星あかり「……何を？」

ゆかり、足を止める。

結月ゆかり「見える人でも見ることの出来ない、深いところに棲む生き物」

ゆかり、空いている手で自分の喉笛を指さす。

結月ゆかり「このゆかりさんに棲んでいるものは、それなのです」

あかり、目を丸くして、ゆかりの全身、頭から爪先までを凝視する。

継星あかり「何も見えないよ？」

結月ゆかり「見えなくて良いのです。見えてしまえば、あかりさんはますます見えない人々から離れることになります」

ゆかり、歩みを再開する。

あかりも手を握ったまま、それに着いていく。

継星あかり「でもね、ゆかりさん」

結月ゆかり「はい」

継星あかり「私は、もう、手遅れな気がするんだ」

結月ゆかり「……」

ゆかり、何かを言い掛け、口を開く。

刹那の後、弾かれたように上空を見上げるゆかり。

結月ゆかり「(鋭く)——離れないで」

あかり、不意にゆかりから強く引き寄せられる。

驚くあかりの視界で、周囲の色調が変化する。

建物も街路樹も空も、色の鮮やかさを瞬く間に無くしていく。

何もかもが灰色に近づく中、擦過音が低く響く。

あかり達にほど近い、車道沿いの電柱に、何かが巻き付いている。

結月ゆかり「あかりさん、見えますか？ 電柱にいるあれです」

継星あかり「……見える。へびみたいに細長いもの。とっても長い。

ぶよぶよの胴体で、節くれ立ってる。でも頭がない。イソギンチャクみたいな、触手が何本も生えてる……こつち、向いた。こつちを見てる」

結月ゆかり「私から離れないで」

ゆかり、さらに強くあかりを引き寄せる。

あかり、ゆかりの服を掴み、握りしめる。

継星あかり「ゆかりさん……こつちに来る。触手を長く伸ばして、いっぱい向けてる」

結月ゆかり「あかりさんを狙っているのです」

ゆかり、半身をやや前に出し、あかりを庇うように構える。

結月ゆかり「(冷然と)よそ者ですね」

ゆかり、空いている腕を前にかざす。

結月ゆかり「この辺りは誰の縄張りでもないとは言え、ゆかりさんが近くにいるのに堂々と襲ってくるとは、なかなかの蛮勇です」

あかり、突然ぞくつと震える。

何かに撫でられたような感触。

しかし何も見えない。

結月ゆかり「(自動装置めいた冷たさで)このゆかりさんは淑女として名高いので、まず警告します。私の従姉妹にそれ以上近付くなら、

私の同居人が徹底的に消化吸収します」

継星あかり「(焦りと不安に顔を歪ませ)ゆかりさん、あれ、全然こっちの話聞いてないよ……どんどん近寄ってくる」

結月ゆかり「最後の通告です。それ以上接近すれば、捕食を開始します」

継星あかり「ゆかりさん！ 来る！」

結月ゆかり「——やりなさい」

景色に罅が走る。

灰色の建物や道路、空や雲に至るまで、あちこちで細かく大きな罅割れが生まれ、あつという間にあかりの視界全てを覆ってしまう。

そして音もなく、その罅が破裂する。

砕かれた罅の細片が粉雪のように舞い散る。

その向こうから、正常に色づく元の世界が現れる。灰色の覆いを取り払われた、通常の町並み。

その日常的な道路の上に、あの異形の生物がのたうち回っている。

結月ゆかり「同居人の張った網にも気付かないのに、よくゆかりさんの警告を無視する気になりましたね」

継星あかり「ゆかりさん……？」

結月ゆかり「もう心配いりません。人間に住み着かない状態で私に勝てるほど、力の強い生き物ではありませんでした」

継星あかり「何をしたの？」

結月ゆかり「同居人があれを糸状の触手で絡め取りました。触手はそのまま表面を溶かし、内部に分身を植え付けています。ああして苦しみ藻掻いてるのはそのためですね」

継星あかり「分身？」

結月ゆかり「分身は同居人が分裂したものです。侵入した内部で根を張りながら成長し、相手の様々な力を吸収して蝕みます。ほら、弱って抵抗できなくなっているでしょう？」

継星あかり「ほんとだ。もうほとんど動かない」

結月ゆかり「そうしたら分解専門の触手で完全に溶かし、消化用の

触手が吸収します。つまり同居人の養分です」

継星あかり「どんどん溶けてく……アイスみたいにとろとろだ」

結月ゆかり「こうされるのが分かっているけど、あかりさんに近付きたかったのですね」

継星あかり「なんで？」

結月ゆかり「あかりさんが好みだったのでしょうか。気持ちは分かります」

継星あかり「ん？」

結月ゆかり「食べ終わりました。帰りましょう」

あの生き物の姿は完全に消え失せている。

なんの変哲もない風景。

結月ゆかり「この通り以外はたいてい誰かの縄張りなので、さつきみたいなことは滅多に起きません。ご安心ください」

ゆかり、何事もなかったような足取りで歩き出す。

あかり、ゆかりに掴まりながらそれに着いていく。

○結月家・客間（夜）

あかり、敷かれた布団に横たわる。

ゆかり、その隣で寝そべり、うちわをあかりへ仰いでいる。

結月ゆかり「なぜあの生き物たちが人間の中に棲みたがるのかは、私にもよく分かりません。しかし律儀なもので、家賃もきちんと払ってくれます」

継星あかり「家賃って？」

結月ゆかり「人間の体は熱で動きます。その熱は、熱を生む物質から作られます。この熱物質を生産するのに、普通は栄養と酸素を必要とします」

継星あかり「（困惑し）え、理科の授業なの？」

結月ゆかり「しかし親愛なる同居人は独自のルートで熱物質の生産と貯蓄を行い、私の体に提供します。また各器官への栄養や酸素の供給、及び排出物の分解や再利用も行います」

継星あかり「……全然わかんない」

結月ゆかり「(苦笑しながら)要は目に見えない血管や臓器が張り巡らされてると思ってください」

継星あかり「ゆかりさんは、いつからそれと同居してるの?」

結月ゆかり「実のことを言うと、覚えていません。物心ついたときから一緒にいました。他の人、例えば両親にもこういうのが一緒にいるのだと当然のように思っていました」

継星あかり「(一拍間を置き、重たい顔つきで)……ゆかりさんも」

結月ゆかり「……」

継星あかり「ゆかりさんも、今まで仲良かった友達が、急に怖がって遊んでくれなくなったこと、ある?」

結月ゆかり「ないです」

継星あかり「え——(驚きで体を起き上がらせ、ゆかりを見る)」

結月ゆかり「(表情を変えず)仲の良い友達がいませんので、あかりさんのような思いをしたことはないです」

あかり、どんな反応をしているのか分からない表情で、ゆかりを見る。

ゆかり、そんなあかりへ小さく笑む。

結月ゆかり「そういうわけですので、私の過去の仲良し番付によりますと、あかりさんは現在一位にランクインしています」

継星あかり「(驚き)え、一位でいいの?」

結月ゆかり「あなたが不快でないのなら」

継星あかり「ううん、いい。一位がいい」

あかり、表情を綻ばせながら、布団に横になる。

ゆかり、静かにうちわで風を送る。

初めて出会った日が終わる。

第1幕・第3章：水鉄砲、夏休み

紺星あかり「(M)そうして、私はゆかりさんと夏休みを共に過ごした。

ゆかりさんは私のお願いをたくさん聞いてくれた。
セミが捕りたいと言えば虫取りに付き合ってくれたり、水遊びがしたいと言えば水鉄砲を買いに行ってくれたり。

とても優しかったから、私はすぐにゆかりさんが好きになった」

○駅前デパート・おもちゃ売り場(昼)

結月ゆかり「水鉄砲を買うのは初めてです」

紺星あかり「そうなの？」

結月ゆかり「撃ち合う相手がないもので」

紺星あかり「じゃあ私がゆかりさんの初めてなんだね」

結月ゆかり「言い方」

○公園(昼)

結月ゆかり「ルールはどうしましょう？」

紺星あかり「ルール？」

結月ゆかり「競技では？」

紺星あかり「水鉄砲の？」

結月ゆかり「水鉄砲の」

紺星あかり「ルール……水鉄砲の……」

結月ゆかり「ではルール無用の残虐ファイトを致しましょうか」

紺星あかり「え、具体的に何されるの？」

結月ゆかり「あなたの武装は水鉄砲。対して私は非武装でいきま
す」

紺星あかり「なんで？」

結月ゆかり「水鉄砲では一度に一条しか撃てません」

紺星あかり「ゆかりさんは水鉄砲ないからゼロ条だよ」

結月ゆかり「ご安心ください。このゆかりさんは水鉄砲なしに水を放てます。機関銃のように情け容赦ない弾雨を浴びせてあげま
しう」

継星あかり「…ゆかりさんって意外と卑怯だよね」

結月ゆかり「ご不満の様子」

継星あかり「私も同じ技使いたい！」

ゆかり、目を細め、やや冥く微笑。

結月ゆかり「では仕方ありません。私も水鉄砲一丁で正々堂々とスポーツマンシップに則って尋常に勝負しましょう」

継星あかり「…私だけ2丁拳銃とかダメ？」

結月ゆかり「それではエナジーパックにエネルギーをチャージしましょう」

継星あかり「水ね」

あかり、ゆかり、ともに自分の銃に水を補充する。

ふたり、公園の周囲に人がいないことを確認。

結月ゆかり「人が来たら終了にしましょう」

継星あかり「はあい——隙あり！」

あかり、返事をしながら不意にゆかりへ引き金を引く

ゆかり、回避せずそれを受け止める

結月ゆかり「良い先制攻撃です」

ゆかり、びしょびしょにされながらこともなく頷く。

あかり、ゆかりの変化に気付く。

濡れそぼっていたゆかりの衣服や髪が急激に乾いていく。

見る見るうちに水分は乾燥し、水を浴びる前と同じ姿になる。

継星あかり「何してるの、ゆかりさん？」

結月ゆかり「水が勿体ないので吸い込んだだけです。一撃程度では、このゆかりさんを濡れ鼠にすることは叶わないと悟りなさい」

継星あかり「悪役だ！ 悪役してるよゆかりさん！」

あかり、水鉄砲の引き金を何度も引く。連射。

ゆかり、避けない。攻撃が命中する。

水気が瞬く間に乾いていく。

あかり、慌ててさらに連射。

ゆかり、その場から動かない。水を浴びせられても意に介さず、悠然と水鉄砲を構える。

結月ゆかり「顔を狙います」

ゆかり、引き金を引く。

あかりの顔面に水流が直撃する。

継星あかり「わっ！」

あかり、慌てて目をつむり、顔を背ける。

ゆかり、攻撃しない。

あかり、目を開けて再びゆかりを見やる。

ゆかりの身を濡らしていた多量の水は、ひとつ残らず消えていた。

公園に入ったときとまるで変わらないゆかりの姿。

まるで何も起きていなかったかのように。

結月ゆかり「顔を狙います」

ゆかり、宣言しながら引き金を引く。

結月ゆかり「顔を狙います」

継星あかり「ちよっ！」

結月ゆかり「顔を狙います」

継星あかり「や、待って待って！」

結月ゆかり「顔を——」

継星あかり「ゆかりさん！」

結月ゆかり「なんででしょう？」

継星あかり「なんで顔ばっかりなの!？」

結月ゆかり「面食いなので」

継星あかり「意味がちがう！」

結月ゆかり「正々堂々と情け容赦ない残虐ファイトをすると云ったじゃないですか」

継星あかり「スポーツマンシップは？」

結月ゆかり「ラスベガスで休暇中です」

ゆかり、攻撃を続ける。

あかり、悲鳴をあげながら逃げ惑う。ときどき反撃する。

(あかりの喚き声を残してフェードアウト)

○同(昼)

引き続き水鉄砲で撃ち合っている。

そこへ、

女子「……うわ」

誰かの声。

明らかな嫌悪と不安の混じった声。

女子「結月ゆかりだ……」

女子「あつちいこ」

ゆかりと同年代の女子たちが、公園の入り口でゆかり達を見ていた。

ゆかりがそちらへ視線を送る。

女子たち、慌ててその場から逃げる。

継星あかり「(不安げに見上げ) ゆかりさん？」

結月ゆかり「表情を全く変えず) 気にしないで下さい。大したことではありません」

継星あかり「友達じゃないの？」

結月ゆかり「たまたま同じクラスになった同い年の子を友達と呼ぶのなら、友達なのでしょうね」

継星あかり「…友達じゃないんだね」

結月ゆかり「仲の良い子はおあなたしかいないと言ったじゃないですか」

ゆかり、水鉄砲を片付け始める。

継星あかり「(水鉄砲の水を捨てながら) ゆかりさんも、私みたいに何かしちやったの？」

結月ゆかり「私が意図的にしていたことは、給食を食べなかったことだけです」

継星あかり「それだけ？」

結月ゆかり「それだけです。だから、大したことではなかったのです」

継星あかり「……」

ふたり、公園を去る。

○帰り道（昼）

継星あかり「どうしてゆかりさんは怖がられてるの？」

結月ゆかり「私にもよく分かりません。気づけばああなっていました」

継星あかり「何かあったの？」

結月ゆかり「そうですね。例えば、小学校のとき、スズメバチの巣が昇降口に出来て誰も近づけなかったことがあります」

ゆかり、思い出す仕草。

結月ゆかり「ひどく興奮状態でかなりの数のハチが群れて飛び回っていました」

継星あかり「うん」

結月ゆかり「私にはどうでもいいことなので、そのまま昇降口を通って学校の中に入りました」

継星あかり「うん？」

結月ゆかり「それだけです」

継星あかり「ハチは？」

結月ゆかり「私に群がりましたが、放っておきました。私に毒は効きませんし、そもそも針が通りません」

継星あかり「何したの？」

結月ゆかり「私は何も。皮膚を刺す力を私の同居人が吸い上げただけです」

継星あかり「……ハチに群がられながら、学校の中に入ったの？」

結月ゆかり「そうですね。有効打がないのですぐ諦めるかと思ったのですが、意外としつこく付き纏ってきました。興味がないのでそのまま教室に向かいましたが」

継星あかり「シユールだ」

結月ゆかり「他に校内に生徒はいませんでしたから、おそらく誰も入らないよう学校側が規制してたのでしょう。当時の私にはそこまで思い巡らせられませんでした」

継星あかり「それで？」

結月ゆかり「それだけです。普通に教室の自分の席に座っていました」

継星あかり「ハチに襲われながら？」

結月ゆかり「ハチに襲われながら」

継星あかり「……結局、そのあとどうなったの？」

結月ゆかり「学校が呼んだ業者にハチは駆除されました。私は何故か教師陣に呼び出されて怒られました」

継星あかり「何故か？」

結月ゆかり「ハチの攻撃程度ではこのゆかりさんに傷ひとつ付けられないことを当時主張したのですが、まったく聞き入れてもらえませんでした」

ゆかり、天を仰ぐ。前髪が表情を隠す。

結月ゆかり「両親は学校に物凄く謝り、私に物凄く泣いていました。母や父がひどく悲しんでいるのは分かるのですが、何に悲しんでいるのかが私には分かりません」

継星あかり「普通はハチに襲われると、下手すると死んじゃうからね」

結月ゆかり「扇風機の風を浴びただけで骨肉を引き裂かれる人類はいません」

継星あかり「蚊は扇風機の風で飛べなくなるよ」

結月ゆかり「……まあこのようにことと似たエピソードをいくつか重ねていった結果、気づけばああなったとお思ってください」

継星あかり「他にもあるの？」

あかり、驚嘆の声。呆れではなく、純粹な驚き。

結月ゆかり「同居人がたいていの災難を防御してくれますから」

継星あかり「その同居人って、名前とかないの？ 私はなんて呼べばいいの？」

結月ゆかり「私以外見えないので特に名付ける意味はありませんでした。なので名なしの同居人です」

継星あかり「じゃあ、私が名前つけてもいい？」

結月ゆかり「かまいません。私に住み着いているので、私が名前を呼ばない限り、特に問題はないでしょう」

継星あかり「どういう意味？」

結月ゆかり「お気になさらず。何か、名前の候補はあるのですか？」
継星あかり「図書館で調べてたの。あのね、”さんがむりや”って
どうかな？」

結月ゆかり「さんがむりや」

継星あかり「うん。どこかの昔話で、きれいな女の子の中に住み着きたい天の神様がいて、ある子が選ばれて、そのことを女の子に教えにきた神様の使いの名前が、さんがむりや」

結月ゆかり「……だいぶ話を端折ってるせいで、性癖が歪んだ神様に聞こえてしまいますが、女の子に住み着いたのはその神様であつて、使者の方ではないのでは？」

継星あかり「だって神様の名前、あまりかつこよくないんだもん」

結月ゆかり「そうですか。では仕方ありません」

継星あかり「”さんがむりや”で決定でいい？」

結月ゆかり「構いません。あかりさんのお気に召すまま」

継星あかり「ふふふ、さんがむりや、さんがむりや」

あかり、弾む声で歌うように口ずさむ。

ゆかり、その付けられた名前を口にしようとするが、やめる。

あかり、そのことに気付かない。

第1幕・第4章：夜の海

○浜辺・市営バーベキューエリア（夜）

継星あかり「（M）その日の夜、ゆかりさんのお父さんが浜辺でバーベキューと、キャンプファイヤーをしようと言ってくれた。私はゆかりさんのお母さんに習い、ハンバーグを作ってみた」

設置したバーベキューコンロから、焼きあがった料理を皿に移す（ゆかり以外の）女性陣。

ゆかり母「焼けたわよー」

継星あかり「はあい。どーぞー」

ゆかり父「お、ありがとう」

継星あかり「（ハンバーグの乗った皿を差し出しながら）ゆかりさんはどうする？」

結月ゆかり「私はしばらく波の力を吸い込んでいますので、お気になさらず」

継星あかり「（やや甘い声で、上目遣いに）：ハンバーグ、作って見たの」

結月ゆかり「……」

ゆかり、あかりを見詰める。

ゆかりの両親、表情を強張らせて見守る。

継星あかり「まずいかもしいけないけど……」

結月ゆかり「（きつぱりと）それは関係ありません」

ゆかり、箸でハンバーグを細かく切り分ける。

ひとかけを機械のような動きで口に入れる。

結月ゆかり「……（咀嚼）」

継星あかり「……どう？」

結月ゆかり「（飲み込み）：まず美味しいかどうかですが、申し訳ありませんが分かりません」

継星あかり「え？」

継星あかり「（目を細め、表情に何も浮かべず）豚と牛の合い挽き肉、

玉ねぎ、チーズ、塩こしょうなどで出来ているのは分かります。しかし、味となると、何も言いようがありません」

継星あかり「味、しなかった？」

結月ゆかり「はい」

あかり、悲しげに俯く。

ゆかり、あかりの頭を優しく撫でる。

結月ゆかり「私には味が分かりません。ですから、私に何も求めたいけません」

継星あかり「(悔しげな声で) なんで？」

結月ゆかり「料理を作った人間が、料理を食べた人間に求めているのは、体に害があるかどうかではないでしょう？」

継星あかり「じゃあ、ゆかりさんは何も食べられないの？」

結月ゆかり「いいえ。口を使わずに摂取することは出来ます。この通り——」

ゆかり、皿に乗せたハンバーグの肉片へ手をかざす。

その途端、周囲の音が低くなる。まるで空間が重さを増したように。

潮気と湿気が入り交じっていた夜気の温度も、一気に下がる。

あかり、不意の肌寒さに体を震わす。

結月ゆかり「——ごちそうさまでした」

ゆかり、手を皿の上から退ける。

皿の上には、何も無い。

ハンバーグの肉も、肉汁も油も、全て綺麗に消失している。

継星あかり「(目を丸くし) すごい！ どうやったの？」

結月ゆかり「私の同居人が食べました。いずれ私の血となり肉となるでしょう」

継星あかり「あの廃材置き場でも、こういうことしてたの？」

結月ゆかり「そうです。触れる必要がないので様々な場所の様々な物を食べることが出来ます」

ゆかり、両親をちらつと見やる。

ゆかりの両親、悲しげに娘を見詰めている。

結月ゆかり「では私は少し波と戯れてきます。私のことは気にせず、同じものを同じ感じ方の出来る人々と共にしてください」

ゆかり、他の三人に背を向け、足早に波打ち際へ向かう。

ざぶん、ざぶんと暗黒の奥から響く波音。

ゆかりが近付くと、その音も力を失っていく。

ゆかり父「慰めるように優しく）……あかりちゃん、あとでキャンプファイヤーしようか」

継星あかり「キャンプファイヤー？」

ゆかり父「簡単なやつだけだね。あの子、ゆかりも、食事はしたがないけど、火は好きなんだ。一緒にいてあげてくれないかな？」

継星あかり「私で、いいの？」

ゆかり父「いいんだ。僕らじゃ、あの子の話を理解してあげられないから……」

あかり、海へ視線を移す。

ゆかりが波に足首を沈めて佇んでいる。

闇の中、ひとり。

継星あかり「ゆかり父へ）ゆかりさんは、普段なにも食べないの？」

ゆかり父「悲痛の眼差しで微笑み）……うん。昔、もっと小さい頃は僕らもいろいろと食べさせてあげてたけど、大きくなったらほとんど食べなくなっただ」

ゆかり父、あかりに近づき、小声で囁く。

ゆかり父「……母さんは、もっともっと美味しいものが作れば、あの子の味覚が戻ると思ってた時期があるんだ」

継星あかり「……」

ゆかり父「（あかりから離れ）あかりちゃんのハンバーグ、美味しいよ。きつと料理上手になる」

ゆかり父、食事を続ける。

あかり、ゆかり母を見る。思い詰めた顔で食事をしている。

ゆかり、変わらず波打ち際で海を眺めている。

○同・キャンプファイヤーエリア（夜）

焚き火キットによる簡易的なキャンプファイヤー。

(大きく平べったいスチール缶の中に燃料があり、そこへ着火して焚き火にする。結月家のいる地域では一般的なキャンプ用品。)

スマートライフ研究所の『炎の缶詰』参照)

あかり、ゆかり、椅子に座りながら焚き火の向こうにある黒い海を眺める。

継星あかり「(海を指さし)ゆかりさん、海の上、ブーメランみたいなのが飛んでる」

結月ゆかり「普段は海の中にいるものですね。夜になるとああして空中を飛んで、海面にどれだけ近付けるか遊んでいるのです」

継星あかり「あ、海から出てきた腕に捕まっちゃった…」

結月ゆかり「あの飛んでいるものの一部が海中に残っていて、海面に近づく方を捕まえる遊びをしています」

継星あかり「(海の上空を見上げ)……上になんかいる。円盤みたいな、ひまわりみたいの花びらが縁取ってる。しかも同じのが3枚重なってる」

結月ゆかり「星明かりを食べているのです。こちらに害意がなければ大人しいですが、ひとたび食事を邪魔されると非常に攻撃的になります。ゆかりさんも少しばかり苦戦しました」

継星あかり「……なんで邪魔しちゃったの?」

結月ゆかり「彼らを食べようと思ひまして。ゆかりさん自身は食べられなくても、私の同居人があれらを捕食できます」

継星あかり「で、ゆかりさんのご飯にしてくれるんだ」

結月ゆかり「その通りでございます」

継星あかり「すっごい優しいね、ゆかりさんに住んでるの」

結月ゆかり「私を健康的に長生きさせる遊びにはまっているようです」

継星あかり「遊びなんだ?」

結月ゆかり「遊んで暮らせる生き物たちですから」

あかり、焚き火の遙か上空を見上げる。

継星あかり「上の方にもなんだか色々いるけど、こっちまで降りて

こないね」

結月ゆかり「私がいいますからね。積極的に彼らを捕食して回ったので、だいぶ警戒されているようです……あかりさんは見慣れない顔なので、向こうの興味津々なのでしょう」

継星あかり「どうして？」

結月ゆかり「人間の子供は彼らをよく見つけます。彼らもそれを知っているのです、子供をかどわかしたりするのです。特に、例の神社の池に棲んでいるものは、子供を好む悪質な輩なので特に気をつけてください」

継星あかり「はあい……その、名前とかないの？」

結月ゆかり「どれがですか？」

継星あかり「その池に棲んでるのとか、この町にいる生き物達それぞれの名前。”さんがむりや”だって、私が付けただけだし、あれだけ色々いるから、名前ないと不便じゃない？」

結月ゆかり「名前は付けない方がいいと、祖母が言っていました」
継星あかり「なんで？」

結月ゆかり「名前があると、その名前を呼ぶものを認識してしまうからです。また名前を呼ばれた方も、名前によって自分を認識できてしまいます」

継星あかり「……日本語で言ってみて？」

ゆかり、苦笑。

結月ゆかり「例えば、私の目の前にいる女の子は、何十億という人間達の一体です。人間の女の子などいくらでもあります。しかし私がこの夏を一緒に過ごすのは、その他大勢のいくらでもいる女の子達などではありません」

継星あかり「ん……（少し気恥ずかしく俯く）」

結月ゆかり「（気付かず）また女の子の方も、大勢いる女の子の中から、「あなたとこの夏を一緒に過ごす女の子は私だよ」と訴えても、それだけでは私があなたと他の女の子を見分けることなど出来ません」

継星あかり「（焦りの混じる上擦った声で）で、できないの？」

結月ゆかり「識別するためには、あなたに関する様々な情報が必要

です。あなたは、あの生き物達を見ることができ、よく食べよく笑う、三つ編みの似合う、かわいらしい、私の従姉妹です」

継星あかり「(顔を赤くして口ごもる)う、あ、はい……」

結月ゆかり「こういった情報をひとつに集約したものが、名前です。『継星あかり』という5文字の羅列は、私の従姉妹を意味します」

あかり、小首を傾げる。

継星あかり「同姓同名の人がいたら?」

結月ゆかり「私の従姉妹の他に『継星あかりさん』がいたとしても、私が呼ぶ『継星あかりさん』とは、『私の従姉妹のあかりさん』という意味です」

継星あかり「つまり?」

結月ゆかり「私が『あかりさん』と呼ぶ相手は、この世にひとりしか意味しない、ということですよ」

継星あかり「(パアツと顔を輝かせ)ゆかりさん……!」

結月ゆかり「また、あかりさんの方も、私が『あかりさん』と呼んだ場合、従姉妹である自分のことだと理解できます。私が呼んでいるのはあなただけなのですから」

あかり、嬉しく顔を綻ばせる。

しかしふと我に返り、

継星あかり「……ごめん、そもそもなんの話してたんだっけ?」

結月ゆかり「名前を付けることで、あの名前のない生き物達を呼び寄せやすくしてしまう、というお話ですよ」

継星あかり「そ、そっかあ……」

あかり、火を眺める。

ゆかり、無造作に立ち上る火炎の中に手を突っ込む。普通なら火傷をしてしまうほどの距離。

継星あかり「ゆかりさん、熱くない?」

結月ゆかり「全然。良い熱源ですよ」

継星あかり「ゆかりさんは怖いものとかないの? ゆかりさんは無敵超人なの?」

結月ゆかり「暴力で私は倒せません」

ゆかり、火に近付けていた手を引つ込め、あかりの方をじっと見詰める。

結月ゆかり「あかりさんには」

一拍だけ、間を置く。

結月ゆかり「何か怖いものがあるのですね？」

あかり、指先をもじもじと合わせ、じつと火を見詰める。

継星あかり「……私もね、ゆかりさんみたいに、近付いちやいけなさそうやつを教えただ。友達に」

あかり、苦笑。

継星あかり「最初は、みんな笑ってた。おどかしてるだけ、って思ってたっばい。けど、私が本気だつて分かると、みんな笑わなくなった」

* * *

(フラッシュ)

教室で俯く、独りのあかり。

* * *

継星あかり「いじめられたわけじゃないよ？ みんな、私と話さなくなつたし、遊ばなくなつた。みんな、私を怖がった。怖いものを見る目で、私を見る。あの目が、私は怖いのに」

焚き火の炎が海風で揺れる。

ゆかり、火から手を引つ込め、あかりを見やる。

継星あかり「……ゆかりさんみたいになりたい」

結月ゆかり「(僅かに驚きの表情) 私みたいに？」

継星あかり「うん。怖いものなんかない人になりたいの。どんな目を向けられても、私はあの子達が好きだから、あの子達に怯えたりなんかしない人間になりたい」

結月ゆかり「もし怯えない心を持てたら、あかりさんはどうしたいですか？」

継星あかり「難しいことじゃないの。単に、またみんなと遊びたいだけなの。前みたいに」

結月ゆかり「友達から怖がられているの？」

継星あかり「私が怖がられてるからって、私まであの子達を怖がっ

てつたら、きつと永遠に歩み寄れないと思うから」

結月ゆかり「……以前、あかりさんは、自分のことを手遅れと言ったのを覚えてますか？」

継星あかり「え？ あ、うん」

結月ゆかり「私は決してそうは思いません。なぜなら、あかりさんはまだ、私のようになってないからです」

ゆかり、あかりから目を離し、焚き火を見詰める。

結月ゆかり「私は多くの大人と多くの子供に怖がられました」

継星あかり「……」

結月ゆかり「他の子たちが楽しいと言うほとんどものを私は楽しいと感じませんでしたし、私が楽しいと思うものに共感する子もいませんでした」

継星あかり「ゆかりさんの好きな楽しいことって何？」

結月ゆかり「激しい雷雨の中、高い屋根の上で風雨を浴びるのが一番好きです。雷が落ちてくれれば言うことありません」

継星あかり「落ちる？ どこに？」

結月ゆかり「私に」

継星あかり「実際に学校で雨とか風とか浴びてみたの？」

結月ゆかり「浴びてみました。小学校の屋上にある給水塔の上、校舎の一番高いところに登って」

継星あかり「怒られなかった？」

結月ゆかり「怒られました」

継星あかり「悲しげに目を伏せ）……ごめん、ゆかりさん。もし私の学校に雷を浴びたがる子がいたら、やっぱり理解は出来ないよ」

結月ゆかり「いえ、もしあかりさんが「雷を浴びたい」と言ったら、私は全力で止めています。あかりさんは私とは違うのですから。」

……ともかく学校中の人間が、私が学校で過ごすことに恐怖したのです。私も、小中学校の学力水準を教科書や参考書で得ていたので、学校に行く意義を感じなくなりました」

継星あかり「ゆかりさん、学校に行つてなかったの？」

結月ゆかり「言いませんでしたっけ？」

継星あかり「言っていない」

結月ゆかり「(素っ気なく) そうでしたか。まあそれはどうでもよく、つまり私と彼らが一緒にいてもお互いなんのメリットもないのですが、あかりさんは違います」

継星あかり「なんで?」

結月ゆかり「あかりさんはその子達が好きなのですから、一緒にいるメリットがあります。私にはないものです」

継星あかり「……ゆかりさんには、好きな人とかいないの?」

結月ゆかり「両親は除いて?」

あかり、ゆかりの言葉を聞いて安堵に微笑む。

継星あかり「ゆかりさんは、おばさんとおじさんが好きなんだ」

結月ゆかり「そうですね」

継星あかり「好きなのに、料理を食べてあげないのは、なんで?」

結月ゆかり「好きだから、食べないのです」

ゆかり、手を無造作に焚き火の缶へ突っ込む。

あかり、それに驚く。

ゆかり、気にせず言う。

結月ゆかり「材料さえあれば必須栄養素の合成が可能な私にとって、誰かが精魂込めて作った手料理も、そのあたりの廃棄物も、何も変わらないのです」

火に突っ込んでいたゆかりの手が、そのまま缶の底を撫でる。

焚き火からもたらされる温度が急激に低下する。

焰光は弱まり、火自体も消え掛かっていく。

ゆかりは無表情のまま、微動だにせずそれを見下ろす。

熱が空間から消えていく。

結月ゆかり「母と父の作ったものを、打ち棄てられたゴミと一緒にすることが、どうしても許せないのです」

焚き火、ほとんど螢火に。

光源が薄弱になり、周囲に闇がそつと舞い降りる。

ゆかりの表情を、あかりは何うことが出来ない。

あかり、何も言わずに待つ。

波の音が夜闇に染み渡る。

潮風があかりの髪をささやかに揺らす中、

ゆかり、ようやく口を開く。

結月ゆかり「だから、私は人の作ったものは何も食べません」

継星あかり「……本当に好きなんだね」

結月ゆかり「ふたりが心痛めていることは知っています。そのことに、私は申し訳ないと思っています。けれど、どうにもならないのです。私は彼らとは違う生き物なのですから」

ゆかり、焚き火の缶から手を引く。

焚き火、責め苦から解放されたように炎を大きくする。

周囲に明かりと温かさが戻る。

継星あかり「……ねえ、ゆかりさん」

結月ゆかり「なんででしょう」

継星あかり「ゆかりさんは自分を人とは違う生き物だっけ言うけどさ」

あかり、肩をゆかりの方へそつと寄せる。

継星あかり「もしも、ゆかりさんと同じ種類の生き物がいたら、やっぱり嬉しい？」

結月ゆかり「……どうでしょう。考えたことがないので、イエスともノーとも言えません」

継星あかり「そっかあ」

あかり、首を傾げ、頭をゆかりの肩にもたれかける。

ゆかり、従姉妹の頭を無言で支える。

海風と波音、夜の空気。

焚き火の炎が強まる。

第2幕・第1章：電話。夏祭りへ

○結月家・居間（昼）

あかり、電話を握りしめる。

受話器の向こうの相手に、強張った顔で頷いている。

あかり、受話器を下ろす。

細く重い溜息。

震え両手で、顔を覆う。

継星あかり「どうしよう……」

○廃材置き場（昼）

ゆかり、積み上げられた廃材の山の頂に佇む。

あかり、廃材の山の麓からあかりを見上げる。

継星あかり「お祭りに行かないか、って、電話があつたの。その、友達から……」

結月ゆかり「（あかりに目線を向けないまま）あなたを怖がっているという？」

継星あかり「うん……その子、今おばあちゃん家に来てて、こここの近くなんだって。私がこっちにいるって、私のお母さんたちから聞いて、それで」

結月ゆかり「わざわざ調べて回ったのですね、その子は」

継星あかり「（不安に俯き）……私、行くべきかな」

結月ゆかり「人間模様をゆかりさんに尋ねるとは、あかりさんもなかなかの豪勇です」

継星あかり「（おそろおそろ）迷惑だった？」

結月ゆかり「いいえ。この夏は、あなたのために出来る殆どのことをするつもりでいますから」

継星あかり「（面映ゆく口元を綻ばせ）……ありがとう」

結月ゆかり「とはいえ、その子の件で私に言えることは2つしかありません」

継星あかり「なに？」

結月ゆかり「まず、私達が見えるあの生き物について話題に出して

はいけません。たとえ目の前に見えても」

継星あかり「(やや表情に翳を作り)……やっぱり、そうだよね」

結月ゆかり「私なら気にはしません。繊細な問題でもあります。とりあえずここは見に周り、その子の意図を探りましょう」

継星あかり「もうひとつは?」

結月ゆかり「祭りがあるのは、例の神社です。つまり、例の池に近付きます」

継星あかり「ああ、あの危なそうなのが棲んでるっていう?」

結月ゆかり「しかり。廃祠に潜む輩で、非常に悪質です。それでいて強力。初日に出会った余所者とはわけが違います。このあたりではゆかりさんの次に強いです」

継星あかり「ゆかりさんなら勝てるんだ?」

結月ゆかり「もちろんです。プロフェッショナルですから」

継星あかり「さんがむりやってそんなに強い?」

結月ゆかり「人間と同居すると、発揮できる力が大幅に増えるのです。そしてこのあたりで彼らと同居している人間は、私くらいしかいません」

継星あかり「なんでみんな住み着かないんだろう?」

結月ゆかり「そこは分かりません。人に住むことに興味がないのか、わりと好みがうるさいのか」

ゆかり、軽い動作で廃材の山からひとつ飛びで降りる。

あかりの前に着地。顔が間近。

ゆかり、その近さに目を瞠る。

結月ゆかり「あかりさんは大変モテそうなので大変心配です」

継星あかり「……じゃあ、行かないほうがいい?」

結月ゆかり「人間に住み着いていない以上、彼らはたいしたことが出来ません。なので彼らのことは、あまり考えなくていいです」

継星あかり「つまり?」

結月ゆかり「あかりさんが行きたければ行くべきで、行きたくないのなら行かないのが正です」

継星あかり「……」

○結月家・居間（夕）

あかり、ゆかり母に浴衣を着付けてもらう。

ゆかり母「うん、これで大丈夫。長さもちょうどよくて助かったわ」
継星あかり「ありがとう。いきなり言い出してごめんね」

ゆかり母「ううん。ゆかりのお下がりだけど、とっておいて良かった」

継星あかり「ゆかりさんのなんだ」

ゆかり母「あそこの神社のお祭り、ゆかりはあまり行ききたがらなかったから、全然出番なかったけどね」

継星あかり「じゃあ、ゆかりさんの分まで楽しんでくるね」

ゆかり母「（驚いた顔で、優しく微笑む）……うん、楽しんできて。何かあったら電話してね」

継星あかり「はい！」

部屋の奥から声。

結月ゆかり「あかりさん」

継星あかり「なあに？」

結月ゆかり「着付けが終わりましたら、こちらへ」

あかり、ゆかり母に断りを入れてから、ゆかりの部屋へ行く。

○同・ゆかりの部屋（夕）

結月ゆかり「とっておきの香油があるのを思い出しましたので、せっかくだからあかりさんに、と」

継星あかり「香油？」

結月ゆかり「スミレの香りのパフュームオイルです。アルバイトでもらったのですが、すっかり忘れていました」

継星あかり「使っちゃっていいの？」

結月ゆかり「使われない道具は不幸ですから」

ゆかり、椅子にゆかりを誘う。

あかり、背を向けながら嬉しげに座る。

継星あかり「ゆかりさん、アルバイトなんてしてたんだ？」

結月ゆかり「たまにですが」

継星あかり「どんな仕事？」

結月ゆかり「危険生物の駆除が多いです。野生化した元ペットのワニであつたり、クマであつたり。頻度が最も多いのは蜂の巣の駆除ですね。ときどき心霊現象が起きる建物でお祓いみたいなこともします」

継星あかり「(自慢げに) さがむりやは無敵だもんね」

ゆかり、香油を手に数滴垂らす。両手と指の間に念入りに広げ、あかりの長い髪を根本から両手で梳く。

あかりの髪が広がる。

優しい手付きで何度も梳く。油が足りなくなれば、また足して同じことをする。

それを繰り返す。

継星あかり「(軽く目を瞑り) いい匂い」

結月ゆかり「あかりさんに似合うと思いました」

継星あかり「ありがとう、ゆかりさん」

結月ゆかり「夏の間しか、あなたにしてあげられませんから」

継星あかり「夏休みだけ？ 夏休みが終わっても、またときどき遊びに来ちゃだめ？」

結月ゆかり「秋でも冬でもかまいません。今年のうちなら」

継星あかり「(訝しみ) ……来年は？」

結月ゆかり「そんな先のことは分かりません——はい、終わりました」

ゆかり、最後に毛先を軽く撫で付け、手を離す。

結月ゆかり「あとは母に編み込んでもらって下さい」

継星あかり「椅子から離れ、くるりと振り向き」うん、ありがとう

！ かわいい？」

結月ゆかり「もちろん」

ゆかり、あかりの頬をそつと手を撫で、微笑む。

結月ゆかり「あなたが一番かわいい」

あかり、えへへ、と頬に紅をし、顔が緩む。

第2幕・第2章：邂逅

○神社・参道入口の鳥居（夜）

三日月が浮かぶ夜。星も見える。

鳥居の前。

あたり、浴衣姿で待つ友人（琴葉葵）を見つける。

葵、そのあかりに気付く。ゆるく笑みを浮かべ、手を振る。

琴葉葵「久しぶり。浴衣、かわいい」

紺星あかり「（緊張で強張りながら）あ、ありがとう」

琴葉葵「ここ、遠くなかった？ 平気？」

紺星あかり「ううん、全然。（戸惑うように葵を見やり）……葵ちゃんは、ここのお祭りによく来るの？」

琴葉葵「うん。毎年、おばあちゃん家に遊びに来るから」

紺星あかり「茜ちゃんは？」

琴葉葵「お姉ちゃんは、今年ミニバスの合宿とかぶっちゃって、私だけ」

紺星あかり「そっか」

琴葉葵「（小首を傾げ）……あかりちゃん、何かつけてる？」

紺星あかり「え？」

琴葉葵「なんか、いい香りするから」

紺星あかり「あ、うん。浴衣と、香油、借りたの。おばあさん家で」

琴葉葵「香油」

紺星あかり「（不安に眉を下げ）香油……変かな？」

琴葉葵「（はつきり確り笑い）全然。似合ってる。ぴったり」

紺星あかり「（安堵で息を吐き）そう？ よかった」

琴葉葵「（笑い掛け）じゃ、行こっか」

葵、あかりの手を引いて神社の境内を進む。

あかり、硬い動きでそれに着いていく。

○神社・境内（夜）

長い参道を挟み込むように、屋台が無数に連なる。

青や黄色のポップな幟、赤い暖簾や提灯のもと、景気よく客寄せの
声が響く。

それなりに多い人混みの中を、あかりと葵は練り歩く。

琴葉葵「あかりちゃん、お金大丈夫？ おごる？」

継星あかり「ううん、平気」

* * *

(フラッシュ)

あかりが結月家を出る直前。

ゆかり、千円札の束をあかりに手渡す。

* * *

継星あかり「(微笑み) お小遣いもらったから」

琴葉葵「良かった。うちの近所だとお祭りなんてないから、こつち
に来たとき多めに使っちゃうんだ」

継星あかり「美味しそうな匂いがする」

琴葉葵「たこ焼きだね」

継星あかり「買っていい？」

琴葉葵「いいよ」

継星あかり「焼きそばもある」

琴葉葵「美味しそう」

継星あかり「ポテトフライ」

琴葉葵「少なめだね」

継星あかり「綿飴と水飴が並んでる」

琴葉葵「飴仲間だ」

継星あかり「焼き鳥と焼きイカ」

琴葉葵「焼かれちゃった仲間だ」

継星あかり「子供用ビール！」

琴葉葵「それ好き。まずいけど」

継星あかり「……全部買ったからお金なくなっちゃった」

琴葉葵「くすすくす可笑しそうに」 あっちで食べよ」

○神社・簡易ベンチ(夜)

祭りに設けられた簡易ベンチで、買い込んだ料理のパックを食す2人。

あかり、脂っこい味付けに目を輝かせながら、猛然とそれらに食いつく。パックの蓋を全て開放し、平行で平らげていく。

葵、やや呆れ気味に、しかし楽しげに柔らかくそれを見詰める。

○神社・境内（夜）

屋台群を練り歩く2人。

射的。葵が景品を撃ち落とす。あかり、全部外す。

ボール的当て。あかり、葵に勝利。

金魚すくい。2人とも収穫ゼロ。

型抜き。やり方が分からず2人とも惨敗。

最奥の神社で参拝する2人。

並ぶ2人。

笑い合う2人。

紺星あかり「(M) 葵ちゃんは、私のことを何も聞かなかった。

夏休み中に何してたのかも、夏休みの前のことも。

まるで何も変なことなんか起きてないみたいに、普通に接してくれた。

楽しかった。本当に、楽しかった」

○神社・参道入口の鳥居（夜）

ふたり、練り歩きも終わり、待ち合わせに使った鳥居まで戻る。

空に三日月。

あかり、白いイヌのお面を顔の横へ付けている。耳が立ったアイヌ犬。

葵、キツネのお面。昔ながらの狐面だが、縁取りは藍を使っている。

紺星あかり「たくさん食べたね」

琴葉葵「戻るときにお好み焼き屋のおじさんが奢ってくれたからね、あかりちゃんが屋台の前で物欲しげにしてたら」

紺星あかり「いい人だった！」

琴葉葵「ていうか、あれだけ食べてまだ食べれるのすごいね」

紺星あかり「これからどうしよつか？」

琴葉葵「もうちよつとで花火が上がるんだけど……（ちらつとあかりを伺う表情で）私、よく見える穴場知ってるんだ」

紺星あかり「穴場？ どこ？」

琴葉葵「この近くに池があつて、そこの空き地」

紺星あかり「……」

あかり、表情を硬くする。

葵、それに気付いて慌てて手を振る。

琴葉葵「あ、全然危くないよ？ 池つて言っても水張つてるところは全然遠いし、街灯もあるし、通りからもけっこう近いし」

紺星あかり「（逡巡の貌）……」

琴葉葵「もう見るとこ全部回っちゃったし、あかりちゃんがすぐ帰りたいなら、引き留めない……けど」

葵、唇を引き締め、眉を寄せながら強い瞳であかりを見る。

琴葉葵「まだ、あなたといたいのに」

紺星あかり「……分かった」

あかり、頷く。

葵、ぱあつ、と表情を輝かせる。

空。三日月が身じろぎする。

○池へ続く林道（夜）

アスファルトで舗装された細い道。

左右には古めかしい街灯が、弱々しくまばらに灯いている。

樹木の背は高くない。が、幹の長さに比べて枝が異様に多く広く密集している。

濃く拡がる木々の枝葉が、道の上を完全に覆っている。夜空は見え
ない。木のトンネル。

あかりと葵、その中を歩く。

葵、前を行って先導。

あかり、道の不気味さに不安を感じながら、周囲を警戒する。

継星あかり「(M) 何かが私達の周りにいるのが分かった。でもよく視えない。

体をもものすごく薄く広げていて、輪郭がひどく曖昧だった。

その薄い膜みたいな体が夜の木や枝に絡みついて、町の明かりを遠ざけている。

まるで別の世界に繋がっている、不思議な通路のよう。

もしくは。

何かの生き物の内臓。

私達はそこを通り、そして通り抜けてしまった」

○池の近くの空き地(夜)

林を抜ける。

木も草もひとつも生えていない、地面がむき出しの広場。

ほぼ円形の空き地の中心に、祠がひとつ。

膝丈ほどの高さ。木造。幾年月も風雪に晒され、朽ちかけてはいるが、ぎりぎりのところで形状を保っている。

葵がそれに近づいていく。

あかり、周りを見回す。

木々は壁のように広場の縁に密集し、2人を取り囲んでいる。

木にまわりついていていた生き物たちは、その林の中から出てこない。

三日月と星々の下。

あかりと葵しかない空き地。

琴葉葵「ね、穴場でしょ?」

継星あかり「穴場すぎだよ……」

琴葉葵「苦笑し」毎年、ここでお姉ちゃんと一緒に花火見てるんだ。

お姉ちゃん、今年はおかりちゃんと一緒に見たいって言ったのにな

え」
継星あかり「……」

琴葉葵「お姉ちゃん、合宿終わったらこっちに来るから。そうしたらあかりちゃんとも遊べるよ。ここのいいところ、いっぱい連れてつてあげたい」

継星あかり「……」

琴葉葵「夏休みが終わっても、また遊びたいなあ。あかりちゃん、秋は好き？」

継星あかり「(頷く)」

琴葉葵「(破顔し)だよね。美味しいものいっぱいあるしね。お姉ちゃんもみんなと一緒に食べに行きたいよね」

継星あかり「……ねえ」

琴葉葵「なに？」

継星あかり「どうして、私をお祭りに誘ったの？」

葵、ふわりと小さく笑う。

琴葉葵「あかりちゃんがこっちにいたから」

継星あかり「私は、みんなに、きらわれてる」

琴葉葵「大丈夫だよ。みんなが何か言ってきたら、私とお姉ちゃんがいるよ。私達で遊んでれば、何もしてこないよ。何もされなければ、そのうちみんなと一緒に遊べるよ」

継星あかり「でも」

琴葉葵「私は、あなたと一緒にいたいよ」

葵、微笑む。

継星あかり「でも、あなたは、」

あかり、何か言い募ろうと口を開きかけ、言葉に詰まる。

* * *

(フラッシュ)

小学校の教室。

あかりを遠巻きに見やっただまま、声を掛けない琴葉姉妹。

* * *

継星あかり「あなたは、私を——」

光が差し込む。

継星あかり「え？」

あかり、頭上を見上げる。
そして、目を瞠る。

夜空。そして月だ。天頂に張り付いている。
満月が。

フルムーン。

三日月ではない。

継星あかり「!!」

あかり、その月に身震いする。

微塵も欠けていない、完全なる真円の月。

三日月と共に見えていたはずの星々が、今は全く見えない。雲ひとつないというのに。

月から放たれる真珠色の光が、あかり達のいる広場を舐める。

遮るものない月光が、喧噪と気温を溶かす。

音が消え、暑さも消え、匂いさえしない。

琴葉葵「——」

葵、月光を浴びて、表情と動きを凍り付かせる。

あかり、その葵を見て、はっと気付く。

打ち棄てられていた祠が、真新しくなっている。

ぼろぼろだった姿は幻だったように、趣深い峻厳な姿を取り戻している。時間の浸食など微塵もない、完全な形。

その祠に、金の粉が降り注ぐ。

継星あかり「……!!」

あかり、見上げる。

夜空の中央に君臨する満月から、金色に輝く砂がこぼれている。

金の粉は細い糸となり、天と地を結ぶ。

その金の糸の周囲に、銀色の粉が新たに生まれる。

恐ろしく細かい銀粉は金の粉の柱を中心に回転。複雑に輝きを明滅させる。

金と銀の光輝が、月と祠を結んでいる。

継星あかり「——!」

あかり、葵へ声を掛けようとするが、身体が動かない。

葵、青ざめた表情のまま全身を震わせ、硬直する。目線は祠へ
祠の上に注がれている、金と銀の砂塵。

その光の柱が、突如、破裂。

炸裂した光の爆発が金と銀それぞれに分裂し、生き物のように2人
へ襲い掛かる。

金の光はあかりに。

銀の光は葵に。

継星あかり「!!」

あかり、なんの抵抗も出来ず、妖光の砂嵐を浴びる。

意識が金色に塗り潰される。

のまれた。

第2幕・第3章：金世界

○??

あかり、目を開ける。

周囲は霧だ。

金色に輝く光の霧。

深く濃い。指の先さえ見えない。

霧の光度はあちこちでムラがあった。強く輝いたかと思えば突然弱くなり、白に近い色へと変わる。

継星あかり「(目に力を強く入れ)——ゆかりさんの言ってた、池に住む生き物……」

あかりが呟くと、金光の霧は明確な明滅を示す。反応していた。その霧の中から、黄金の粒子が現れる。

細い奔流となって、あかりの周囲を取り囲む。

琴葉葵「(悲鳴)」

継星あかり「！」

あかり、金の霧の向こうから届いた葵の悲鳴にハツとなる。何も見えない。

あかり、とにかく前へ走ろうとする。

が、あかりの全身、頭頂部から爪先まで、金の粒子がぐるぐると輪になって包み込む。

あかり、それだけで動けなくなる。金縛りだ。

動けないあかりに、さらなる悲鳴。

琴葉葵「(悲鳴) いやー！」

あかり、目だけ動かして周りをつぶさに見詰める。

何も見えない。

何も視えない。

継星あかり「葵ちゃんに変なことしないで！」

金の光がさざ波のように明滅する。

あかりから見やすい位置で応答するが、それ以上の変化はない。あかり、その光を睨み付ける。

継星あかり「……やめて」
視えない。

しかし、睨む。

あかり、唇を強く噛み締め、告げる。

継星あかり「何かしたいなら、私にすればいい」

金の流れ、一瞬ゆるむ。

継星あかり「ゆかりさんが言った。私は、あなたたちが棲みやすいって。人に棲みたくてやってるなら、私に棲めばいい。その代わり、葵ちゃんには何もしないで」

あかり、拳を握る。睨む。

継星あかり「私に入りなさい」

反応が起きる。

金の流れがその形を変える。

全身を取り巻いていた金色の粒子達はその拘束を解除し、あかりの眼前に集結する。

そして、ひとつの形を作る。

文字。

” 見たくはないか ”

あかり、息を呑む。

(多く見てきた不可視の生物の中で、言葉を使い、あかりへ呼びかけてきた生き物に、初めて出会った)

継星あかり「(震える声で)……なに、を？」

金の霧が淡く瞬く。

琴葉葵「いやっ！ 見ないで！」

粒子状の方の金が、万華鏡のように形を変える。

”

” きささまがうとまれたいみ

琴葉葵「見ないで！ 見ないで！ 見せないで！」

継星あかり「薄く眼を開け」名前？」

” こちらであそぶためのな
まえをよこせ ”

継星あかり「……」

琴葉葵「悲鳴。掠れる。声ではない声」

葵、声が途切れる。

霧も粒子も、光の明滅をやめる。

淡く灯るだけの単純な景色。

時が止まったような世界とあかり。

あかり。

あかり。

あかり、目を開ける。

光の薄い瞳で。

継星あかり「——」よろうてつ」

金の光が、一度、弾ける。

継星あかり「あなたの名前は、”よろうてつ”。今、名付けた。だから、見せて。私の視たいものを。私に視せて」

あかり、手を眼前に伸ばす。

周囲を取り囲む金の霧が激しく輝き始める。

金の粒子達が滅茶苦茶な動きで踊り狂う。

法則性のない運動をしたまま、あかりのもとへ雪崩れ込む。

あかりの指先に金の光が集結する。

あかりの手に集まった黄金の粒子が、螺旋を描いてあかりの顔に飛び込んでいく。

金の奔流、あかりの両眼へ吸い込まれる。

あかり、のけぞる。

金の霧が音もなく爆裂する。

金の世界が消え失せる。

第2幕・第4章：きれいなあのこ

琴葉葵「(M) 私を置いていかないで」

○あかりの小学校の教室？ (昼)

あかり、葵と共に教室の窓辺にいる。

ふたり、外を眺めている。

継星あかり「ねえ、見える？ あそこにいるアレ」

あかり、教室の窓から指さす。

示した先は、電線の通った鉄塔。

琴葉葵「(顔をしかめ) なんのこと？」

継星あかり「あの鉄塔の一番上にね、ウニとマリモを合体させたみたいなのがあるの。塔の上をぐるぐる回ったりして、おもしろいの」

あかり、笑う。

無邪気に。

あどけなく。

琴葉葵「……」

葵、その笑顔に見とれる。

琴葉葵「(はっ、として首を振りながら) 何も見えないよ」

継星あかり「じゃ、教えてあげる。面白いよー」

あかり、葵から目を離し、遠くを見やる。笑う。

葵、あかりを見詰める。笑わず。

手をぐっと握りしめながら。

琴葉葵「(M) あかりは、いつも楽しそうだった。楽しそうにそれを見てた。

私達が見えないことなどお構いなしに」

○あかりの小学校の教室？ (昼)

窓際のあかりの席。

あかり、授業中にも窓の外へ視線を向ける。

何かを見て微笑んでいる。

そんなあかりを見ている、葵。

○あかりの小学校の教室？（昼）

休み時間。

葵、姉（双子）の茜と喋る。

琴葉茜「あかりちゃん、最近どつかに1人でおって、なんやぼおつとどつかに眺めること多なつたな」

琴葉葵「でも、声かければちゃんと一緒に遊んでくれるよ」

琴葉茜「せやな。まあ、でも、1人でおって寂しいって感じでもあらへんし、心配することないやろうけど……おし、葵、あかりちゃん呼んで。アルゴやるで」

茜、カードゲームを机の上に展開し始める。

葵、頷いてあかりを呼びに行く。

あかり、やってきて微笑みながら卓につく。

3人、笑い合いながら遊ぶ。

琴葉葵「（M）あの子は同じ笑い方で、窓の外を見てた。いつも、遠くを」

○あかりの小学校・校舎の外の非常階段？（昼）

非常階段の最上段。

鉄柵ひとつ挟んだ向こう側が屋上。

あかり、その踊り場から遠くを眺める。

学校で一番高い場所。

風に煽られる三つ編み。

じつと何かを見詰める瞳。

葵、階段を上って声を掛ける。

琴葉葵「あかりちゃん、危ないよ?」

あかり、葵へ顔を向け、笑う。また遠くを見る。

琴葉葵「ねえ、戻ろうよ。お姉ちゃん待ってる」

継星あかり「うん。もうちよつとだけ。もう少しだけ見たら、戻るから」

あかり、その場から動かずに返す。

葵、手を握り、拳を作る。

琴葉葵「……そんなに、面白いの?」

継星あかり「面白いよ」

あかり、即応。

その早さに、葵、びくり震える。

継星あかり「骨がないのにきれいに歩くのが好き。雲に紛れて雲の真似してるのが好き。」

家の壁に張り付いて、電線を通って、地面に着かずどこまで体を伸ばせるか遊んでるのが好き。

影の中で泳いで跳ねてるタコみたいな鳥も、くるくる回る羽毛つきの岩も好き」

琴葉葵「……」

継星あかり「あれを眺めるのが好き。遠くてよく見えないことの方が多いけど」

葵、あかりを見上げながら尋ねる。

琴葉葵「あかりちゃんは、近くに行きたいの?」

あかり、きよとんとする。

一拍の間を置いて、ふふつと笑う。葵、それに目を奪われる。

継星あかり「うん、そうだね。きつとそう」

琴葉葵「あかりちゃん……?」

継星あかり「私が近付けばいいんだ。遠くにいるから、目を凝らさなきゃって思ってたけど、私の方からあっちに行けばいいんだ」

琴葉葵「(息を呑む)」

継星あかり「(葵の様子に気付かず)もつと近くで見たいな。行き方わからないけど」

あかり、楽しげに頭を揺らす。
葵、呆然とそれを見る。
握り拳を震わせる。痛いほど。

琴葉葵「(M)そっちにいたいのなら　こっちにいるのは　おか
しいでしょう?」

* * *

(フラッシュユ)

葵、同級生らに何かを告げる。

同級生ら、不安な顔になる。

* * *

琴葉葵「(M)わたしはこっち。あなたもこっち」

* * *

(フラッシュユ)

葵、姉の茜に何かを告げる。

茜、心配な顔で葵を見る。

* * *

琴葉葵「(M)いつしよにこっちにいないと、いつしよにあそべない」

* * *

(フラッシュユ)

あかり、授業中に外を眺める。

同級生ら、不安な顔であかりを見る。

茜だけ、心配げに葵を見る。
葵、無表情にあかりを見詰める。

* * *

琴葉葵「(M) だから、あなたはこっち」

* * *

(フラッシュユ)

あかり、自分の机に突っ伏している。

同級生たち、教室の端で群れ、遠巻きにあかりを見やる。

ひそひそ声が教室に染み渡る。

誰もあかりに近づかない。

ひそひそ声がいつまでも続く。

* * *

琴葉葵「(M) あなたはこっち あなたはこっち あなたはこっち」

* * *

(フラッシュユ)

葵、手を手で包む。

* * *

琴葉葵「(M) ひどい目に遭いたくないでしょう?」

○池の近くの空き地 (夜)

金の霧が晴れる。

完全な満月の夜空。

その下にある悠久の祠。

琴葉葵「いや……いやあ……」

葵、祠の前で仰向けに倒れている。

両手で顔を覆い、泣きじやくる。

継星あかり「……なんで」

あかり、その葵に近付いていく。ゆつくりと。

動きの残影に、金色の影が付着する。

継星あかり「なんで、あなたが、私を……？」

あかり、すすり泣く葵の横まで歩み寄る。

無表情で見下ろす。

継星あかり「友だちだと、思ってたのに」

琴葉葵「——私だって！」

叫び。

琴葉葵「私だって、友達だって思ってた！ 一番仲がいいって思っ

てた！ いつも一緒だった！ なのに……」

むせび。

琴葉葵「私達のことなんて見てなかったくせに、あっちばっか見て

たくせに。あんなに、あんなに」

泣く。

琴葉葵「……あんなにきれいに笑わないで……」

葵、顔を手で隠したまま、全身をわななさせる。

琴葉葵「そっちに行かないで……こっちにいて……なんのためらい

も後ろめたさもないみたいで、私のところから離れないで……」

あかり、見下ろす。

継星あかり「どうして、あんなことをしたの？」

琴葉葵「そっちに行かせたくなかった……そっちに行くなら、ひど

い目に遭うんだって教えたかった。そっちのことは見たり言ったり

したら、ひどい目に遭うの。それを、教えたかった」

継星あかり「……」

琴葉葵「ひどい目に遭うのがイヤなら、こっちにいて。こっちにい

て。あなたはこっちにいて。私たちのところにいる。こっちにいて

くれるのなら、また、元みたいに遊べるから……」

嗚咽。

琴葉葵「わたしを見て……あのきれいなかおで、わたしを見て……」

継星あかり「――」よろうてつ」

あかりの瞳が金色に染まる。

継星あかり「(低く冷く)私の心を見せてあげて」

あかりの全身から金の粒子が出現する。

それに呼応するように、葵の体からも銀色の粒子が現れる。

2つの粒子達が舞い踊り始める。

継星あかり「私はずっと、あなたたちの所に戻りたかった」

銀の流れがあかりへ飛ぶ。

金の流れが葵へ跳ねる。

あかりと葵の狭間で、金と銀が混じり合う。

金銀の融合体がふたりの頭上に浮上。照らす。

継星あかり「あなたたちがどれだけ私を怖がっても、それでも、私

はあなたたちが好きだった」

あかり、かまわず地面へひざまずく(浴衣は不思議と汚れない)

葵の顔に、自分の顔を近付ける。

継星あかり「この子の心を私に見せたんだから、私の心もこの子に

見せて、”よろうてつ”」

あかり、葵の顔へ腕を伸ばす。

葵の顔を覆う手を、掴む。

継星あかり「私の心を見せてあげて。この子の心を傷つけて。私の

傷を教えてあげて」

葵、ぶるぶると震えながら抵抗する。

あかり、無頓着にこじあける。

ゆっくり開かれた手の向こうに、汗と涙と鼻水でめちやくちやになつた葵の顔が現れる。

あかり、顔をさらに近付ける。

ぐちやくちやに崩れた葵の双眸と、あかりの金の瞳が、触れそうになるほど接近する。

継星あかり「——私を見るたび痛むといい」

葵、びくんと体が跳ねる。

あかり、そつと笑む。

継星あかり「ゆつくりと優しい声音」そして、私の心を見せたら、この子に今夜のことは忘れさせてあげて。夢の中の出来事にさせてあげて」

葵の怯える瞳。

妖しく煌めくあかりの瞳。

痙攣を起こす葵の体。

一顧だにしないあかりの腕。

どれだけ震えても触れることのないまなことまなこ。

彼女らを照らす金と銀。

よろうてつ。

継星あかり「あなたにあげる。一夜だけにくしみを」
微笑む。きれいに。

継星あかり「だから、いっぱいきずついて」

葵、叫ぶ。

金と銀の光が炸裂する。

空き地が再び金の霧に包まれる。

銀の粒子がそれに混じる。

葵の声も霧と光に吸い込まれて消失する。

金の霧を泳ぐ銀光が、葵の身に再び襲いかかろうとする。

「——子供をたぶらかす遊びは、品がないとゆかりさんは思います」

ピシ。

音が鳴る。

金の霧がひび割れる。

継星あかり「！」

匂い立つ。スマイレの香り。

あかり自身の匂い。嗅覚が戻る。

瞬く前に崩壊していく景色。

金の霧は消え失せ、月明かりに照らされた空き地が現れる。

三日月の下。

フードをかぶった少女。

結月ゆかり「今夜は私と同居人が遊んであげます。おいでなさい、池沼の生き物」

ゆかり、登場。

第2幕・第5章・さんがむりや vs よろうてつ（前哨）

○池の近くの空き地（夜）

あかりの体から金の粒子が新たに吹き出る。

中空を舞う銀色の粒子、ヘビのような鋭さでゆかりへ躍りかかる。

結月ゆかり「無駄です」

ゆかり、パーカーに手を突っ込んだまま迎え撃つ。

あかり、見る。

ゆかりの体から、細長く煌めく糸状のものが幾つも伸びるのを。

（同居人「さんがむりや」）

ゆかり、糸を壁にして防御。

蜘蛛の巣のように展開した糸の網が、銀の奔流を受け止める。

銀光、激突。

大量の銀粉、糸の表面にまわりつく。銀糸の壁ができる。

壁を突破できた銀はひとつもない。

糸、ネットのように組み合わさって大きく広がり、銀の粒子達を絡

め取っていく。

銀の細片、自分から糸に取り付く。眩く。

糸、銀の粉を大量に付けられて重くなり、地面でズサズサのたうち

回る。

ゆかり、新しい糸を幾つも放出。

銀、新たな糸へ纏わり付く。

糸、暴れる。振り払う。揉みくちやに。

金の霧、糸と銀の格闘を飛び越え、ゆかりの頭上に拡がる。

霧は濃さを増して煙に近くなる。輝く金粉を内包。

金煙の一部、くぼむ。

そこからひととき濃い煙が一条、高速で放射される。ガスと光点の

混合物。

ゆかりに向かつてひた走る。

結月ゆかり「無駄と言いました」

ゆかり、先ほどよりもずっと太い糸の束を肩口から一本生やす。

(パーカーの上から生えている)

糸の束は弾けるように枝分かれし、細かい繊維状の膜を形成する。

ゆかり、その膜で全身を包む。

直後、金色の煙をしたたかに浴びる。

薄膜が煌めく。

金煙、ゆかりを包み込む。

ゆかり、平然と眺める。

結月ゆかり「捕縛用の触手と互角なのは流石ですが、同居人のエネルギー吸収皮膜を突破するほどの力はない。あなたもそれは分かっているでしょう？」

ゆかりの肩胛骨あたりから、別の触腕が伸びる。動物の内臓と植物の根の中間のような造形。

新たな触腕、鋭く伸びてしなる。鞭のように。振り回す。

目にも留まらぬ峻烈な速さでゆかりの周囲を引き裂く。

金の煙が千々に乱され、かき消される。

煙は濃さを薄め、霧状に戻る。

霧の中にいた金の光達、霧から次々と飛び出す。

さらに高い位置へ結集。

金色に輝く粒子達が一ヶ所に塊を作る。

糸と格闘していた銀の粉が上昇。

金塊の表面を銀粉が覆う。

その金と銀の核を、薄い金の霧が大きく包む。

いびつな三層の透視天球儀。

ゆかり、それを見上げる。

結月ゆかり「なぜ未だにあかりさんの中へ入っていないのかは知りませんが、その状態で同居人に勝つことは出来ません」

金銀の核から、銀の粉が一筋、糸のように伸びる。

細かい輝きを撒き散らしながら伸びるそれを芯にして、霧が細長く

伸長。一本の腕を形成する。

掌も指もない霧の腕、ゆかりの触腕を掴み取ろうと試みる。

触腕、表面からぬめりのある分泌液を出して抗う。

分泌液に触れた金霧は軽さと活性を失い、重々しくゆっくり地面へ落ちる。

分泌液、霧に触れた箇所が固体化。ぼろぼろと剥がれ、散る。

触腕、失った液をさらに分泌。霧腕を叩き反撃する。

結月ゆかり「いつもと同じです。溶解用の触腕はあなたの力を上回る。攻防ともに私たちの勝ちです」

金の核と銀の粒子、その一部が輝き、規則的に瞬く。

ゆかりの触腕と皮膜、それに合わせるように淡く発光する。

ゆかり、目を細める。

結月ゆかり「おしゃべりはそこまでです」

触腕、枝分かれ。さらに素早く霧を薙ぎ払う。

金光、銀と霧の腕を増やして対抗。

叩き、ど突き、ぶつかり合う。

多腕同士の格闘。

あかり、その格闘を呆とした瞳で見やる。

継星あかり「あ……」

あかり、自分の目の前に、金の光の一部がいることに気付く。

その金の光の中に、黒い靄が見える。

蚊柱のような、恐ろしく小さく細かいものが大量に密集し、不規則に蠕動している。

金の粒と黒の靄が、形状を変える。

金の文字。

黒い靄が下地になり、書かれた文字を見やすくする。

” いまなら見られる ”

継星あかり「なに、を…？」

”

” あのおんなのかくしごと

継星あかり「はっ、と息を呑む」

”

” きさまはつれてかれない

継星あかり「なんのこと……」

” きさまはここ”

” あのおんなはあそこ”

” きさまはつれてかれない

”

継星あかり「なんのことだってば！」

あかり、叫ぶ。

黒靄、震えながら踊り狂う。

金文字、形を変えて示す。

あかり、それを見る。

目を瞪る。

継星あかり「——うそ……」

突如、騒音が発生する。

羽虫の飛翔する音。

弦楽器が滅茶苦茶に掻き鳴らされる音。

空電ノイズの雑音。

それらを無理やり束ね、人間が聞こえるような領域に落とし込んだ
ような騒音で、嗤う。

” よろうてつ”の哄笑。

ゆかりの前で格闘していた三重の球体、輝きを急速に増す。そして唐突に、夜空へ向かって急上昇。三日月を一瞬だけ包み、幻のように消える。

沈黙。

ただの空き地になる。

結月ゆかり「……あかりさん」

ゆかり、触手と触腕を全て体の内に納め、ゆつくりとあかりに近付いていく。

あかり、ゆかりを震えた瞳で見詰める。

結月ゆかり「ご無事ですか？」

継星あかり「(青ざめた顔)」

結月ゆかり「もう少し早く気付けば良かったのですが、申し訳ありません」

継星あかり「……」

結月ゆかり「さほど悪さはされていないように見受けられますが、今日のところは帰って休みましょう。そちらの、お友達も気を失われているようですし」

ゆかり、地面に横たわる葵を指さす。

葵、失神中。表情が負の激情で歪んでいる。

あかり、口をもごもごと動かし、何か言おうとし、結局は何も言わず。

ただ頷いて見せる。

ゆかり、ほつと息を吐く。

結月ゆかり「お友達は私が運びます。あかりさんは、足元に気をつけて下さい」

ゆかり、葵を無造作に抱え上げる。

あかり、その2人を眇める。

発破音。

頭上で大きな光が広がる。

花火。

赤と緑、黄色の星弾。輪になって華になって夜空を彩る。鮮やかな光。あかりとゆかりを照らす。

その光はあかりの瞳に入らない。

あかり、光のない瞳でゆかりを凝視する。無言のまま。

あかりの瞳、一瞬だけ瞬く。

金色に。妖しく。

第3幕・第1章：屋上にやってきた継星あかり

○結月家・居間（朝）

あかり、ゆかり、ゆかり父母。4人で食卓を囲み、朝食を摂る。
窓の外、曇天。

テレビ「——非常に強い台風18号は勢力を保ったまま、本日の夕方頃に本州へ上陸する見込みです。交通機関への影響が懸念されますので、早めの帰宅を心掛けるようお願い致します」

ゆかりの両親、台風という単語に肩を震わせ、ゆかりを見る。

ゆかり、水の入ったコップを前にして瞑想。

継星あかり「（抑えた声）……ごちそうさまでした」

あかり、両手を合わせて頭を下げる。

料理は半分ほど食べ残している。

ゆかり父母、驚きの顔。

ゆかり母「大丈夫？ 具合悪い？」

継星あかり「（表情を曇らせ）ごめんなさい。食欲がなくて……」

ゆかり母「無理しないで。私たちが食べるから、気にしないでね」

継星あかり「ありがとう。ごめんなさい」

ゆかり母「（一瞬、たじろいで息を呑む）」

あかり、頭を下げながら席を立つ。自分の部屋に行く。

ゆかり父「あかりちゃん、お祭りに行ってから調子悪そうだけど、大丈夫かな」

ゆかり母「……」

ゆかり父「花火見せて友達がいきなり気を失ったって言ってたら、ショックなんだろうけど」

ゆかり母「え、ええ……」

ゆかり父、ゆかり母へ訝しみながら、あかりの料理を下げようとする。
る。

結月ゆかり「（あかりの皿を、自分の手元に掴み寄せる）」

ゆかり父、驚く。

結月ゆかり「私が」

ゆかり、皿を持ったまま席を立つ。自分の部屋に下がる。
ゆかり父母、不安の顔。

○コンビニエンスストア前（昼）

店員（声のみ）「ありがとうございますございましたー」
店の遠景。

あかり、店の自動ドアから外に出る。

手にビニールの買い物袋。

朝より悪化した曇り空の下を進む。

○公園（昼）

（あかり達が水鉄砲で遊んだ公園）

あかり、水飲み場で蛇口をひねる。全開。

勢いよく放出した水があかりの顔を直撃する。

あかり、水を飲まない。顔に水をかけ続ける。

しばしその姿を維持。

きゅ、と蛇口を閉める。

ボタボタとあかりの顔や髪から水が垂れる。

不意に、水の滴りが止まる。

継星あかり「顔を上げる」

水気は完全に乾いている。

あかり、曇天を見上げる。

雲、さらに濃くなる。

○結月家・居間（昼）

ゆかり母、食卓につき、顔を両手で覆う。

ゆかり父、ゆかり母の前にコーヒーの入ったカップを置く。

ゆかり母「ゆかり父を見ずに」……あかりちゃんが、一瞬だけ、あの子に見えた」

ゆかり父「……」

ゆかり母「（疲れ果てた声）私は、ひどい母親」

ゆかり父「そんなことはない」
ゆかり母「あかりちゃんを、本当の娘みたいに思ってたくせに。ゆかりに似てると思ったら……いきなり、突然、ものすごく遠くに感じた」

ゆかり父「(哀しみの眼差し)」

ゆかり母「ゆかりにも、同じことを感じてるの。実の娘なのに」

ゆかり母、肩を震わす。

ゆかり母「ひどい、母親」

ゆかり父「(ゆかり母の肩を優しくさする) そんなことはない」

ゆかり、音もなく部屋に現れる。

手には皿。

(あかりの料理が乗っていた皿)

ゆかり母、はつと顔を上げる。

ゆかり父もゆかりを見る。

ゆかり、皿を台所の食器入れにしまう。

結月ゆかり「(両親に目を向けず) 天気が心配なので、あかりさんを迎えに行ってくる」

ゆかり父「あ、ああ。気をつけて」

ゆかり母「(青ざめた顔のまま見詰める)」

ゆかり、部屋を出て行く。

その直前、呟く。

結月ゆかり「……あの子は、私みたいにはならない」

○廃材置き場(昼)

解体された建物の建材や、廃車の部品で構成された山の麓。

分解済みの工業機械が重なる中腹。

廃棄された家具でできた山頂部。

あかり、廃材の山の先端に佇む。

継星あかり「(空を見上げる。表情は何えない)」

頭上は曇天。

遠く、雷鳴。

○結月家のあるマンション・屋上（昼）

ゆかり、内階段の最上階から扉を開け、屋上に現れる。

濃灰色の雲が分厚く広がる空。

腰ほどの高さの鉄柵に囲われた屋上スペース。

あかり、佇んでいる。背を向けて。

手にビニール袋が下がっている。中身あり。

結月ゆかり「あかりさん」

継星あかり「背を向けたまま）……おばさん、気を悪くしてたかな。

朝ごはん残しちゃったから」

結月ゆかり「……」

継星あかり「ゆかりさんも、この前はごめんね。葵ちゃん負ぶって
もらって」

あかり、振り返る。

顔をゆかりに向ける。

薄い微笑みを浮かべて。

継星あかり「（ビニール袋に手を入れ）朝ごはん食べないで、こんなの
買ったっておばさんに知られたら、怒られるかな」

あかり、ビニール袋から中身を取り出す。

串付きのフランクフルトソーセージ。

結月ゆかり「（目を細める）」

継星あかり「葵ちゃん、何も覚えてなかったよ。あの空き地に向
かってつたとこまでしか覚えてなかった」

結月ゆかり「あかりさん」

継星あかり「なあに？」

結月ゆかり「どうやって、屋上の扉の鍵を開けたのですか？」

ゆかり、自分が通ってきた扉を見やる。

結月ゆかり「ここは常に施錠されています。専用の鍵がなければ内
側からでも開けられません」

継星あかり「（変わらない微笑み）」

結月ゆかり「私はいつも同居人に頼んで開けてもらっています。しかし、あなたは」

継星あかり「(遮り) 私ね、これ好き」

あかり、片手でケチャップソースの小パックを取り出し、もう片手で持ったソーセージへ掛ける。

赤いソースをふんだんに、最後の一滴まで塗りたくる。

継星あかり「友達はケチャップ甘すぎるとか、マスタード辛すぎるとか言うけど、私は大好き」

あかり、マスタードのパックも取り出し、同じようにまんべんなく塗りつける。

継星あかり「いただきます」

あかり、ソーセージを口に頬張る。

先端を舌で舐め、軽くしゃぶり、噛み切る。

ソーセージを一度、口から離す。

(千切れた肉片を舌で絡め取り、ケチャップとマスタードに混ぜ合わせ、奥歯で入念に搗り潰す)

(原型を無くした肉に唾液とソース類をさらに混ぜ込み、口の中で転がす)

ごくり、と嚥下する。

あかり、再びソーセージを、今度は横笛を吹くような姿勢で食む。

先にケチャップとマスタードを舌で舐め取る。

前歯で肉を小さく嚙る。

挟る。

肉片を一度口に入れ、また噛み、口の奥へ送る。

少しずつ肉を削っていき、ある程度のところで大胆に口を動かす。

一気に噛み潰す。

(数個の肉が挽かれて溶かされ、一塊の不定形になる)

(舌がそれを細やかな動きで何度も裂き、前歯と奥歯が再び噛み潰す)

(これらを数回繰り返す)

(そしてゆつくりと、食道へ送り込む)

串の根本に残った最後の肉片。

あかり、それを愛おしむように口づけ、前歯を食い込ませる。肉を歯で固定し、慎重に串を引き抜く。きれいに串が抜ける。

あかり、それを満足げに見やり、丁寧に肉を口の奥に迎え入れる。しばしの咀嚼を重ねた後、嚥下。

継星あかり「(目を伏せ)ごちそうさま」

あかり、口元に赤いケチャップを付けながら、ゆかりに目を向ける。継星あかり「私、これがとても好き。なのにね」

あかり、口についたケチャップを指で掬い取る。

指先にかかったケチャップを舌先で舐め取る。

大きく口を動かし、しっかりと飲み込む。

継星あかり「——味が、しないの」

結月ゆかり「(僅かに瞠る)」

継星あかり「あのお祭りのあった日、私の中で何かが開いたの」

結月ゆかり「あかりさん……」

継星あかり「まるで開けられた水門から流れ込んでくる川の水みたいに、私に注ぎ込まれるものがあるの。隅々まで染み通って、私に力をくれる。あの生き物たちを視て、感じ取れる、力が」

あかり、凝視。

淡く金色に染まる瞳で、ゆかりを。

継星あかり「今なら」さんがむりや”だ”って視える。ゆかりさんの

”さんがむりや”」

ゆかり、視線を受け止める。微動だにしない。

あかり、目を細める。うつすら笑って。

継星あかり「(平板な声)ゆかりさん」

結月ゆかり「……」

継星あかり「(温もりを無くした声音で)ねえ、ゆかりさん」

結月ゆかり「なんででしょう」

あかり、はつきりわらう。

明るみのない顔で。

継星あかり「——私に隠してること、あるでしょ？」

第3幕・第2章：ばうちすも

○結月家のあるマンション・屋上（昼）

結月ゆかり「隠し事？」

ゆかり、表情なく小首を傾げる。

結月ゆかり「あかりさんに隠していることなど何もありません」

継星あかり「私に嘘をつくことは？」

結月ゆかり「ありません」

継星あかり「じゃあ、来年、ゆかりさんはこの家にいる？」

結月ゆかり「……」

継星あかり「来年も、こうして一緒に遊んでくれる？」

結月ゆかり「……」

継星あかり「来年も、再来年も、私と一緒にいてくれる？」

ゆかり、沈黙。

あかり、眉根を寄せる。

継星あかり「（低く）……やっぱり、よろうてつの言ったことは本当なんだ」

結月ゆかり「あの性悪が、何か吹き込んだのですか？」

継星あかり「よろうてつが言ってた。ゆかりさんはどこかに行っちゃうって」

あかり、苦しみの表情で呻く。

継星あかり「ゆかりさんは——誰にも会わないところに、独りで行っちゃうんでしょ？」

継星あかり「私を、置いて……」

ゆかり、目を細め、表情を完全に消す。

あかり、ゆかりの変化を見てたじろぐ。

（初めて見るゆかりの表情に、齒を鳴らす）

継星あかり「（絞り出す声で）ねえ、なんで？ どうして？」

結月ゆかり「……ここが、私の棲み処ではないからです」

ゆかり、屋上からの景色を見やる。

町並み。

人間達の家々。

結月ゆかり「以前にも言ったように、月に住むウサギは、地球のウサギとは違います。その中身の異形さ故に、地球に住み続けることは出来ないのです」

継星あかり「じゃあ、月に帰るの?」

結月ゆかり「そうなります」

継星あかり「どうやって?」

結月ゆかり「同居人が行います。あかりさんの眼をもつても視ることの叶わない深い領域まで、私を連れて行きます」

継星あかり「……やっぱり、私を置いてくんだ」

あかり、ビニール袋を床に落とす。視線も床へ。

(手と肩を震わせて)

継星あかり「(俯き) 私はね、みんなのところに戻りたかった。けど、もう、戻れなくなっちゃったの」

あかり、両手を胸の前で合わせる。

継星あかり「視えない子は、視える私がどこかに行つちやうって思うみたい。だから、私は視えちやダメなんだって。視えなかつたら、戻ってきていいって」

継星あかり「(首を大きく横に振り)でも、もう、無理。もう戻れない。”さんがむりや”さえ視えちやう私じゃ、もう……”

あかり、両手で顔を覆う。

継星あかり「(くぐもった声)だから、視えちやう私は、ゆかりさんの傍にいるしかないの」

あかり、肩を震わせ。

継星あかり「今なら、ゆかりさんの気持ちが分かる」

結月ゆかり「……」

継星あかり「どこにも、誰のところにも入れない、このズキズキするドロドロの気持ち、分かる」

結月ゆかり「……」

継星あかり「だから、ここに居続けて苦しみ続けるくらいなら、”さんがむりや”達の場所に行く方がいいのも、今なら理解できるの」

あかり、手で顔を覆ったまま、首をぶんぶんと横に振る。
継星あかり「あなたを思いやったら、邪魔しないのが一番いいって分かるの。私の中の良い子が言うの。でも、でもね」

* * *

(フラッシュユ)

(黒い靄に金の文字)

”ほんしんをさせ”

* * *

継星あかり「……よろうてつが言うの」

* * *

(フラッシュユ)

”ほんしんをさせ”

”ほんしんをおおうきさま

のりようしんを”

”わたしのせんれいがうち

くだく”

* * *

結月ゆかり「たぶらかされているのです、あの悪質な生き物に」

継星あかり「そうかもしれない。けど、”よろうてつ”は私にいろんなものをくれる。この屋上も開けてくれた。私の願いを叶えてくれる」

あかり、手を離して顔をさらす。

小さく笑み、ゆかりを見詰める。

継星あかり「弱々しく」ねえ、ゆかりさん」

結月ゆかり「……」

継星あかり「(震える肩)これが最後。最後の、お願いなの」

継星あかり「私の願いを叶えて。”よろうてつ”なしで、私の願いを叶えて」

結月ゆかり「……」

継星あかり「……ずっと、私のそばにいて
遠く、雷の音。

一陣の強風が、2人を横殴りにする。

あかりの長い髪が吹き流される。

ゆかり、パーカーのフードと裾がはためく。

風が収まる。

沈黙。

沈黙。

沈黙。

沈黙。

ゆかり。

ゆかり——首を横に振る。

継星あかり「(目を見開き、息を呑む。わなわなと震えながら)」

あかり、口元を噛み締める。

あかり、眉根を寄せ、眉尻をつり上げる。

あかり、ゆかりを睨み付ける。

(熾烈な感情を込めて)

あかり、ゆっくり形相を歪ませる。

憤怒。

あかりの双眸、染まる。

黄金に。

継星あかり「——」よろうてつ」

(周囲の光量が落ちる)

継星あかり「私に洗礼をして」

(陰が濃くなった屋上の影から、黒い靄が沸き立つ)

継星あかり「私の中に住み着いて。私の願いを叶えて」

(小さく低い笑い声。影から囁く)

継星あかり「よろうてつ！」

ぞぶり

黒の靄、あかりを包む。

ゆかり、あかりへ手を伸ばしかける。

その腕が、唐突に炎に包まれる。

(金色の炎)

唐突に現れ、煌々と輝く金の火焰。

結月ゆかり「(不愉快げに表情を歪めながら、炎に包まれた腕を払

う)

払い落とされた火は火の粉となって宙を舞う。

金の粉。

空で波紋のように広がりながら、集合と拡散を繰り返す。

(いつの間にか、黒の靄が上空全域を覆っている)

(金の輝き達は、その黒い空で舞い遊んでいる)

金の領域の周縁部を、銀の砂塵が漂う。

一部の銀砂は金の中に混じり、煌めきを増していく。

濃く暗い曇天に、偽りの星屑が踊る。

金と銀の星図。

その下にいる、あかり。

黄金色の瞳。

銀の粉で飾られた髪。

体内から溢れては消える黒い靄を、羽衣のように纏う。

(風に煽られて翻る靄の束が、何かしらの翼にも似て)

”よろうてつ” 継星あかり。

継星あかり「……」

（あかり、腕を無造作に掲げる。

広げた掌の上に、黄金の粒子が球状となって密集する。

黒い靄、その金の球を丸く包み込む。

（光を放たない、暗黒の球状物体）

黒い球体が、身じろぐ。

第3幕・第3章・さんがむりや vs よろうてつ（開幕）

○結月家のあるマンション・屋上（昼）

黒い空に張り付く銀色の光、膨張。

膨れあがった光の塊、蹴り飛ばされるように屋上へ放たれる。

ゆかりのもとへ。

（光弾、発射）

結月ゆかり「素早く対応。手を上へ向ける」

体から捕縛用の糸を展開。編み込んだ糸の壁を頭上に掲げる。

（祭りの夜に銀の光を退けた、捕縛用の触手）

（腕そのものも、エネルギー吸収用の皮膜で包む）

光の塊、彗星の如く銀色の尾を引いて糸の壁に直撃。

無音。しかし空気が震える。

銀光が爆発。糸の壁を巻き込んで炸裂する。

強烈な圧力に耐えきれず、糸の壁がばらばらに吹き飛ぶ。

（防壁、破壊）

銀光の残滓、ゆかりに降り注ぐ。

ゆかり、掲げた腕に展開していた皮膜でその光を吸い込む。無傷で

済みます。

結月ゆかり「これは……」

吹き散った糸の破片を浴びながら、ゆかり、あかりを見詰める。

継星あかり「（暗黒の球体をゆかりにかざす）」

結月ゆかり「（目を細め、構える。肩口から触腕を3本生やす）」

ゆかりの触腕、分泌液を滴らせながら高速であかりに肉薄する。

あかりの黒球、再び蠕動。

上空で踊る金の星から、鮮光が直線状に閃く。

レーザービーム。

猛烈な勢いで迫っていた触腕の全てを、上空からのレーザーが切り刻む。

(八つ裂きにされる触腕)

金の光刃、切断された触腕の破片達を執拗な動きでさらに細かく斬り飛ばす。

何条もの光の剣が、あかりを彩る。

あかり、笑う。

金の瞳を輝かせて。

継星あかり「さんがむりや」の攻撃は、もう私に届かない」

結月ゆかり「目を細め）……それを招き入れてまでして、この後、私をどうするのですか？」

継星あかり「(目を見開き) ゆかりさんを植民地にする」

星屑が瞬く。

継星あかり「さんがむりや」をゆかりさんから駆逐して、”よろうてつ”をゆかりさんの中に棲ませるの。そうすれば、ゆかりさんはずっとこつちにいる。私を置いてどこかにいなくなる」

結月ゆかり「つまり、私を支配したいのですね？」

継星あかり「……うん、そう。そうだね。そうだよ」

あかり、恍惚の相貌で甘やかに微笑む。

継星あかり「私はゆかりさんを隅々まで支配する」

あかり、黒の球体に片方の手を突っ込む。

球体が揺れる。

黒に飲み込まれた腕を、重々しく引き抜く。

継星あかり「なんのためらいもなく、どこかに行かれるくらいなら……」

あかりの引き抜いた腕に、色のついた風が纏わり付く。

(球体から七色の風が噴出する)

赤、緑、青、黄、紫、藍、橙。

色とりどりに染め上げられた何陣もの疾風が、あかりの腕を軸にし、大きく渦を巻いて踊り狂う。

(七色の風から罅割れた笑い声が囁く)

あかり、風が巻かれたその腕を、ゆっくり振り上げる。
万華鏡めいて色彩を変化させる風達が、螺旋状に密集。
竜巻を形成し、膨張。

(それはひとつの巨大な剣だった)

(七色に閃く竜巻の大剣を振りかざす)

ゆかり、瞬時に触手糸、触腕を再び生やす。

(太い触腕を幾つも交差させ、分厚い楯を作る)

(触腕の壁の外側に、糸の壁を3枚展開。重ねる)

継星あかり「——あなたを私のものにしてやる」

あかり、振り下ろす。

結月ゆかり「!」

ゆかり、両手を前方に広げる。

七色の嵐が迸る。

扇状に爆走する激風が屋上の空間を蹂躪。自然空気を吹き飛ばす。
渦を巻く暴風から金と銀の放電。床が灼かれる。

暴虐のそのもののような竜巻の切っ先が、ゆかりの4重防壁に叩き
付けられる。

(3枚の触手壁、触腕の楯、それらが容易く容赦なく破壊される)
防壁を蹴散らした七色の竜巻を、ゆかりの両手が押し止める。

(ゆかりの両手には、エネルギー吸収皮膜)

荒ぶる烈風がゆかりの手に触れて力を無くす。嵐はそよ風に堕ち
る。

(くすくす、笑いが風から弾ける)

——不意に、あかりの両手に、何かが刺さる。

黒い針。

10センチ程度の長さ。

エイの毒針のような返しが付いている。
それが全部で4本。

(針は吸収皮膜を突破していない)

(しかし落下せず、突き立てられたまま)

あかりの黒い球体、瞬間的に収縮する。

針、爆裂。

(耳をつんざく轟音)

若竹色の火柱が、巨人のような大ききで黒い空に吹き上がる。

鮮やかな業火は衝撃波となつて、屋上全体を舐める。

(屋上、炎の海と化す)

翡翠色の炎、ゆかりの両手を灼く。

ゆかりの手、皮膚が裂ける。出血。

ゆかり、血を流す。

結月ゆかり「(驚きに瞪る)」

負傷で姿勢を崩したゆかりに、七色の凄風が怒濤となつて押し寄せ
る。

竜巻、ゆかりを屋上の端まで軽々と蹴散らす。木っ端のように。

ゆかり、吹き飛ばされる。鉄柵に引っかかる。奔流が止まらない。

あかり、暴風の放射を続ける。

(たつぷり5秒)

(5秒の後、ようやく猛風が収束する)

(炎も幻のように消えている)

結月ゆかり「……(屋上の端で俯す。あちこち焦げ付いたパーカー。
裂傷を負う皮膚。動けない)」

継星あかり「ほら、やっぱり」

あかり、満足げに微笑む。

継星あかり「あなたの”さんがむりや”より、私の”よろうてつ”
の方が強い」

七色の風、黒い球体の中に戻る。

頭上を支配していた暗黒の星図、徐々に薄くなっていく。

あかり、ゆかりを見下ろす。笑みを消して。

継星あかり「ねえ、ゆかりさん。なんで、私をここに呼んだの？」

結月ゆかり「……」

継星あかり「いなくなっちゃうなら、なんで私と一緒に過ごしたの？」

結月ゆかり「(小さい声)……私では、父と母を慰めることができないから」

ゆかり、俯せのまま応える。

(顔は上げない)

結月ゆかり「両親がどれだけ私に食事を作っても、努力しても、報われることはないから。私相手では……」

結月ゆかり「だから、私とは違う、彼らに伝えてくれる子が欲しかった……」

継星あかり「ゆかりさんの、代わりが欲しかったの？」

結月ゆかり「……」

継星あかり「いなくなっちゃうゆかりさんの代わりに？　一緒に食べと一緒に笑う子供が欲しかったの？」

結月ゆかり「……そうです」

継星あかり「(震える。握り拳を作る。怒りに滲む声)……ふざけないで」

結月ゆかり「……」

継星あかり「私は、人形じゃない。ゆかりさんの代わりなんてイヤだ。絶対にヤだ」

あかり、背後に後ずさり、鉄柵へ近付く。

継星あかり「私が代わりを演じたら、ゆかりさんはどこにいるの？」

結月ゆかり「……」

継星あかり「(すがる声)あなたが欲しいの。ゆかりさんあかり、鉄柵に背中を預ける。

(空にあった偽りの星々は消失している)

(曇天が再び姿を現す)

継星あかり「……海で、待ってる。みんなで遊んだ、あの海で」
あかり、黒い霧を大きく全身に絡ませ、その場を跳ねる。

鉄柵の上に軽々と乗る。爪先だけで立つ。

結月ゆかり「(顔を上げて) 私が、そこに行かなかったら?」

継星あかり「海で待ってる」

あかり、翼のように黒い霧を広げ、鉄柵の後ろへ飛ぶ。

屋上から身投げする。

継星あかり「あなたを、待ってる」

あかり、落ちる。

ゆかりの視界から消える。

何の音も発生しない。

結月ゆかり「……………」

ゆかり、独り、残される。

雷鳴が響く。遠く。低く。

継星あかり「(M) 私達の最後の海——決戦が始まる」

第3幕・第4章：はらいそのけらくを知らぬあん
じよ 中天よりころてるに下りけり

* * *

(フラッシュユ)

ゆかり母、入院。

小学生ゆかり、遠くから病床の母を見やる。

ゆかり母、顔を覆い、泣き続ける。

* * *

○結月家・ゆかりの部屋(昼)

ゆかり、明かりも付けず部屋に立ち尽くす。

手をじっと見詰める。

傷つき、血が流れていた手。

出血は止まっている。

その傷口がみるみるうちに小さくなり、そして無くなる。

手以外の傷も完全に修復される。

結月ゆかり「……」

ゆかり、焦げ跡の残るパーカーを腕の中で丸める。

淡く光り、パーカーが消滅する。

「さんがむりや」の消化作用)

結月ゆかり「(小さく溜息)」

ゆかり、クローゼットから新たなパーカーを取り出し、羽織る。

ふと、机の上を見る。

香油の瓶。

(祭りの夜にあかりへ塗った、スマイレの香りのオイル)

結月ゆかり「……」

ゆかり、部屋を出る。

○結月家・居間（昼）

ゆかり父、居間で書類仕事をしている。

窓から見える空模様はさらに荒れており、ひどく暗い。

ゆかり、居間に入る。

ゆかり父「顔を上げ、やや表情を強張らせ）おかえり。あかりちやんは？」

結月ゆかり「海に行った」

ゆかり父「それは危ない」

結月ゆかり「危ないね」

ゆかり父「……喧嘩でもした？」

結月ゆかり「実は、した」

ゆかり父、驚きの顔。

ゆかり父「解決できそうかい？」

結月ゆかり「……あの子の望みは、きっと私の望みと違うから」

ゆかり父「僕が迎えに行こうか？」

結月ゆかり「ううん……あの子をここに呼ぶことに賛成した日から、こうなることは分かった。私達は必ず喧嘩になる」

ゆかり父「そっか」

ゆかり父、強張らせていた表情を緩める。

ゆかり父「（ふふつ、と笑い）ゆかりも喧嘩とかするんだなあ」

結月ゆかり「衰弱しきった母さんを相手に喧嘩するほど、私は弱い」

ゆかり父「うん」

結月ゆかり「母さんにも私にも悲しむ父さんに喧嘩するほど、私は鈍くない」

ゆかり父「うん。（目尻を下げ、哀しげに）……ごめんな、こんな父親で」

結月ゆかり「……私は」

ゆかり、窓の外を見やる。

黒に近い雲がおそろしい速さで流れてる。
強風がばりばりと窓ガラスを叩く。

結月ゆかり「私は、良い子じゃないから」

ゆかり父「ゆかり」

結月ゆかり「なに」

ゆかり父「ありがとう。あのとき、あかりちゃんをうちに呼ぶことに賛成してくれて」

ゆかり父、頭を下げる。

微笑みながら。

結月ゆかり「……」

ゆかり父「きみと喧嘩できるあの子は、僕たちより全然強いな」

結月ゆかり「あかりさんは怒ってた」

ゆかり、瞳を細める。

結月ゆかり「結月ゆかりの代わりじゃないと、怒ってた。私達全員から拒絶されて、この家で居場所を無くすかもしれないのに。構わないほど怒ってた。きれいな怒りで」

ゆかり、はにかむ。柔らかく。

結月ゆかり「すてきな子。とても、素敵な子」

* * *

(フラッシュ)

幼い頃のゆかり。

火の付いたガスコンロに手を入れる。

ゆかり母、大げで叫び、ゆかりを抱き上げる。

ゆかりの手、無傷。

ゆかり、不思議そうな顔で母を見上げる。

* * *

○海へと続く坂道(昼)

ゆかり、坂道を歩く。

強風の中に小雨が混じる。

ゆかりには雨も風も通らない。

結月ゆかり「……」

ゆかり、進む。

人も車も通らない道。

(傍らには誰もいない)

* * *

(フラッシュユ)

幼いゆかり。

父と共に台所に立つ。

台所に置かれた、未調理の野菜類。

ゆかり、その野菜に触れる。

野菜、消失。

ゆかり、満足げに頷く。

ゆかり父、悲しげな顔でじつとゆかりを見て、首を横に振る。

* * *

* * *

(フラッシュユ)

幼いゆかり。道路を横断しようとする。

暴走するトラックが突っ込んでくる。

衝突。

トラック、完全停止。

ゆかり、吹き飛ばされることも傷を負うこともない。

涼しい顔で道を渡る。

* * *

* * *

(フラッシュユ)

ゆかり、小学校で持久走。

スタートと変わらない速度で走る。

苦しさに耐えるクラスメイト達を置き去りにし、平然と走り続け

る。

* * *
* * *

(フラッシュユ)

ゆかり、小学校の絵の授業で、不可視の生物群を描いて提出。
教師、困惑。

* * *

* * *

(フラッシュユ)

小学校の調理室。調理実習中。

油に引火して火の手が上がるコンロ。

ゆかり、手をかざして火を消す。

目撃するクラスメイト達。

* * *

* * *

(フラッシュユ)

ゆかり、母の料理を食べる。

ゆかり母、期待の眼差し。

ゆかり、首を横に振る。無表情で。

ゆかり母、落胆。肩を落とす。

* * *

* * *

(フラッシュユ)

ゆかり、小学校の絵の授業で、不可視の生物群を描いて提出。
教師、困惑。

* * *

* * *

(フラッシュユ)

小学校のクラスメイト達、着替えて教室から廊下に出る。

体操服のゆかり、3階の教室の窓から飛び降りてショートカット。

そのまま校庭で準備運動を始める。

* * *

* * *

(フラッシュユ)

小学生ゆかり、課題の野外写生中。

ネコの死体に群がるカラスを写生。

カラスが去った後、ネコの死体に触れ、消す。

* * *

* * *

(フラッシュユ)

ゆかり母、学校に呼び出される。

教員達にひたすら謝る。

* * *

* * *

(フラッシュユ)

ゆかり、小学校の廊下を歩く。

すれ違う生徒も教師も、皆ゆかりを避ける。

* * *

* * *

(フラッシュユ)

小学校の給食時間。

ゆかり、給食を前にして全く食べない。

クラスメイト、誰もゆかりに話しかけない。

* * *

* * *

(フラッシュユ)

ゆかり母、入院。

小学生ゆかり、遠くから病床の母を見やる。

ゆかり母、顔を覆い、泣き続ける。

* * *

* * *

(フラッシュユ)

ゆかり、マンションの屋上に佇む。独り。

* * *

結月ゆかり「……」

* * *

(フラッシュユ)

あかり、結月家の玄関に入り、お辞儀をする。

* * *

* * *

(フラッシュユ)

あかり、ゆかり母の料理にはしやぐ。

* * *

* * *

(フラッシュユ)

あかり、ゆかり母と一緒に台所に立つ。

* * *

* * *

(フラッシュユ)

あかり、夜の海でキャンプファイヤー。ゆかり父と談笑。

* * *

* * *

(フラッシュユ)

あかり、居間で夏休みの宿題。解けず唸る。

ゆかり、助言。

あかり、顔を輝かせて解き始める。

ゆかり、見守る。

あかり、両手を挙げてガッツポーズ。

ゆかり、拍手。

* * *

* * *

(フラッシュユ)

ゆかり、浴衣のあかりの髪を梳く。

あかり、ゆかりに身をゆだねる。

* * *

* * *

(フラッシュユ)

あかり、笑う。

* * *

○結月家・居間(回想)

結月ゆかり「父さん」

ゆかり父「うん？」

結月ゆかり「……お願いが、あるの」

ゆかり父「なんだい」

結月ゆかり「ご飯を、作っておいて」

結月ゆかり「あの子が食べるから。きつとたくさん食べるから」

○海へと続く坂道(昼)

ゆかり、坂の終わりに辿り着く。

坂道に接続された、コンクリートの堤防。

その向こうに広がる砂浜。

荒々しく波打つ海。

暗黒の曇天。

少女。

継星あかり。

結月ゆかり「……」

ゆかり、堤防を軽い動きで飛び越える。

波打ち際に佇むあかりに近付く。

あかり、ゆかりに気付き、振り向く。笑む。大人びた笑い方。

継星あかり「ゆかりさん」

結月ゆかり「あなたを」

ゆかり、暴風雨の中を貫く声で鋭く告げる。

結月ゆかり「あなたを、”よろうてつ”から略奪しに来ました」

ゆかりの周囲の雨と風が静止。

雨雫が力なく砂浜に落ちる。

力を奪う領域が急激に広がる。

（”さんがむりや”展開）

結月ゆかり「あなたを私の植民地にしてあげます、あかりさん」

第3幕・第5章・さんがむりや vs よろうてつ（骨髄を灼く熱情。骨肉。相愛）

○海の浜辺（昼）

ゆかり、腰からツル草に似た茎を生やす。何本も。

先端部は刀剣状の硬質な突起。色は黒。枝分かれした茎の全てに備わっている。

また脇腹からも、樹の枝そつくりの器官が生える。

枝には葉が生い茂り、その先に指先ほどの赤い実が密集している。ナンテンに近い姿。

（“さんがむりや”の武装）

結月ゆかり「発射」

赤い実が輝く。

継星あかり「！」

あかり、手を前へかざす。

黒い靄、あかりの体から吹き出る。繭のようにあかりを覆う。

（同時）赤い実、全て弾け飛ぶ。

黒い靄、爆裂。

紅色の爆発が黒の靄の密集を消し飛ばす。

黒の繭を引き千切り、あかりの姿を晒す。

継星あかり「すごい」

あかり、眩きながら手を今度は上へ挙げる。

頭上の黒雲に、金の光点と銀の砂が踊るように出現。

二種類の光の乱舞が一気に拡大。浜辺を覆い尽くす。

（“よろうてつ”の偽星図）

銀光、急速に輝度を増す。

光の塊を無数に発射。

（砲撃）

ゆかりの黒いツタ、先端がロケットめいた動きと速さで上昇。銀光

の砲弾と瞬く間に衝突する。

(迎撃)

銀色の炸裂。海の大気が震動で揺さぶられる。

破壊の烈光を引き裂いて、黒い剣のツタが無傷で飛翔。

黒剣、金の星々へ肉薄する。

金の星、瞬く。

黄金色のレーザービーム放出。薄暗い砂浜が格子状に彩られる。

一瞬だけ。

整然とした光の刃の彩りを、黒剣が乱雑に叩き壊す。

(金の光刃を黒い剣が跳ね返す)

黄金のレーザー刃は黒い刀身を切断できず、反射される。

レーザー発射口である金の星に斬撃を繰り返す。

断ち割られる金の星々、さらに細かい粒子となって散り散りになる。

(破壊)

継星あかり「うっすらと笑み) すごいよ、ゆかりさん」

あかり、手を、ゆっくり掲げる。

黒靄があかりの背中から片翼のように吹き出す。

虚空から金の光、銀の霞が現れる。

黒い靄の一部と共に、ゆかりの掌に集結する。

(金、銀、黒が手の上で混ざり合う)

暗黒の球体、出現。

ゆかり、黒球を睨む。

結月ゆかり「(脇腹から生えた枝葉をあかりに向ける)」

ゆかりの枝、赤く実る。

結月ゆかり「――」

継星あかり「――」

球体が縮小。

赤い実が消失。

轟音と激震。

ふたりのほぼ中間の位置で、董色の爆炎が花開く。

薄紫の火の粉に、無数の赤い欠片が混じって散る。

(炸裂。爆発)

(あかりが発射していた針——屋上でゆかりの手を灼いたそれ——と、ゆかりの赤い実が激突した)

雨風を蹴散らす激風、あかりのパーカーとゆかりの三つ編みを激しく揺らす。藤色の火の粉が舞う。

ゆかりの黒いツタ、爆発の余韻が消えきる前に突進。剣状の先端をあかりに向かって突撃させる。

(砂地を高速で這う蔓の群れ)

あかり、黒球を持っていない方の腕を横手に伸ばす。

腕の先、銀光の渦が4個出現。

銀河のように渦巻き模様を描く銀砂の中心に、烈光が膨らむ。

(迎え撃つ銀の渦)

銀渦の中心から火花が散り、放電。

4つの光がひとつに集い、光線を放射。

(直径が身の丈ほどもある、一条の高エネルギービーム)

あかりの目の前の砂浜を穿つ。

(立ち上る砂煙)

(振動で上下する大地)

ビームの先端を滑らせ、迫り来る黒剣達へぶつける。

黒剣ら、千切られはしないものの木っ端のように軽々と吹き飛ばぶ。

(壊乱)

極太の銀光、地面を縦に削りながらゆかりに振り上げられる。

ゆかり、樹の枝を横に構え、体の前へ。

銀光、直撃。

(光の火柱)

(千々に撒き散らされる銀灰の破片)

(光が潮の匂いを一掃する)

土砂と銀粉が乱れ飛ぶ中、ゆかり、無傷で現れる。

樹の枝、銀色に帯電。赤い実は全て黒く朽ち果てている。

(防御に成功)

あかり、目を細めたまま笑みを深くする。

継星あかり「これが、戦う気になった”さんがむりや”の力なんだね。普段の、食べ物を漁る力じゃなくて」

結月ゆかり「ここまで同居人の力を引き出したのは、あかりさんが初めてです」

継星あかり「初めては私？」

結月ゆかり「そうです。ゆかりさんの初めては、あなたです」

継星あかり「……ゆかりさんに、血を流させたのも？」

結月ゆかり「そうです。この体が何年生きるのかは分かりませんが、きつと一生思い出すでしょう。あなたが私を傷つけた、この日のことを」

継星あかり「……」

あかり、口元を緩める。

その口を、両手で覆う。

あかりの肩、震える。

(目がさらに細められる)

(口元を隠してる為、表情が伺えない)

(が、全身で情念を放射する)

(あかりの狂熱を)

灰色に濁る海、不意に、音を無くす。

暗黒色の空、立体感を無くす。

暗黒の染み、天頂に現れる。

染み、拡大。

(透明な水に墨汁を零したような動き)

(霧、煙、霞、靄、それらの同類)

(光を完全に吸収するか黒さが、周囲の風景を侵蝕する)

光景、一変。

結月ゆかり「(頭上を見上げる)」

暗黒。

満天の星屑。

天の川。

(雨雲は消失)

(海も無い)

(水平線も。嵐も。大地も。昼も)

ゆかりとあかり、虚空に立っている。

(上下左右の全て、星々が散りばめられた暗黒空間)

(360度全て。星団。88星座)

継星あかり「……ゆかりさんは卑怯だ。ずるい」

あかり、手で顔の半分を隠しながら睨む。

継星あかり「どこかに行つちやうなら、なんでそんなこと私に言うの？」

結月ゆかり「あなたに嘘などつけな——」

継星あかり「(遮り) 私のことなんて欲しくなくせに！」

あかり、顔を完全に手で覆い、叫ぶ。

宇宙が震える。

(声も震える)

継星あかり「私は、ゆかりさんが欲しいよ」

結月ゆかり「……」

継星あかり「私はゆかりさんが欲しいから、ゆかりさんをどこにも行かせない。でも、ゆかりさんは私が欲しくないから、私を置いてどこかに行つちやうんでしょ？」

結月ゆかり「それは」

継星あかり「今なら」

天の川が波打つ。

継星あかり「今なら、葵ちゃんの気持ち分かる」

(フラッシュ)

あかり、非常階段の踊り場から遠くを見やる。

葵、それを見詰める。
拳を痛いほど握りしめて。

* * *

「紺星あかり「私を見て」

細かく輝く金の粉が、あかりの頭の周囲を舞う。

(煌めく金粉をあかりに贈る)

あかり、手を下にずらす。

瞳を晒す。

妖しく、そして烈しく燃え盛る、こがね黄金色の双眸。

紺星あかり「私を見て。私を見てくれないなら、私を置いて行っ

ちやうくらいなら」

紺星あかり「——心の腱を傷つけてやる」

(憎悪の軋み)

天の光が全て赤く。

虚空は凍結。

ゆかり、身構える。

宇宙が歪む。

精緻で美しい像を結んでいた景色が、ぐちゃぐちゃに掻き乱される。

(ブラウン管テレビの砂嵐のように)

(溶けて崩れる蠟細工のように)

空間の歪みは赤い星光を吸い込み、無音のまま疾駆する。

ゆかりに向かつて。

(全領域からの収束)

ゆかり、とっさにエネルギー吸収皮膜を全身に展開。

樹の枝も横に構える。

黒剣のツタも円陣を組ませる。重防御態勢。

(無駄)

(無意味)

(無音)

(歪みに歪むゆかりの肢体)

(空間歪曲)

(微に入り細を穿つ宇宙の攪拌)

(重度の精神性疾患を患った者が描くような、混沌の風景)

あかり、片腕を伸ばす。

(もう片方の手で口元を隠す)

伸ばした手の先には暗黒球体。

黒の球、収縮。無限小の点へ。

(発破)

(無秩序の宇宙が割れる)

(割れる)

(碎ける)

(そして散る)

(ゆかりも)

○ ”よろうてつ” の結界 (??)

無明の暗黒の中で、ゆかり、空間に叩き落とされる。

結月ゆかり「……………」

ゆかり、何も無い空間に背中から激突。跳ねる。

仰向けで虚空に浮かぶ。

重傷だ。

(脚。膝と足首があらぬ方向に曲がっている)

(手。全ての指が折れている)

(腕。関節がひとつずつ増えている)

(パーカーはボロ同然)

(口から血を一筋)

腰から生えていた黒いツタも、脇腹から生えていた樹も、今はない。

(どちらも粉微塵になった。塵埃のように)

ゆかり、ぴくりとも動けない。

光も力もない虚ろな瞳が見上げる先。

あかり、舞い降りる。

継星あかり「よろうてつ”は私の気持ちを力にする”

あかり、ゆかりの腹部をまたぐ形で着地。

ゆかりを見下ろす。

継星あかり「人に住み着かなくても、”よろうてつ”は充分に強かった。そして今は私の胸の中を食べて力にしている。だから私は”さんがむりや”だって打ち負かせる”

あかり、笑う。

嬉しげに。

継星あかり「私は無敵になったよ、ゆかりさん。あなたみたいになれた”

結月ゆかり「——(ぴくり、と瞳が微動)」

継星あかり「怖いものなんかない。私はもう何も怖くない」

(あかりの頭上から、ぴゅ、と水滴のような音)

ゆかりの折れた両腕に、暗黒色の長い長い槍が突き刺さる。

(いくつもの返しが付いた、銚に近い長槍)

(腕に一本ずつ)

(貫通)

(跳ねるゆかりの軀)

継星あかり「何も恐れない、あなたを傷つけることも」

あかり、どき、つとゆかりの腹に腰を落とす。

ゆかり、空間へ大の字に、磔にされる。

(馬乗りになるあかり)

(微笑む)

あかり、おもむろにゆかりの首元へ顔を近付ける。

ボロボロのパーカーを簡単に引き千切り、ゆかりの肩と首筋を露わにさせる。

あかり、その首の付け根へ唇を寄せる。

歯を立てる。

(食む)

前歯と犬歯が皮膚を裂く。

(さく)

血管を破り、肉と脂肪を削り抉る。

肉片を口の中へ転がす。

(舌でねぶる)

(唇とその周りが血で汚れる)

あかり、咀嚼しながら口を開ける。

継星あかり「ゆかりさんのにく」

ごくんと飲み込む。

あかり、一度顔をあげ、至近距離でゆかりに微笑む。

継星あかり「味、しないね。残念」

あかり、黄金の熱を宿す瞳でゆかりを眇める。

紅に染まった唇から息を吐く。熱く。

継星あかり「あなたが好き」

告げると同時、

あかり、表情が崩壊。

涙する。

結月ゆかり「……」

継星あかり「涙腺が壊れたように、瞳から雫を何度も何度もこぼす。口元が荒ぶる熱を抑えられず、くしゃくしゃに震えてしまう。嗚咽と慟哭を醜いほど混ぜ込ませてしまった声」ゆかりさんが欲しい。食べてしまいたいくらい好き。あなたが好き。あなたが好き。あなたが好き。だから、だからいけないで」

(間近に迫る瞳と瞳)

(互いの髪が絡む距離)

(肌と血)

(傷と涙)

(ゆかりとあかり)

結月ゆかり「——実のことを言うと、悪くないな、と思っていたのです」

ゆかり、ぼそり。

結月ゆかり「このような結界に囲まれて、かわいい妹分と一緒に、誰にも邪魔されずずっと過ごすのも、悪くないと思ってました」

(血を唇から零す)

(その血が、あかりに掛かる)

結月ゆかり「私達を疎む者も、私達のせいで傷つく者もない。飢えることも渴くこともない、ふたりだけの月世界」

継星あかり「(ぱあ、と輝く、血で汚れた顔) じゃあ……!」

結月ゆかり「でも、だめですね」

ぎ、ジ……

(擦過音)

結月ゆかり「あなたが好きです、あかりさん」

ギユユ、

チャジャ、シャ、

ピリユキシウ、

結月ゆかり「よく食べてよく笑う、あなたが好きです」

——イジキキキキオキジキエエ——キキジキキイキキアジヨ

キジキキキ——……

(正体不明の異音)

(ゆかりの体内から)

結月ゆかり「あなたが見せたあの尊い日々を、月世界は作れない」
ゆかりの全身、微細に振動。

あかり、瞪る。

継星あかり「ゆかりさん……」

結月ゆかり「あなたに私の14年をあげる」

ゆかりの折れた四肢がひとときわ激しく振動する。

長槍に刺し貫かれた腕が、一個の生き物のように滅茶苦茶に藻掻き

出す。

(傷口から血飛沫が吹き出る)

(ゆかりの両足が、関節も傷も無視してのたうち回る)
ゲバラギユギカ!

チャウキキ、ユピリュチャ・ルシャシャピピキュア!

デーウキユリヤシシ!

(あかりがのしかかる胴体から、異音が咆哮する)

(何にも似ていない音の重なり)

(そこに混じる、骨が軋み、内臓が弾け、肉が唸る音)

(何かが起きている)

(ゆかりの肉体の内部で、何かが)

(その何かの、音)

結月ゆかり「同居人が14年掛けて、異次元のダムへ貯めに貯め込んだエネルギー。それを、すべて、あなたに」

ゆかり、目を見開く。

(ゆかりの胴体、萌芽)

(一瞬で芝生のように突起の群れが生える)

(その突起が急成長)

(ウミシダの羽枝のような触腕)

びつしりと羽毛が密集した触腕達、あかりを巻き込みながらゆかり

の全身を覆う。

顔も、腕も、胴体も足も。

(無数の触腕の塊と化す)

異形の塊が、告げる。

呼ぶ。

名前を。

結月ゆかり「——水門を開けなさい、”さんがむりや”」

天使あんじょが啼く。

第3幕・第6章・さんがむりや vs よろうてつ（さんがむりや・ありかんじよ）

○“よろうてつ”の結界（??）

ゆかりの全身、無数の羽枝で覆われる。

そのうち何本かの羽枝、恐るべきスピードで巨大に生長。八方に伸びる。

両腕を貫いていた長槍も羽枝に覆われ、音もなく崩れる。

ぐねり、ゆらぎ、ざわめきながら拡がる羽枝。

ゲバラギユギカ！

ゲバラギユギカ！

異音、触手の塊から鳴り続ける。

紺星あかり「(重力のない動きで跳ね、退く。金色の瞳でゆかりを凝視)」

暗黒空間が震動する。

ぴしり、ぴしり。

(乾いた音)

(罅)

妖しく揺らめく羽枝に合わせ、無明の世界に白い罅割れが走る。

(黒い世界に広がる白い罅)

(ゆらゆら、揺らぐ羽枝)

触手の塊となったゆかりの肉体、ゆつくりと浮遊。浮かび上がる。

無数の羽枝をくゆらせながら、あかりよりずっと高い位置に上昇。

あかり、それを見上げる。

蠢く塊から、不意に光が漏れる。

白い光。

その輝く強さが急激に増していく。

(烈光)

光度の高ぶりに合わせ、触手の塊がさらに激しく蠢き始める。そして唐突に、塊が縦に割れる。

中から現れる、光の球体。

（光輝く正体不明の物質で構成された、億分の一の歪みもない、完全なる球体）

2つに裂かれた触手達が、光の球体を囲むように分裂し、幾つも枝に分かれする。

（もはや結月ゆかりの肉体は、その形も大きさも保たれていない）
立体的な格子で光球を囲う羽枝。

そこからありとあらゆる方向へ伸ばす。枝を、羽を。

イジキキキキキ！

キジャミユリチユオピウケケケ！

ケケテイレ！

シュシスイシシシ！

白い光球と黒い羽枝の複合体、怪音を撒き散らす。

そのたびに白い亀裂が空間に増え、どんどん広がる。

（件の異音が球体と触手のどちらから発せられているのかは、曖昧模
糊として不明である）

継星あかり「光の球体へ睥睨し）……あなたが、”さんがむりや”」
対峙するあかり、異形を見上げる。

羽枝に囲まれた光球、ひときわ長い羽枝を上下左右に伸ばす。十字
架のように。

その長く大きな4つの羽枝、淡く白い光に包まれる。

残光を引いて揺れる触手。

白い罅割れが一気に加速する。

（もう黒より白の方が多い）

異形たる”さんがむりや”の背後に、光のリングが出現する。

（光輪）

リング、上方を指す大触手のさらに上へ移動。傾きを水平に。

また白い球体の前面に、新たな白光が生まれる。

微妙に濃さの異なる白い光が、円形に幾重にも重なる。

(眼球のように)

あかり、その眼めいたものと目が合う。

継星あかり「……………」

あかりの髪、袖、裾が、非物理的な風で吹き流される。

あかり、両目を見開いてそれを受け止める。

白い光の眼球。

金の光の双眸。

(天使と少女)

”さんがむりや”の光輪、膨張する。

そして超高速で拡散。

すひん、という怪音。

同時、無数の亀裂が一斉に弾け飛ぶ。

暗黒世界が崩れる。

轟々という暴風の音。

(雷鳴と豪雨)

(海と砂浜)

○海・浜辺(夕)

継星あかり「よろうてつ”の結果が……………」

あかり、土砂降りの海浜で頭上を仰ぐ。

(水桶をひっくり返したかのような、沛然たる豪雨)

(狂気に冒され荒れ狂う風波)

(衰退した陽光)

(天の全てを覆う分厚い暗雲)

(うつし世)

霊妙なる後光を差しながら、”さんがむりや”が降臨する。

(——イジキキキキオキジ!)

(異音が海鳴りを掻き消し、町中をすり抜ける)

(町の犬猫その他の獣が吼え立てて狂乱し)

(鳥という鳥が喚き散らす)

(子供は泣き叫び)

(一部の鋭敏な大人も苦鳴をあげる)

継星あかり「空中に浮遊する”さんがむりや”を睨み付ける」

”さんがむりや”、自身の周囲に薄水色をした裂け目を作る。

(異空間の入口)

光の球体を囲う格子から触手達が無数に伸び、その裂け目へこぞつて潜り込んでいく。

触手群、薄水色に発光。

(触手の動きと気配に力が満ちる)

継星あかり「…そこが、ゆかりさんの言ってた異次元? 吸収した

エネルギー達の貯蓄場所?」

発光する触手達、その形状を変える。

木の根と動物の内臓を融合させたような触腕。

刀剣状の先端を生やす黒いツタ。

蜘蛛の糸に似た粘糸。

赤い実をつけた枝葉。

ウミシダめいた羽枝。

それらに薄く広がる皮膜。

そして光の球体。

継星あかり「あれが、”さんがむりや”」

ふと、あかりの眼前に黒い靄が出現。

金粉の文字を浮かび上がらせる。

(”よろうてつ”)

んだ”
” あのおんなはなまえをよ
” あのおんなにすみつくも
の”
” あれらすべてが”
” ななつのあくりよう”

継星あかり「七つの……」

え た”
” こちらであそぶなまえを
” われらとおなじく”

(フラッシュ)

夜の海辺。

焚き火キットの炎を共に眺めるゆかりとあかり。

結月ゆかり「名前は付けない方がいいと、祖母が言っていました」

結月ゆかり「名前があると、その名前を呼ぶものを認識してしまうからです」

結月ゆかり「また名前を呼ばれた方も、名前によって自分を認識できずしてしまいます」

”さんがむりや”、異音を発しながら様々な触手を空中に広げる。
目玉に似た球体、あかりを凝視する。
輝く触手の先端、ゆらゆら揺れながらあかりへ向く。

(空間の裂け目が無音のまま伸びていく)

(異形の眼球、あかりを捉える)

継星あかり「(さつと手をかざす)」

あかりの目前に、銀色の粒子の渦が現れる。

渦を巻く銀粉、集結。

凝縮した銀塊から、烈しい閃光が迸る。

(極太をした銀光の砲撃)

人間ひとり呑み込めるほど太い銀の光芒、暴雨を蒸発させながら

”さんがむりや”に直撃する。

同時。

あかりの両肩に黒い剣が突き刺さる。

継星あかり「!?!」

あかり、驚愕に瞳る。

(剣の生えたツタが放たれるところを、あかりは見えていない。瞬間移動のように突然だった)

”よろうてつ”の功力により痛みはない)

刺さった刀身から、吸収皮膚が伸びる。

絞めるように首へ。

撫でるように胸へ。

継星あかり「(空いた手を震わせながら、ぎゅつと握りしめる)」

黒いツタの表面に、無数の針が鋭く刺さる。

針達、一瞬の発光の後、爆ぜる。炸裂。

青磁色の爆炎。金糸雀色の火の粉をあげながら火柱を作る。

ツタも皮膜も灰燼に還る。

一方、銀光が命中したはずの”さんがむりや”、異空間への裂け目を目前に展開している。全くの無傷。

継星あかり「届いてない……”よろうてつ”の力が、私の気持ちから

あかり、(その光景を呑気に眺めている暇もなく)さらなる驚きで足元を見る。

(砂地に空間の裂け目)

淡い浅葱色をした空間の断層が、あかりの足元に出現している。砂地を断裂している水色の切れ目から、木の根に似た触腕が驚くべき素早さで飛び出る。

(触腕はどろどろの粘液で表面を覆われている)

触腕、あかりの両足に巻き付く。

(そのまま足の付け根を指す、触腕の先端部)

触腕の表面を覆う粘液、あかりのふくらはぎと太ももの肉を溶かす。

あかりの纏う黒い靄から、金の霧が噴出する。

金霧が触腕に殺到し、まとわりつかれた触腕の動きが極端に鈍くなる。

(輝きを失い、炭化する触腕の表面)

(攻勢は続く)

あかりの足元に生まれた空間の亀裂、空へ向かって拡大。

あかりの目線の高さまで水色の切れ目が伸びる。

その切断面から、ごぼり、と粘糸の濁流が流れ込む。

継星あかり「や、あっ!!」

あかりの全身、糸状の触手の奔流に飲み込まれる。

(ナンテンに似た枝が、その粘糸に混ざって襲来)

(菱形の葉を茂らせた枝、あかりの二の腕を脇の下から掬い上げ、触手の濁流に倒れそうになったあかりの体を支える)

粘糸状の触手、あかりの手を指の間ひとつひとつに至るまで絡みつく。

枝の先に赤い実が連なり、あかりの耳元に押し寄せる。

粘糸、枝葉のそれぞれから吸収皮膜がアメーバ運動めいた動きで展

開。あかりを瞬く間に包む。

(皮膜、あかりの耳の穴や肩の傷口等から体内への侵入を試みる)

あかり、全身を硬直させながら、まだ皮膜が及んでいない唇で叫ぶ。

継星あかり「よろうてつ!!」

あかりの体、真珠色に発光。数度瞬く。

(体表に無数のスパーク)

体内から銀の光線が四方八方へ無作為に照射される。

同時に金色の火花が衝撃波を伴い、怒濤となって全方向に駆け抜ける。

(金と銀の激震、爆裂)

(甲高い放射音)

(粉々に爆砕されて消し飛ぶ粘糸、枝葉、皮膜、触腕)

(塵芥と化した触手の欠片を浴びながら、自由になるあかり)

継星あかり「(はあはあ、と荒い呼吸を繰り返す。肩や足の傷に金の粒子が集り、瞬く間に元通りに)」

あかり、「さんがむりや」を見据える。

「さんがむりや」、周囲に空間の裂け目をいくつも浮かべ、その亀裂から様々な触手が淡く輝きながら伸びている。

(格子から伸びる触手群と合わせ、その偉容に衰えはない)

継星あかり「(わなわなと手を震わせ)……私を、食べようとした。私を食べてゆかりさんのご飯にしようとした」

あかり、齒軋り。

継星あかり「(憤怒に震える声)同じにした！私を、そのあたりの廃棄物と同じ扱いにした！私を！」さんがむりや！」

(フラッシュ)

夜の海辺で焚き火キットに手を突き入れるゆかり

(金の粉が揺れる)

” ち ち ち が ほ し い か ”

(わらい声)

継星あかり「(拳を握りしめながら)ほしい」

” ど れ ほ ど ? ”

継星あかり「さんがむりや」を打ち倒せるくらい。その向こうに

いるゆかりさんを傷だらけにできるくらい」

(暗い夕暮れの海、後光を振りまく)「さんがむりや」
継星あかり「……私を傷つけたゆかりさんなんて、私に傷つけられ
ればいい」

あかり、虚空から吹き出た黒い靄に全身を包まれる。

(金粉が乱舞)

(金が舞うたびに銀が弾ける)

(黒い靄が法衣のように広がる)

”ならばもやせ”

”こころをもやせ”

(虫の羽音と弦楽器を無理やり融合させたような笑声)

り”
”もえるころがあるかぎ

し”
”わがちからつきることな

黒い靄、あかりを中心に拡大。荒海も浜辺も、曇天も黒く塗り潰す。
一気に。

黒い背景の中に星々が浮かぶ。

金と銀の星屑。

黄金色の天の河。

侵蝕する宇宙、”さんがむりや”と対峙。

”さんがむりや”の球体、輝きを増す。

天を指す大触手から光の輪が出現。

先に出したリングよりさらに大きく太く輝いている。
シャピピキュケ!

(怪奇音)

光輪、拡散。

(蜃気楼のように全ての景色が揺れる)

(星々も、天の河も)

(侵蝕中だった暗黒空間も、わずかに残っていた海辺の通常空間も)

(湾曲する空間に波紋が走る)

(高い音は低く、低い音は高く歪む)

(その歪む波紋が、あかりに迫る)

継星あかり「!!」

あかり、目の前に金と銀の粒子、黒い靄を一瞬で集める。三種の要素が無明の球体を形成。

暗黒球体、収縮。

(無限小の点へ)

揺れて歪む世界、水をぶちまけられた水彩画のように霞む。

(意味のある線も色も失われ)

(バーナーに炙られるワセリンめいて景色が溶けていく)

(歪みの波紋)

(溶融する空間)

(激突)

空間が割れる。

(破却される世界)

水色の切れ目、拡大。

粉々の世界の全てを呑み込む。

(あかりも含めて)

あかり、落下。

(大地も呑み込まれる)

淡いベイビーブルーの空間。

山吹色の雲が幾つも重なる。

その雲と雲の間の層に、鶯色の粉塵が薄く散りばめられている。

(途中、緋色の煙霧が、材木、鉄骨、スクラップ等の雑多な有象無象を包んで空間に固定している)

あかり、それらを通り抜け、底へ落ちる。落ちる。

熱をもって脈動する水色の世界。

“さんがむりや”の世界)
その底に。

継星あかり「……………ゆかりさん」

結月ゆかりが待っていた。

第3幕・第7章・さんがむりや VS よろうてつ（あかり、再洗礼）

○人理外領域”さんがむりや”次元

あかり、着底。

（底は黒い）

（地面というより、沈まない海面のような場所。あかりの踏みつける底面の下で、夜光虫のように何かが蒼く輝く）

（黒い底から幾つもの螢火が舞い踊る）

（黒い地平線と碧い空。地上に近いほど空は明るく、天頂は暗い）あかり、ゆかり（漂う無数の光点に囲まれている。ぐじやぐじやにへし折れていた手足もボロボロのパーカーも直っていた）へ目を向ける。

継星あかり「ここは、どこ？」

結月ゆかり「人の理法の少しばかり外側。視える人々でさえ見通すことの出来ない、彼ら本来の領域——”さんがむりや”の次元です」

継星あかり「（辺りを見渡し）”よろうてつ”が張ってた結界とは違うの？」

結月ゆかり「あれは彼らが人間の領域内で遊びやすくなるため、一時的な場所をこしらえたに過ぎません。ここはその逆です。私達が、彼らの領域に招かれたのです」

継星あかり「じゃあここが、ゆかりさんが行こうとしてたところ？」

月のウサギの故郷？ 私でも見つけられない深い場所？」

結月ゆかり「そうです」

継星あかり「……私を置いてまで、行こうとしてる場所？」

結月ゆかり「そうです」

継星あかり「（わなわなと身を震わせ）こんな、こんな何もないところ……こんなところがゆかりさんは良いんだ？ 私というより」

結月ゆかり「あかりさん」

継星あかり「(熱に揺れる声)私と海を散歩したり、一緒に岩盤浴いったり、買い物したり映画見に行ったりするより、ここにいる方が楽しいの?」

結月ゆかり「あかりさん」

継星あかり「私は負けたの?」

結月ゆかり「……」

継星あかり「私は負けたの? こんな何もないところに? こんな場所に?」さんがむりや”に?」

結月ゆかり「……」

継星あかり「ねえ、教えて? 応えて? こたえてよ、ゆかりさ――」

結月ゆかり「(優しい声)あなたが好きです」

あかり、息を呑む。

ゆかり、微笑む。慈しむ眼差しで。

結月ゆかり「あなたと海辺を歩くのは楽しい。潮風があなたの髪を揺らすたびに、それを目で追ってしまいます。」

あなたとお風呂に行くのは楽しい。熱気に煽られるあなたの火照りは、誰よりも眩しかった。

あなたと出かけるのは楽しい。私には買い物や映画の楽しさが分かりませんが、あなたが楽しんでる姿は、私に歓びを与えてくれます。あかりさん」

ゆかり、手を胸に当てる。小さく顎を引き、あかりを見詰める。

結月ゆかり「あなたが好きです」

ゆかり、静やかな繊細さで告げる。

あかり、金の瞳が揺れる。

継星あかり「(俯き)……私も好き。ゆかりさんが好き。大好き」

あかり、肩を震わせる。拳を握る。

継星あかり「お互い好きなのに、じゃあなんで、どうして私達は争ってるの?」

結月ゆかり「――私達が、”視える人”だから」

ゆかりの周囲に漂っていた光の欠片、無音で飛び散る。

あかり、顔を上げる。

あかりの瞳、ゆかりの眸と重なる。

結月ゆかり「あなたが視えない子であれば、私とは出会わなかったでしょう。逆もそう」

継星あかり「お互いに視えなかったら？」

結月ゆかり「同じです。どちらか片方でも視えない人でしたら、こうして仲良くなることはなかったでしょう」

継星あかり「(悲しみに擦り切れた声) ……うそだ」

結月ゆかり「あかりさんは視えるがゆえに私を望みました。私は視えるがゆえにここを望みました。人の場所の外側の世界を。そして出会ってしまったのです、最初から食い違っていた私達が」

継星あかり「私は……あなたのかなしさに敵わないの？ 私じゃ、ゆかりさんがこっちにいる理由にならないの？」

ゆかり、目を伏す。

結月ゆかり「あなたが好きです。好きですから、こちらに連れていくわけにはいかない」

継星あかり「そういうこと訊いてるんじゃないよ」

あかり、顔を怒りに歪める。

ゆかり、あかりへ指差し、笑む。

結月ゆかり「あなたはそっち。(自分を指さし) 私はこっち」
あかり、目を瞪る。

(ゆかりの足元、黒い海面で蒼の波紋が光る)

(水平線が明るさを増し、空はさらに濃くなる)

ゆかり、完全に暗黒色となった天頂を仰ぐ。

結月ゆかり「もっと早くに出会っていれば、違ったかもしれません。でも14年が限界でした。同居人をもってしても魂魄の臓器は耐えられず、潜水不可能な時間が迫っています」

継星あかり「無敵の”さんがむりや”でも？」

結月ゆかり「あれの触手は、私の心まで届いていないのです」

継星あかり「くるしいの？」

結月ゆかり「くるしいのです」

あかり、ぎゅつと胸の前で手を包む。

継星あかり「助けられるよ。わたしの”よろうてつ”なら、ゆかりさんを」

結月ゆかり「私から”さんがむりや”を追い出せば、私は程なく死ぬでしょう」

継星あかり「”よろうてつ”が”さんがむりや”の代わりになる」
結月ゆかり「その生き物はあかりさんと遊んでいるのです。私とではありません」

継星あかり「(顔を歪め)……どうして? どうして、ゆかりさんは私を拒むの? 私といてくれないの?」

結月ゆかり「あなたと出会う前に、もう決めていたのです。ここから去ることを」

継星あかり「でも私と出会ったよ」

結月ゆかり「……(仰ぎ見るのをやめる。あかりへ再び視線を戻し、笑う。ゆるく、穏やかに)」

(清々とした笑顔)

(生き物が宿す熱の夾雑物など一切ない、高すぎる純度の清らかさ)
(死滅のかんばせ)

継星あかり「(はっと息を呑む)」

結月ゆかり「(たおやかに笑み)彼らの住む場所から人間の住む場所へ行くことは、さしてエネルギーを使いません。屋上から身を投げるのと同じです」

継星あかり「……? (訝しむ)」

結月ゆかり「逆に人間の住む場所から彼らの場所へ行くには、かなりのエネルギーが必要です。屋上へ登るのにエレベーターを使わなければならぬように」

継星あかり「……ゆかりさんはもうここにいないじゃない。私もいるよ?」

結月ゆかり「ここはまだ、普段の場所からさほど離れていません。

同居人が人界で食べたものを貯蓄している階層であり、人間の住む場所の少しばかり外側でしかないのです」

継星あかり「(細い声)ゆかりさんが行きたいのは、ここよりもっと、何も無いところ…?」

ゆかり、頷く。

結月ゆかり「そこへ私をまるごと移動させるための力を、14年かけて集めました。そのエネルギーも、ここに貯め込まれています。ここが、私と”さんがむりや”の力の全てです」

黒い海面はさざめき、鉄紺の空がざわめく。

蒼い波紋が空に走る。

水平線の碧光、輝きを増す。

青い光が天へ伸びる。曖昧な光から、明確な輪郭を備えて。

(それは水平線から伸びる、光の木だった)

(葡萄めいたツル性の樹。何本も何本も、海と空が接する場所で生えている)

(青く光る木々は枝先を分裂させながら、天空へ生長する)
複雑で生物的な青い樹冠、黒い空一面を覆い尽くす。

(例外は、ゆかりらの真上、天頂部。そこだけは避けられ、何も掛かっていない。暗黒の領域が残っている)

結月ゆかり「あなたを征服します」

ゆかり、表情の全てを消す。完全に。

(空に這う枝から、異音)

(”さんがむりや”の咆声)

(青の発光)

天を囲う無数の枝、カツ、と激光を照射。

空間が青蒼で染まる。

(暗室が強力な照明で照らされたように、青く照らし出される、ゆかりとあかり)

あかり、訝しく金の瞳を細める。

黒い靄の衣、ひとりでに伸長。あかりの周囲に広がる。その伸びた黒い靄の部分、無音で切断される。

(細切れ)

(切断面を鮮やかな青が覆う)

切り刻まれた黒い破片、青く照らされながら溶融。

(熱湯の中に溶ける綿菓子めいていた)

継星あかり「よろうてつ」…!」

あかりの纏う靄の衣、表面が蒼く煙る。

靄の黒の所々、塗炭のように燻り始める。

(くゆる蒼煙があかりを包む)

蒼い煙を浴びた黒靄、火花と共に泡立ち、霧散し、消失する。

(青光が音もなく異物を燃やしていく)

(収束された明確な光線ではない。指向性のない輻射。殺菌灯。塩

酸で雑菌を抹殺する胃に近い)

(空間そのものが、滅菌作用を備えた青い胃袋だった)

継星あかり「う、う……」

あかり、呻きながら黒い海に膝をつく。

ゆかり、それを見下ろす。

結月ゆかり「あかりさんの肌、血管、筋肉、脂肪、血液、神経、五感、細胞のひとつかけらまで、あなたのやわいそれら、余さず全て、私の”さんがむりや”で絡め取ります」

継星あかり「……私を征服して、その後どうするの?」

結月ゆかり「身の程知らずにもあなたへ棲もうとする者共は、”さんがむりや”が粉碎します。あなたには何も取り憑かない。あかりさんに危険など一切ない」

継星あかり「でも、ゆかりさんはいない」

結月ゆかり「”さんがむりや”が残ります」

継星あかり「ゆかりさんがいない」

結月ゆかり「これが私に残せる唯一のものなのです」

継星あかり「いやだ」

結月ゆかり「あかりさん」

継星あかり「だって”さんがむりや”は、私の心の痛みをなおしてくれない。ゆかりさんも助けられなかった。無敵でもなんでもない。そんなの貰ったって嬉しくないよ！」

結月ゆかり「——では、どうすればいいのですか？」
ジユギシヤ、キリユチジ……！

(天の枝からの怪奇音、増大)

(枝の青光、輝度を強める)

(蒼い煙と燻り、勢いと量を増やしていく)

あかり、さらに苦しく呻く。

結月ゆかり「(冷ややかに)私は残り、そして苦しみ続け、苦しませ続けるのですか？」

私を見放すことの出来ない両親を、私は見続けなければならないのですか？

自分達だけ食事をすることに後ろめたさを感じている、あの人達を？」

枝からの光量が増える。

黒靄は次々と切り刻まれ、火の手をあげて消えていく。

(露わになったあかりの皮膚や衣服、それさえ蒼く灼かれ始める)

あかり、苦痛に耐える表情で、ゆかりを見上げる。

継星あかり「……ゆかりさんがいなくなったら、おばさん達はずっとずっと悲しみ続けるよ」

結月ゆかり「私がいっても悲しみ続けます」

継星あかり「でも、私がありましたときは、楽しそうだった」

結月ゆかり「あなたがいましたから。あなたがいれば」

継星あかり「そんなわけないじゃん！」

あかり、ぐぐつ、と膝に力を込めて立ち上がる。

黒い衣はその大部分が溶けている。

蒼い燻煙にいぶされながら、ゆかりを見上げ、睨む。

継星あかり「ゆかりさん。いつしよにご飯、食べよう。おばさんとおじさんと、私と。少しで、一口でいいから」

結月ゆかり「私に味は分からない」

継星あかり「おばさん達は、それだけで充分よろこぶ」

結月ゆかり「私はあの人達の努力を無駄にする」

継星あかり「みんなが食べてるとき、ゆかりさんも席にいる。無駄なんかじゃない」

結月ゆかり「私はあの人達を苦しめる」

継星あかり「なら、私がいみんなのそばにいるよ。やわらぐでしょ？私がいれば」

結月ゆかり「……あなたはすいぶん、思ってたよりずっと、ずるい子だったんですね」

ゆかり、さつと手を翳す。

(青い木の枝、生長)

(葉を茂らせ、実を付ける。青い実)

(無数の果実が淡く灯る)

(それと呼応する、黒い海)

海面、震動。

水面を突き破り、飛沫を上げて姿を現したのは、真っ黒な羽枝。

(ビルのように長大な触腕が何本も何本も現れ、鎌首をもたげている)

「そんなことでは、私を地上こゝろから月へ送るための燃料を、使わざるを得ないじゃないですか」

あかりの周囲に、掌大の青い実が半透明になって現れる。

楕円形の果実は瞬時に形状を変化。

(Y字状へ変形)

果実、霰弾のような鋭さであかりに来襲。

(薄青の物体があかりのあちこちへ付着する)

(青い光に炙られているあかりは回避も抵抗も出来ない)

羽枝、どつと勢いよくあかりへ襲い掛かる。

継星あかり「！」

あかり、逃げようとしてもろくに動けない。

(灼かれる痛みの他、半透明の果実の付いた部分、その動きが極端に鈍い)

羽枝、Y字の果実に羽先を絡ませる。

羽枝、引き千切る。

果実ごと、あかりの肉を。

継星あかり「——アツ！」

(血は出ない)

(その代わり、抉り取られた部分から黒い煙が間欠泉のように吹き出る)

(肉も黒い。抉られたのは、生身の血肉ではない)

あかり、転倒。

海面に仰向けになる。

(殺到する羽枝)

(杭のように半透明物体を掴み、力任せに振り上げる)

(浮かび上がろうとするあかりの身体を、別の羽枝が押さえ付ける)

(黒い欠片が大小いくつも飛び散る)

(さらに吹き出る黒煙)

(青光の効果は終わっていない。蒼い煙と絡んで混ざる)

(羽枝たちは貪る)

(あかりの手足を押さえ付けて)

(その手足もこそぐ)

(肩口から指先まで)

(太もも内側から足先まで)

(削いで抉ってさんざん千切る)

(びたんびたんと跳ねるあかり)

(貪られる)

黒い靄が抗おうと、あかりの体から現れる。

(Y字状の果実が靄に刺さる)

(羽枝が果実を掴んで振り回す)

(それだけで黒靄は雲散霧消)

(蒼い火の手を挙げて滅せられる)

羽枝、猛攻を続ける。

(黒い靄の巣くう胴体、そこへ重点的に群がる)

(あかりの腹に刺さる果実)

(羽枝、掴む)

(力任せに引く)

(食い込まれた皮膚が伸び、肉が千切れ、破片を撒き散らしながら弾け飛ぶ)

(あかりの軀、痙攣。跳ね上がる)

(一顧だにされない)

(黒い肉片を放り投げる羽枝)

(真っ黒な煙を血潮の代わりに浴び、傷口を乱雑に掻き回す。刺さるY字物体。絡み、引き千切る羽枝。えぐる)

(黒い血煙)

(何度も繰り返す)

継星あかり「——あ…、——ああ…:(真っ黒に染まった手が弱々しく震え、痙攣しながら天へ伸びる。青い枝に囲まれたか黒い空。天頂。見上げる)」

——無明だった暗黒の中天に、輝く点がひとつ生まれる。

点は一瞬で円になり、真珠色の淡い光を放つ。

円の中心に、光度の異なる層が幾重も発生。

(月のような真円)

(眼球のような氷輪)

さんがむりや

結月ゆかり「……もうかかないません。あなたの力も、あなたの願いも」

ゆかり、目を細めたまま見下ろす。

結月ゆかり「私の同居人がどんな原理でエネルギーを吸い取っているかは私にも分かりませんし、その性悪がどうやってその無効化に成功したのかも分かりません。」

そして今、同居人がその無効化を無効にしている方法も、私は知りません」

海面が波打つ。

青い夜光虫の煌めき。

青と黒の煙に包まれるあかり。

群がる羽枝。

噴煙の先端が天頂の月へ届きそうになる。

結月ゆかり「その性悪を引き裂ける諸々を用意するのに、いたくエネルギーを使いました。しかもこれらを使う場所まであなた方を召喚するため、さらに大量のエネルギーを消費しなければなりません。これらの消費は、同居人の名を呼ばない状態では賄えなかったでしょう。その点では賞賛せざるを得ません。

——而して結果はご覧の通り。私の同居人の勝ちです」

(舞い散る黒い欠片)

(呑み込まれる血煙)

(あかり)

結月ゆかり「……確かに、もっと、と夢を見ました。きつと、と」

(俯くゆかり。冷徹の表情に僅少なから温度が宿る)

結月ゆかり「もっとあなたと早く出会っていたら。」

屋上から身を投げる習慣が付く前に出会えていたら。

稲妻を食べに鉄塔の上へ登る前に出会えていたら。

……母が入院する前に、あなたと出会えていたら。

きつと、きつと。

(頭上を見上げる)

(さんがむりや。温度という概念を知らない光。それを浴びて)

きつと、私は。

あなたを置いていかなかったでしょう」

「 継星あかり」—— さ い せ ん れ い …

(黒い噴煙、止まる)

(何も出なくなる)

(もぞもぞと漁っていた羽枝、震える)

羽枝の群れ、硬直。

一斉に動きが止まる。

くすり、くすり。

(童子の囀り)

(羽枝たちが群がる場所、黒い物体、かろうじて手足と分かる4つの
部位、汚れきった顔と髪)

それ、こいねがう。

継星あかり「さいせ んれいを… よ
ろ う て つ…」

くすくす、くすくすくす…

風が舞う。

(汚れた髪が踊る)

(固まった羽枝がたじろぐ)

(風はあかりの胴体から流れていた。黒い体の奥深く)

継星あかり「わたし の な つ を
か な し さ で
お わ ら せ な い で…」

風が舞う。

(色を纏う風だ)

(赤い橙)

(青い緑)

(黄色い藍)

(紫)

(七色)

風、くすくす笑う。

笑いながら、固まった羽枝を撫でる。

羽枝、びくびくと仰け反る。

(震え、固まり、渴き、萎れ、縮み、溶け、崩れる)

崩壊した羽枝、どぼん、どぼんと黒い海に落ちていく。

くすくす、くすくすくす…

あはは、はははははは…

風がはしゃぎ、笑う。

(笑いながら、黒い物体となった継星あかりを包み込む)

(鮮やかな七色が空間に充ちていく)

(蒼の系統をなぶるように)

(虹色の疾風が駆け抜ける)

天に伸ばした黒い腕。

先端に、力を込める。

継星あかり「わたしを再洗礼して。よろうてつ!!」
拳を握り、吼える。

(天へ向けて)

「さんがむりや」へ向けて)

第3幕・第8章・さんがむりや vs よろうてつ（さ
ろめ）

○海岸

（日の暮れた海岸。荒れ狂う波と風。

黒に近い澱んだ大空の下、羽枝の塊が佇立している。

”さんがむりや”

4つの巨大な触手を伸ばし、猛然と吹き荒ぶ雨風を浴びている。

白く輝く球状の部位が、その光の濃度を高めていく。

ふと、その球体の濃度が異なる部分——瞳孔に似た箇所——が、水
平線の彼方に向けられる。

海原に舞うものがある。

虹色の竜巻。

細く長く、その全長は天と地を結ぶほど。

”さんがむりや”の視線に気付くと、その竜巻は一気に霧散する。

散り散りになった七色の風、海面を断ち割る。

海水も荒波も虹色になって飛散していく。七色の衝撃波は海を切
り裂きながら、猛烈な速さで浜辺に突き進み、そして上陸する。

子供の笑い声と共に）

○”さんがむりや”次元

あはははははは………！

あかりの歪んだ全身を覆う黒い塊、七色の風を噴き上げながら蒸発
する。

（子供の笑声）

虹色の風の一部はあかりの体を取り巻き、残りは全て天空へ駆け上がっていく。

幾つもの色をもつ風、そのうち赤色の一陣で巨大な傘を作る。

青い光、その赤い風の傘に阻まれる。

(青と赤が接触。紫へ)

紫色の空間層を形成する。

殺傷光線は紫の天蓋を貫けず、地上に届かない。

あはは、あははははははは！

あかりを貪っていた羽枝たち、ことごとく七色の風に包まれ、蝕まれる。

(ある羽枝はどろどろに溶け)

(ある羽枝は虹色の水ぶくれに覆われて崩れ)

(またある羽枝は萎れて収縮し、粉状になって散失する)

結月ゆかり「性悪の同棲相手……」

ゆかり、手を翳す。

青い枝、発光。

Y字状の果実が、あかりを包む七色の風に発射される。

果実、風に刺さる。風はその場で動きを固定されてしまう。

(黒靄を破断させたように)

生き残っていたわずかな羽枝、殺到する。

(Y字の果実を掴んで引き裂く構え)

…くすくす、くすくす、笑い声。

固定された風、刺さった部分が玉虫色に輝く。

果実、震動し、ぽろっと抜け落ちる。

(鍵が形の合わない穴から取れるように)

固定されていた風、自由を取り戻し、Y字物体を包んで融解させる。

押し寄せていた羽枝の残党も一気に飲み込む。童のはしやぐ声、触

手たちを虹色に染め上げ、破裂させる。

(羽枝、全滅)

継星あかり「あかりの全身、七色に包まれる。

そのうち胸部から腹部に至る部分の風が濃縮し、虹色の光となって散る。その下から傷ひとつない肌が現れる。

散った光がその肌を飾り、一瞬だけ眩く輝くと、あかりは手品のように現れたブラウスに包まれている。

続いて両足が同じように極彩色の渦を纏う。渦の消滅と共に一瞬だけ肌を露出させ、タイツとスカートに覆われる。

次に両腕。肩の付け根から指先まで完全な形で現れ、アームカバーがこれを包む。

溶けて砕けた黒い殻は七色の飛沫となってあかりに降り注ぎ、ワンピースを出現させる。ブーツ、襟元のリボンがそこにあしらわれる」あかりの長い髪、虹色の風に絡め取られて宙を搔く。

まるで髪が自力で動いているような滑らかさで、長い三つ編みを結っていく。

(黒い靄が片翼のように背から吹き出る)

(鮮やかに彩色された風があかりに逆巻く)

最後にフライトジャケットを羽織り、あかり、閉じていた瞳を開ける。

露草色の双眸。

(ゆかりを見据える)

結月ゆかり「あかりさん……」

ゆかり、左腕を横に伸ばす。

ゆかりの脇腹からナンテンに似た枝葉が伸び、密集した赤い実を生やす。

赤い実、発光。消失。

あかり、激甚の爆裂に包まれる。

赤黒い爆風が四方八方に広がり、衝撃波で黒い海面が吹き飛ばされる。

(反響する爆音)

(海面上を包み広がる爆煙)

(一気に悪化した視界)

(その中を)

あかり、突進。

黒い爆炎を引き裂き、七彩のつむじ風が猛進する。様々な色の尾を引いて、瞬間的な加速でゆかりに襲い掛かる。

ゆかり、足元の海面を蹴る。そこから巨大な羽枝が数本、海面を突き破って出現。あかりを迎撃しに飛びかかる。

あかり、黒靄を前面に出す。黒の中に星々が煌めく。金の光刃。無数のレーザーカッターが羽枝を易々と切り裂く。切り刻まれた羽枝の破片を鮮やかに掻い潜るあかり(千紫万紅の軌跡を描く)

結月ゆかり「(右腕から太い触腕を生やす。また同時に先端に剣が生えた蔓状の触手を何本も伸ばし、触腕に絡ませる)」

ゆかりの触腕を軸とし、その周りに触手が巻き付く。

(剣状をした触手の先端は寄り合わされて癒合し、一体化。ゆかりの背丈の倍を超す長大な刀身を形成する)

(それはもはや槍だった)

(細長い円錐形。根元と腕の結合部分を、無数の触糸で縫い付けている)

(薄く透明な吸収皮膚が、その槍の刀身を覆う)

継星あかり「(ゆかりに肉薄しながら銀色の光線を黒靄から放射)」

結月ゆかり「(その太い銀の光柱めがけて槍を突き刺す)」

(光撃と刺突)

銀の光が槍を呑み込む。

刹那の後、光は槍の皮膚に吸い込まれる。槍、白銀に発光。全ての銀光を吸収し尽くす。

継星あかり「(かまわず突進。片手を前にかざす)」

あかりの手の前で金と銀の粒子が混ざり、光球が生まれる。それを核として黒靄が高密度で集結。

あかり、暗黒球体を作る。

結月ゆかり「(槍を覆う銀光を先端部に結集させる。切っ先が目を灼かんばかりに輝き、猛烈な速さで迫り来るあかりへ向けられる)」

継星あかり 「暗黒球体を楯にかざし、突撃」

結月ゆかり 「銀の槍を構える」

継星あかり 「(打突)」

結月ゆかり 「(突き抜く)」

ふたり、衝突。

(黒と銀の衝撃波が青い空間を烈しく揺さぶる)

(黒球、銀槍、ごく僅かな間隙を挟んで押し合う)

(力と力がぶつかり荒ぶる)

(槍の先端から放出される銀光)

(黒い球体はその光刃を微細に削り取る)

あかり、虹色の気流の推進力で力任せに押し込む。

ゆかり、突き出した槍でそれに対抗。

(あかりの三つ編みが後ろに流れ)

(ゆかりのパーカーが千切れそうなほど裾をはためかせる)

(あかりとゆかり、至近距離)

結月ゆかり 「あかりの瞳を見つめ」2体目への同居を許すとは……

あかりさん

継星あかり 「ゆかりさんは7体もいるじゃない!」

結月ゆかり 「あなたと私は違う」

継星あかり 「何がっ」

結月ゆかり 「あなたには、私みたいになってほしくはなかった」

継星あかり 「あつちとかこつちとか、ゆかりさんが言ったくせに!」

あかり、弾かれるように後方の空中へ跳ぶ(虹色の尾を引く)

ゆかり、槍を引きながら距離を取る(切っ先が銀の残影を描く)

(ゆかりの槍に帯びていた銀光は、かなり淡くなっていた)

継星あかり 「黒の片翼を打ち広げる。黒靄の中で金の星々が妖し

く瞬き、幾本の光刃を抜き放つ」

結月ゆかり 「(ナンテンめいた樹を激しく振り回す。再び生えた赤

い実の一部がY字状に変化し、散弾銃のように発射される)」

Y字物体、黄金色の光に触れ、光を空間へ固定する。

そこを未変化の赤い実が襲い、金光を悉く破碎。

(金色の破片、煌びやかにこぼれ落ちる)

樹木状の触手、新たなY字物体を黒靄に向けて発射。

継星あかり「七色の風に包まれた手で虚空を薙ぐ。風の壁を展開」

渦巻く虹色の風、障壁となつて立ちふさがる。

Y字の実、風に刺さらず跳ね返る。赤い実、風をすり抜けた黄金の光線に撃墜される。

継星あかり「空間を蹴るような勢いで再び急加速。空中からゆかりに躍りかかる」

結月ゆかり「足元から巨大な羽枝を召喚。前方に密集させて複雑な壁を作り上げ、あかりの進路を妨害する。エネルギー吸収皮膜つき
の防壁」

黒靄の翼が翻る (湿った発射音)

(あかりが激突するより先に、羽枝の防壁に何かが突き刺さる)

(銚だ)

(いくつもの返しを持つ長い銚。4本。壁に刺さっていた)

(突き刺さった銚の先端から、虹色の蒸気が噴き出る)

(くすくす、あはは)

(極彩色を浴び、吸収皮膜が干涸らび風化)

(銚、炸裂)

(翡翠色の爆裂)

(白藍色の火柱)

(紫の天蓋に火焰と煙が突き刺さり、黒い海が残虐に吹き散って引き裂かれる)

継星あかり「薄緑の爆炎の中から躍り出てゆかりに襲い掛かる。

羽枝の壁など欠片も残っていない」

結月ゆかり「槍を横に構えて迎撃」

継星あかり「片足を軸にしてコマのように回転。虹色の螺旋を描きながら暗黒球体を叩き込む」

あかりとゆかり、再度衝突。

(空間振動)

(黒球の突進、槍の腹で受け止められる)

(あかりとゆかりの髪が衝撃で後方へ荒ぶる)

(瞳の距離、至近)

継星あかり「私は」さんがむりや」が憎い！」

結月ゆかり「私も」よろうてつ」が嫌いです」

継星あかり「ゆかりさんは」さんがむりや」を憎んでないの!？」

結月ゆかり「感慨は何も」

継星あかり「視えなければ良かったとか、」さんがむりや」がいなければとか、思ったことないの!？」

結月ゆかり「……あかりさんは、視えなければよかったですか？」

継星あかり「私は、」

* * *

(フラッシュ)

教室。

あかり、自分の机に突っ伏している。

同級生たち、教室の端で群れ、遠巻きにあかりを見やる。

誰もあかりに近づかない。

ひそひそ声がいつまでも続く。

* * *

継星あかり「私は、視えて苦しかった！」

あかり、背中から七色の風を爆発的に放出。強力な大推力でゆかりを押し込む。ゆかりはその場に踏み留まることができない。

結月ゆかり「(後方へ押し出される)」

継星あかり「(さらに推進力を上げ、ロケットブースターめいた噴出で力任せに押し出す)」

結月ゆかり「(抗しきれない。猛烈な勢いで後退。両の踵で海面を

削る)」

あかり、青い空気を押し潰しながら突進。

(黒靄、邪曲な動きで前に広がる)

靄、ゆかりの槍に向かって針を連射。槍に刺さる。

結月ゆかり「目を細める)」

(針が割れる)

(中から風。よこしまなほど鮮やかな七色の風が)

(槍を撫でる)

槍の表面、一気に腐食。

(醜く変色し、錆が浮き、孔が開き、罅割れて吹き散る)

黒靄、銀色に発光。

(靄の中で銀砂が渦巻く)

銀の烈光、柱となって至近距離からゆかりに撃ち込まれる。

直撃。

結月ゆかり「銀光に呑み込まれ、あかりの直進スピードより早く後ろへ吹き飛ぶ。錐揉みながら勢いよく海面に激突。黒い水飛沫をあげ、水切り遊びの石のように転がっていく)」

継星あかり「(着地。と同時に黒靄の翼を上に向け、ひととき大きく伸長させる)」

巨翼となった靄の表面、黒い油を塗ったように滑らか。

そのぬめった部分から、返しのついた銚、針、槍が震えながら無数に生えてくる。

結月ゆかり「(朽ちかけた槍を海面に叩き付け、停止。樹状の触手を天空目指して軋みながら拡大させていく)」

樹状の触手、黒い巨翼と同等の大きさにまで急生長。

茂った枝々には大量の赤い実。

継星あかり「」

結月ゆかり「」

あかり、黒い銚を発射。

ゆかり、赤い実を発射。

無数の弾幕が飛び交い激突。無数の火球が炸裂する

(轟音が幾つも重なる)

(Y字状の実が刺さった銚は空中で固定。赤い実に砕かれる)

(赤い実を槍が貫く。橙色の火炎が噴出。その火炎をY字の実が空間に縫い付け、別の赤い実で粉碎)

(針がY字の実に刺さって弾ける。中から虹色の風が炸裂し、果実を水膨れだらけにして溶融する。その風を赤い実が爆発で掻き消す)

黒翼と樹状の応酬を頭上で展開させながら、

あかりとゆかり、対峙。

継星あかり「私は視えるのが楽しかっただけ。誰にも何もしてない。ただ視てただけなのに、なんであんなに苦しまなきゃいけないかったの、って思った」

結月ゆかり「その理由を、あなたはすでに知っているはずです」

継星あかり「でも、ゆかりさんと会ったら、もう苦しくなくなっただ」

結月ゆかり「(首を横に振り) 一時的な話です。この夏が終われば、あなたはまたそこに戻るのです」

継星あかり「……ゆかりさんが、また私と遊んでくれるなら、私はあそこに戻っても構わない」

結月ゆかり「……」

継星あかり「学校みんなから怖がられても嫌われても、ゆかりさんがいれば、私はもう何も怖くない」

結月ゆかり「……」

継星あかり「私は」

黒靄、発砲を止める。

樹状触手、ぴたりと発射停止。

(静寂が戻る)

静けさの中。

継星あかり「——ゆかりさんみたいになりたいよ」
あかり、微笑む。

憧れをのせて。

結月ゆかり「……………（瞳、刹那の間だけ揺れる。その瞳であかりを
眇める）」

あかり、両腕をばつと広げる。

左右の手、それぞれ発光。

あかりの右手に、黄金の微粒。

あかりの左手で、白銀の砂塵。

（金と銀、渦巻き逆巻く、光輝く2つの粒子）

継星あかり「ゆかりさんの熱量をここで溶かす。ここで、全部」

あかり、両手を組む。

（金と銀の粒子が激しく反応。輝度を大幅に上昇させる）

あかり、2種の光に包まれた両手を、ゆっくり前へ伸ばす。

（ゆかりに向けて）

結月ゆかり「！（槍を刺突の構え）」

あかり、光を放出。

（金銀が激しく絡み合い急激に膨張）

（螺旋を描いて混合し、恐ろしい勢いで前へ放たれる）

（それは濁流）

（強大な焔めきとエネルギーを有する噴流が、金の放電と銀の火花
を周囲に撒き散らし、怒濤となって有象無象を呑み込んでいく）

（ゆかり目指して）

結月ゆかり「——ッ！（槍を突き出す。迫り来る金銀に刺さる。そ
れは大河の激流に朽ちかけた槍を突き刺すのに等しい。先端部分は
容易く碎け、罅割れがさらに槍全体に走る）」

ゆかり、樹状触手を瞬時に槍へ絡ませ、ひび割れた部分を補強する。
枝に連なる赤い実を至近距離で連続発射、金銀の波濤に叩き込む。赤
い爆炎は波に呑み込まれてしまうが、爆発の衝撃でなんとか怒濤を押
し返す。

（それでも槍は確実に先端から削られ、破壊されていく）

(そしてあかりは金銀の怒濤を吐き出し続ける。容赦なく)

継星あかり「私は倒すの！ 私と出会う前のゆかりさんを！」

結月ゆかり「(防御姿勢で俯きながら) …なぜ？」

継星あかり「もつと早くゆかりさんと出会えてたら、私はゆかりさんの決意を変えられた。私を置いていかないように、私のことをもつともつと好きになってもらえたのに！」

結月ゆかり「今でも好きです」

継星あかり「違うの！ そうじゃなくて、そうじゃなくって、もつと早く出会ってた、らっ (声が滲む)」

ゆかり、俯いていた頭を上げる。

結月ゆかり「(瞠る)」

あかり、涙をこぼしている。

(表情は変わらない。涙だけが一筋、あかりの薄青の瞳から流れ落ちる)

継星あかり「——ゆかりさんを苦しめた全部のものと、私は闘えたのに……」

結月ゆかり「……(赤い実の連射が鈍る。槍が悲鳴を上げる。刀身の崩壊が加速する)」

ゆかり、構わずあかりを凝視する。

あかり、見詰め返す。

継星あかり「私がいれば、ゆかりさんの言いたいことをおぼさんやおじさんに伝えられたのに。私がいれば、ゆかりさんの好きなことを一緒に遊べたのに。私がいれば……私なら、ゆかりさんのために、なんでもしたのに！ (金銀の波動を増加させる。ゆかりの槍、苦鳴をあげてへし折れていく)」

結月ゆかり「っ！ (ゆかり、再び姿勢を屈めて俯く。激しい振動に全身が揺さぶられる。樹状の触手もあちこち千切れ掛け、刀身はあと少しで完全に崩壊してしまう)」

あかり、両手を組みながら前に突き出す姿勢のまま、唇を歪める

(悔しきの表情)

継星あかり「もしもっと早く出会えてたら、ゆかりさんが私にほれちやうくくらい、好きになっちやうくくらい、私はゆかりさんを守ったのに……」

結月ゆかり「……あかりさんは、やり直したいのですね？」

継星あかり「うん」

結月ゆかり「あなたがいないときに私が決めたことを、あなたは許さないのですね？」

継星あかり「うん。そうだよ。だから私は、このままゆかりさんを溶かす」

(あかりの決意)

継星あかり「よろうてつ」が力に変えた私の悔しきで、ゆかりさんの14年間をこのまま溶かすの！」

○海岸

(吹き荒れる七色の風の中から、金色に輝く粒子が吹き出る。

きらきらと輝くそれらは一箇所に集まり、塊を形成。

その金塊の周囲に、より細かい銀の粒子が湧き上がる。銀粉は金塊の表面を覆い、輝きの色合いを複雑にする。

そして金銀の核を包むように、薄い金の霧が球状に現れる。いびつな三層の透視天球儀。

”よろうてつ”

従えるのは、金霧の外側を自由な軌道で周る七色の風。

”さんがむりや”と相対する。

”さんがむりや”、青い空間の断裂を展開。”よろうてつ”にぶち当てる。

”よろうてつ”の周りを走る虹色の風、笑声を立てながら青い亀裂に殺到。空間の断裂へ赤い風を注ぎ込む。断裂は紫色に変色し、裂け

目を弱々しく小さくする。子供の笑い声。

”よろうてつ”、自身の核を一瞬だけ瞬かせる。

”さんがむりや”の軀である羽枝の触手群が、金の炎に包まれる。黒い触手は瞬く間に赤熱化。外側から崩れ落ちていく。

”さんがむりや”は体内から動物の内臓めいた触腕を伸ばして対応。触腕を覆う粘液を火の手があげる部分に掛ける。金色の炎は瞬く間に勢いを弱め、逆に傷ついた触手部分が再生を始めていた。

”よろうてつ”の金霧が内部で黄金色の放電をいくつも発生させ、それを”さんがむりや”に投げつける。当たった箇所から銀の火花が散り、”さんがむりや”の姿勢を揺らがせる。

”さんがむりや”は剣の生える蔓状触手を砲弾のように発射して応戦。数本の触手は金霧を貫き、核へ到達する。

正確には、核の手前までしか到達できなかった。

核の手前に黒い靄が発生し、そこから伸びる銚が触手の剣を受け止めていた。

止められた触手へ、黒靄は無数の針を浴びせる。針は刺さると同時に炸裂。霧の内部で膨れあがった翡翠色の爆炎が、触手達を灰燼に帰す。

”よろうてつ”の核、再び瞬く。

”さんがむりや”の4つの大触手が爆発。表面から金の業火と銀の火の粉が明滅しながら放散した。爆裂にのたうつ大触手に、霧からの金の放電が追い打ちする。火花を散らせて傷ついていく大触手。

”さんがむりや”はエネルギー吸収皮膜を大触手に展開するものの、七色の風に表面を撫でられて濁り、萎れ、その性質を發揮できなくなる。

”よろうてつ”の猛攻が続く。

”さんがむりや”は防衛できない。

”よろうてつ”が押し切ろうとする。

……”さんがむりや”の球体部分が、輝きを膨らませた)

○”さんがむりや”次元

あかりの決意、それと同時に。

結月ゆかり「……………」

ゆかり、振動を停止。

ぴくりとも動かなくなる。

(金銀の波濤は槍を一気に破壊する。樹状触手はぶちぶちと引き千切られ、癒着した蔓状触手も芯材の触腕もばらばらに崩壊していく)

(ゆかりは一顧だにしない)

(ゆかりの足元がざわめく)

ゆかりの足元から、羽枝が何本も出現。

ゆかりの両足に巻き付いていく。

足元だけではなく、黒い海面からいくつも姿を現す。その全てがゆかりの足や胴体に巻き付き、スカート状を形成していく。

結月ゆかり「あかりさん」

継星あかり「…なに？」

結月ゆかり「……………」私の14年を舐めないでいただきたい」

羽枝、青く発光。

黒い海の中から夜光虫の大群が発生。蒼い光が群れをなして羽枝に集まっていく。

光の群れ、黒い羽枝を通してゆかりに集束。触手のスカートが蒼く輝く。光群が右腕の槍に雪崩れ込む。

(——イジキキキキオキジ！)

槍が異音をたてながら激しく振動する。

夜光虫の光の群れを槍が全て吸い上げ、槍を構成する素材全てがベイベーブルーに輝き出す。

(槍自体が、光そのものに置き換わる)

(光の槍へ)

継星あかり「(涙に汚れた顔で驚き) ゆかりさん……」

結月ゆかり「教えてさしあげます、あかりさん(青白い光を一気に再拡張。元の槍の長さまで復活する。身幅は以前の倍近く。その勢いのまま、光の白刃を金銀の噴流へ突き刺す)」

光刃が奔流を叩き斬る。

怒濤とぶつかった蒼光の切っ先、さらに細かく拡がって金銀の粒子を一方的に蒸発させる。斬撃を喰らった粒子、輝きを無くして霧散していく。

(イジギヤクシユピピピ！ ミイキリヒケピジジョー！)

結月ゆかり「(怪奇音を発する光の槍、切っ先と逆の石突きからも幅広の光刃を伸長。ゆかりの手を中心に、ヘリコプターのメインローターの如く回転を開始)」

ゆかり、回転により光の壁と化した槍を奔流へ押し付ける。

(高速回転する光刃は金銀の奔流を粉微塵に切り刻み、大量の細片を周囲へ噴霧)

(野菜類を加工するミキサーめいた執拗さで、攪拌と粉碎を徹底する)

(あかりは放出を続けるが、その威力が回転光刃を揺るがすことは、もうなかった)

あかり、たじろぐ。

ゆかり、冷徹に睨む。

結月ゆかり「このゆかりさんの14年間が、あなたのひたむきさで打ち勝てるような代物でないことを教えてあげます」

唐突に。

無明。

空間から光が消える。

継星あかり「!?」（驚き、周囲を見る。黒い海を流れていた夜光虫も、空からの青い滅殺光線も無くなっていた。部屋の照明を電源ごと落とされたように）」

（その世界で光を宿すものは、あかりの金銀の奔流と、それを無慈悲に攪拌する青白い光の槍、頭上に広がる赤い風、そして）

天頂の真円。

光の球体。

偽りの満月。

”さんがむりや”

（その真珠色に輝く球体の、瞳孔に似た部分から、一筋の光芒が音もなく放たれる）

（一条の光、容易く風の天蓋に大穴を開け、地上に到達）

（ゆかりの槍に刺さる）

（月とゆかり、一筋の光で繋がる）

（ゆかりの下半身を包む羽枝、さらに数を増やして強固にゆかりを固定していく。艦船を抑える錨鎖のように）

ゆかりの槍、その光度が爆発的に上昇する。

（光の色も変化。夜光虫の青に近い白さから、月光の白さへ）

（その明るさは留まることを知らず、槍の光明だけで空間の全てを照らし出していた）

結月ゆかり「（槍の回転を停止。切っ先をあかりへ向ける。金銀の奔流は圧倒的な光量を浴び、刃に触れる前に消滅する）」

継星あかり「ゆかり、さ——」

結月ゆかり「——磔刑に処せ、《さんがむりや・ありかんじよ》」
光の刃、爆裂する。

（ゆかりを中心とした同心円状に光刃が撒き散らされ、羽枝たちのいくつかが海面ごと切り裂かれる。

しかし最も強大な威力を誇ったのは、前方面面への攻撃だった。

膨張した甚大な烈光の太さは、光刃が高速回転していたときの直径さえ凌駕していた。高密度の光芒が金銀の濁流をそよ風のように両

断。真つ二つに引き裂きながら放出口であるあかりの両手へ突き刺さる。

組まれていたあかりの両手、強制的に外へ弾かれる。

激光の奔流、あかりの胴体に直撃。全身を呑み込み、押し流す。

光の驀進が止まらない。光芒の厚みは金銀の噴流の比ではなく、海面さえ巻き込んでどこまでも直進していく。黒い海が月光の巨剣に斬り裂かれ、その切っ先はついに世界の果ての蒼い木々にまで到達した。

烈光、世界の果てに突き刺さる。

蒼い樹がさけび、わめく。

○海岸

“さんがむりや”の球体から放たれた光芒が、“よろうてつ”を貫いた。

七色の風を蹴散らし、金の霧に巨穴を穿ち、銀の外殻を貫通する。核の前に漂っていた黒靄など、その真珠色の光に触れた瞬間に蒸発した。

“よろうてつ”を串刺しにした烈光はその背後の海に着弾し、荒波を物理的に撃砕。海面を断ち切っていく。

○”さんがむりや”次元

ゆかり、黒い海と蒼い森を穿ちつその光槍を、重い動きで振り上げる（その動きの反動で羽枝たちが音を立てて千切れ飛ぶ）

水平線を貫通していた光芒、空を下から切り裂き始める。

（光刃に照らし出される青い空とそこに張り付いていた木々の枝達が蹴散らされる。光の通ったあとは真珠色に焼け爛れ、大空に線上の痕が刻まれる。天と地の間にあった七色の風も蒸発させて）

ゆかり、光槍をついに真上にまで振り上げる。

月のような球体へ光芒が刺さる。
異音。

天地が震撼する。

月、光を吸い込み、より強く輝く。

月とゆかり、再び一条の光で結ばれる。

(その光の柱の中に、あかりがいた)

(月とゆかりの中間の位置で責められている)

継星あかり「(翼のようだった黒靄や、全身に渦巻いていた七色の風は、完膚無きまでに消滅している。衣服や身体も表面的な外傷こそないものの、透過する光刃があかりの内部を霊的に蝕んでいた。激痛に悲鳴をあげようとするものの、叫び声さえ光に攪拌されてせめがれる。慈悲はない)」

○海岸

(金の中心核を貫いた)さんがむりや”は、放ち続けている光芒をおもむろに振り上げる。

”よろうてつ”の核が、完全に断ち割られる。

銀の殻も金の霧も両断され、天球儀めいた怪異はその力を急速に失い、形を維持できず散っていく。

”さんがむりや”、怪音を曇天にむけて咆哮する。

勝利を報せる喇叭ラッパのように)

○”さんがむりや”次元

しばしの間、月とゆかりの間で責め苦の光柱が佇立する。

そしてその光芒が、ふっと掻き消える。

世界に暗闇が舞い降りる。

ゆかりの光の槍、当初の長さまで縮小。

海と空に刻まれた真珠色の傷跡、妖しく燃える。

あかり、落下。
月、見下ろす。

ゆかり、あかりを見上げる。

結月ゆかり「あなたの心で、私を打ち倒すことはできない」

継星あかり「……（霞む目をなんとか開く。地上を見やる。ゆかりを）」

○（回想）浜辺・キャンプファイヤーエリア（夜）

継星あかり「……ねえ、ゆかりさん」

結月ゆかり「なんでしよう」

継星あかり「ゆかりさんは、自分を人とは違う生き物だって言うけどさ」

あかり、肩をゆかりの方へそつと寄せる。

継星あかり「もしも、ゆかりさんと同じ種類の生き物がいたら、やっぱり嬉しい？」

ゆかり、あかりを受け止める。

あかり、微笑む。

○”さんがむりや”次元

あかり、カッと目を見開く。

継星あかり「”さろめ”!!」

あかりの全身から、七色の風が勢いよく噴出する。

（それまでの自然的な渦巻き方ではなく、ジェットエンジンの燃焼ガスのような、直線的な放出。それが、あかりの体のあちこちから噴き出ている）

あかりの衣服、ところどころが玉虫色に変異。そこから虹色のガスを排出する。吹き出した七色の気流があかりの周囲を囲み、あかりの落下速度を緩やかにしていく。

結月ゆかり「……やはり、名前をつけるのですね、そちらにも」
ゆかり、光の槍をあかりに向ける。

切っ先が輝きを増す。

あかり、落ちながら身構え、片腕をゆかりに向ける。

継星あかり「ゆかりへ向けた腕のあちこちで、極彩色の斑点が生まれる。そこを起点にして、虹色の亀裂が腕に走る。罅割れから七色の気流が湧き出る。気流は宝石の破片を混ぜたように煌めいていた」
月光の刃先、一瞬で伸長。高加速で突き上げる。

七色の気流、指向性をもって集束。高速でゆかりに襲い掛かる。

（光と気流が激突。閃光）

（閃光はプリズムを通したかのように無数に分光。激突するエネルギーのスペクトルが、無数の色の光となって周囲に放射される）

（その虹色の光は空間さえ変異させる）

（槍と風が衝突した場所の空間、禍々しい極彩色に変色。辺縁部分は黒ずんでいる）

虹色の侵蝕、槍にまで及ぶ。

槍の外縁の光刃、七色に歪み、黒く弾けて小さく散る。

（その侵蝕度合いは切っ先が最も顕著で、槍をそれ以上突き上げることが出来なかった）

（槍の攻撃を防いだ気流も光刃に切り刻まれ、虹光を発して消失する）

あかり、着地。

（その全身、服と言わず皮膚と言わず、玉虫色の斑点が次々と出来ている。虹色の亀裂が次々と走り、特に背中側は熱水噴出口のように猛然と極彩色のガスを吐き出していた）

結月ゆかり「……その2匹目の性悪が何をしてるのか、分かってるのですか？」

継星あかり「分かってるよ。私の体を食べてるんでしょう？」

あかりの体、次々と虹色の部分に置き換わる。

あかりが動いたたび、変色した部分から破片がぱらぱらと剥がれ落ちていく。

(剥がれた皮膚の部分は極彩色に塗り潰されている)

継星あかり「よろうてつ」は、私の心を力にする。けど、それだけじゃ”さんがむりや”には勝てない。だから”さろめ”に名前をあげたの」

結月ゆかり「……」

継星あかり「”さろめ”は私の体を力にする。私は私を捧げて、ゆかりさんに認めてもらうの」

結月ゆかり「なにを？」

継星あかり「ゆかりさんを苦しませないために何でもする覚悟」

結月ゆかり「……」

継星あかり「ゆかりさんのくるしみを、ゆかりさんと一緒に戦って、ゆかりさんを守るくらい強さが私にあるってことを、ゆかりさんに認めてもらうの」

排出する玉虫色の煙、肉体を置換して表出した七色の風、宝石めいた色とりどりの煌めき。

それらがあかりの手元に集結する。

渦を巻いて。

結月ゆかり「……もしも、あなたが力及ばず、私の苦しさを癒せなかったら？」

継星あかり「もしそうになったら、私を一生ゆかりさんのおもちゃにして」

結月ゆかり「……」

継星あかり「従姉妹じゃなくて、憂さ晴らしの道具にして。奴隷にして。肉にして。何してもいいおもちゃで構わないから」

あかり、ひび割れた顔で告げる。

ゆかりに。

継星あかり「あなたをまもれない私なんか、私が絶対に許さないから」

あかりの手元に集まった高密度の気流、一本の細長い渦巻きを作る。

あかり、その渦巻きを両手で握りしめる。

あかりの両手、虹色化が急激に進む。

手首から先の全てが虹色に変わり、渦巻きとの境界線があやふやになる。渦巻きの風力と規模が一気に強まり、膨れ上がる。

(七色の竜巻)

(竜巻の外を別の渦巻きが包む)

(その渦巻きもまた別の渦に包まれる)

(全部で三重)

(宝玉めいた様々な色の輝きを内包するラウンドスパウト)

継星あかり「私の覚悟を、あなたに見せるよ、ゆかりさん」

あかり、巨大な多重竜巻を振り上げる。

結月ゆかり「……」

ゆかり、目を瞑る。

(世界の光が再び失われる)

(天頂の月がぎらぎらと輝き出す)

(目玉の中心から一条の光芒が差し込まれる)

ゆかりの槍、光芒を受け止める。

ゆかり、目を開く。

結月ゆかり「……あかりさんの覚悟を、私の14年が踏み潰します」

膨張する光槍。

ゆかりを固定し始める羽枝達。

帯電する空気。

変色する空間。

結月ゆかり 「私は地上を蹴って月へ行く」
継星あかり 「私は月にだって征ってみせる」

ゆかり、月光の長槍を突き出す。
あかり、竜巻の剣を振り下ろす。

世界が震撼する。

第3幕・第9章：ゆかり VS あかり

○海岸

(崩壊していくそれが、嗤う。)

羽虫の羽ばたく音。

無数の弦楽器を出鱈目に弾きまくる音。

電子ノイズ。

それらを無理やり束ね、人間が聞こえるような領域に落とし込んだような騒音で、嗤う。

”よろうてつ”の哄笑。

崩れていく金銀の粒子達が、みるみるうちに七色に輝き出す。

不協和音の洪水の中に、子供の甲高い笑い声が混じっていく。

”よろうてつ”の全てが虹色の風となって、嵐の海岸を席卷する。

”よろうてつ”から”さろめ”へ。

”さろめ”、”さんがむりや”に遊ぶ)

○”さんがむりや”次元

極彩色の嵐、星屑を混ぜ込んだ豪風で蒼い空間を蹂躪する。

風に含まれる輝きの粒子、通過した空間を研磨剤のように傷つけ、玉虫色に変色させる。

(あかりの振り下ろした三重の竜巻は”さんがむりや”の空間全体を侵蝕し、水平線から生える樹木たちを悶絶させていた)

(逆巻く黒い海も、その海面が虹色に汚されている。事故を起こしたタンカー船が漏れ出したオイルで海の水を汚染するように)

放射されたゆかりの烈光、アンカーのように固定される無数の羽枝を引き千切り、周囲の海面を帯電した光刃で破碎。

侵掠の七色による巨大な竜巻と真つ向から激突する。

(激突の轟音さえ光に変わる)

(光槍、三重の竜巻のうち最外周部の渦を貫通)

(第二層に突き刺さる)

(七色の嵐の第二層、風に含まれる星屑の鑢で槍の切っ先を削り散らす)

(月光の刃は無数のスペクトルの閃光へ)

(虹の妖風は無色の放射熱へ)

(拮抗)

(激んだ海面が爆裂し、揺れる空気は音ごと破壊される。迸る衝撃波でふたりの髪も衣服も激しく翻る)

(空間はその蒼さを喪い、狂乱する光と熱に暴虐の限りを尽くされていた)

継星あかり「——っッ!!」

あかり、振り下ろし続けながら天へ吠える。

(唯一汚されていない天頂の月に向けて。その顔に極彩色の罅割れが走る)

七色の竜巻、咆哮に応えるように密度と勢いを激しく増加。烈光の巨槍を研削していく。

あかりの両腕、凄まじい速度で生身の部分が喪われる。

(代償)

竜巻第二層、月光の噴流をじりじりと押し返す。

(砕かれた光刃が舞う)

結月ゆかり「……(強烈な光の乱舞に目を細め、パーカーを引き千切られそうなほどにはためかせながら、あかりを捉える。

肉体を極彩色に蝕まれながらも咆哮し続ける、その姿を)」

* * *

(フラッシュユ)

ゆかりの部屋。

継星あかり「え、一位でいいの?」

結月ゆかり「あなたが不快でないのなら」
継星あかり「ううん、いい。一位がいい」

(フラッシュユ)

公園。水鉄砲。

継星あかり「なんで顔ばっかりなの!？」

結月ゆかり「面食いなので」

継星あかり「意味がちがう!」

(フラッシュユ)

バーベキューエリア

継星あかり「……ハンバーグ、作ってみたの」

(フラッシュユ)

キャンプファイヤーエリア

継星あかり「つまり?」

結月ゆかり「私が『あかりさん』と呼ぶ相手は、この世にひとりしか意味しない、ということですよ」

継星あかり「ゆかりさん……!」

(フラッシュユ)

ゆかりの部屋。

浴衣のあかり。

継星あかり「かわいい?」

結月ゆかり「もちろん」

結月ゆかり「あなたが一番かわいい」

* * *

結月ゆかり「――」さんがむりや」

(天頂が輝く)

(眼球に似た満月に再び鋭い光が宿る)

(虹彩めいた中央部分の一点が強力に閃き)

(空気が凍結)

継星あかり「！(天空からの輝きに瞠り、上を見る。そしてはっと、その目をゆかりへ向ける)」

結月ゆかり「(あかりの視線を受け止める。力を込め、見詰め返す)」

月光、放たれる。

(二条の光)

(変色する空気も暴れ回る光熱も貫いて、ゆかりの手元に到達する)

(二度目。光槍が膨張する)

(放出を続ける烈光の巨槍は、その輝きをさらに猛々しく大きくさせる。膨れあがった光の強さに、ゆかりの腕や肩が灼けていく。血飛沫が散る。スカート状に固定させた羽枝の触手がびりびりと破けていった)

光刃、倍以上の密度へ。

スペクトル分解される先端を暴力で押し込む。汚れた海も異色の空間も真珠色に染め上げて粉碎。進路上の全てを破壊し、七色の嵐を叩き斬る。

(拮抗は崩壊)

月光の槍の切っ先を受け止めていた竜巻の第二層、大穴を穿たれ、ぼろ雑巾のように引き千切られる。

分厚く迸る光の奔流、一気に竜巻の中心層へ到達。嵐の剣そのものを刺し貫こうとする。

継星あかり「う、あつ、ああ……ッ！(嵐の剣の中で最も密度が高

く最も威力の強い中心渦、それを握るあかりの両腕は、ほぼ全て極彩色の塊に置き換わっていた。両腕から七色の高圧ガスを放って巨剣に送り続けているが、気違いじみた月光はそれさえ押しつけ、着実にあかりへ近付いていく」

結月ゆかり「(放射の反動で槍を持つ腕が黒く焦げる。肩から首に掛けて裂傷が広がり、体自体が後方へ押し流されそうになる。それを留めている羽枝の触手もかろうじていくつかが残るだけ。それでも放射をやめない)——磔刑に処せ」

結月ゆかり「《さんがむりや・ありかんじよ》」

○海岸

(七色の風からなる”さろめ”、”さんがむりや”が放った蔓状触手の群れを躲す。

翻した妖風から星屑が舞い散る。

風は実体を薄くし、拡げ、再びすぼまる。

”さろめ”は”さんがむりや”自身を狙わなかった。

樹状触手から赤い実を放たれても、爆風に紛れ虹色の渦で煙に巻く。

内臓めいた触腕で掻き散られそうになっても、”さろめ”は子供の笑い声を響かせながら受け流していく。

挑まず、離れず、”さんがむりや”から攻撃を誘い、繰り出されるそれをふわりふわりと避け続けた。

それは闘争ではなく遊戯だった。

人界で、ただただ遊んでいたのだった)

○”さんがむりや”次元

継星あかり「……ゆかりさんは、やっぱり強いね」

結月ゆかり「そうでしようか」

継星あかり「怒つても悲しんでも勝てない。体中こんなに痛いのに
負けちやいそう」

結月ゆかり「そうでしようね」

継星あかり「ゆかりさんが好き」

結月ゆかり「はい」

継星あかり「ゆかりさんが好き」

結月ゆかり「ええ」

継星あかり「ゆかりさんは、私が好き?」

結月ゆかり「もちろん」

継星あかり「本当に?」

結月ゆかり「もちろん。あなたが好きです、あかりさん」

継星あかり「……それなら、じゃあ、だから……だから私は今から
燃やすよ」

結月ゆかり「なにを?」

継星あかり「私の命を」

○海岸

(いつまで経つても攻めてこない”さろめ”に、”さんがむりや”

は対策を講じる。

幾度か攻撃を繰り返した後、“さんがむりや”、4つの長い羽枝をひととき大きく外へと伸ばす。

羽枝から細長い突起がいくつも生えた。突起は肋骨のようになり、アンテナめいた形状に変わる。

大羽枝、淡く青く発光。

空間に蒼い切れ目が走る。

空間断裂。

切れ目、回避しようとした“さろめ”の風を容易に切断する。切り裂かれた七色の風、青い粒子となって霧散。

青の断裂は空間的な奥行き距離を完全に無視していた。“さんがむりや”の手前に生まれた空間の亀裂は、海原の彼方まで等しく断裂が続いている。

無限射程。“さろめ”の回避行動は意味をなさない。

その空間の断裂を、“さんがむりや”は360度全てに展開。細かい亀裂が周囲の全てを巻き込む。海岸の空間が青に潰れる。逃げる場所も躲す隙間もない。

“さろめ”、くすくす笑う。

一定の距離を保っていた“さろめ”が一気に躍りかかった。

“さんがむりや”に向かって、ではない。

怒濤のように流れ行く先は青い亀裂。“さろめ”は躲すことなく自ら空間の断裂に雪崩れ込む。

切断面に触れた風が青く変色して固形化し、粉々に風化する。“さろめ”が次々と砕かれていく。

妖風、変貌。

内包していた様々な色を全て青一色に統一。空間断裂の色とほぼ同じ色合いになる。

色だけではない。薄く霞がかかった青い風は一瞬で結集し、高密度の塊となる。その塊は内部の空間そのものを青く切断。青い風を伴う空間の断面が“さんがむりや”の空間断裂と接続した。

2種類の裂け目が合流。異なるはずの空間の裂け目の境界は急速

に曖昧になっていく。

”さろめ”は自分の作った空間断裂の中へ次々と潜り込む。

風の塊が丸ごと切れ目に浸透。”さんがむりや”の空間断裂攻撃を回避する。

そして瞬く間に、”さろめ”と”さんがむりや”双方が生んだ空間の断面が一体化。

”さろめ”は消失。

”さんがむりや”だけが残された)

○”さんがむりや”次元

ゆかり、気付く。

(極彩色に変色する空間の果てに、青い亀裂が走る)

(亀裂は世界の果ての木々を悉く両断し、青い風が吹き出る)

(さらに亀裂はきれいに広がるのではなく、見えない手で暴力的にこじ開けられたような大穴を抉る。暴漢が婦女子の衣服を引き破るような無理矢理さで次元の壁を破壊し、より大量の風を外から招き入れた)

結月ゆかり「(不快げに) 招いた覚えはないというのに」

青い風、唐突に七色へ変化してあかりのもとへ殺到する。

”さんがむりや”次元の果てにある木々を全て蹂躪できるほどの量が、あかりの背中に注ぎ込まれていく)

あかりの背中、崩れる。

フライトジャケットもブラウスも皮膚も、背中側に存在する全てが極彩色の煙を夥しく放出する。活火山の噴火のように。

その七色の噴煙からは星屑めいた光の粒子も飛び散り、火山雷のごとき稲妻がいくつも閃き轟音を放つ。

継星あかり「——!! (目を見開いて吠える。口から吐かれる空気は毒々しい虹色。口からだけではなく、首や顔の罅からも同様のガ

スが吹き出る)」

あかりの手元の竜巻、強烈な変化を見せる。

(極彩色の暴風が恐ろしい速さであかりの手元に凝縮していく。気体の曖昧さはなくなり、想像を絶する力で圧縮され固体化していった)

一振りの剣。

円錐形。玉虫色の金属光沢。

(奇しくもゆかりの槍と似た形状だった。長さはずっと短い。あかりの腕ほどの長さの剣身が帯電している)

極彩色の剣、ゆかりの月光を受け止める。

光刃、真珠色の火花を散らす。

(進撃が止まる)

(それ以上押し推し進められない)

(あかりの手前で大量の発光と放電が撒き散らされる)

帯電する剣身、根本から先端に掛けて回転を始める。

(回転する剣の周囲に虹色の風と力場が発生。穿孔機めいた円錐螺旋状を形成し、種々様々な彩りの波動で月光の奔流を削り潰す)

ゆかりの光槍光刃、微細な破片となって散る。

あかり、固体化した虹に星々を溶かし込んだような剣を両手で握りしめる。手が剣と融合し、そのまま腕ごと一体化する。

あかり、ドリルじみて回転する切っ先をゆかりへ向ける。

継星あかり「(……ゆかりを見詰める)」

結月ゆかり「(……あかりを見詰める)」

継星あかり「(……わらう)」

結月ゆかり「(……わらえない)」

あかり、濛々と極彩色の煙をあげていく両腕を前へ伸ばす。

(高速回転するブレードと、その周囲をさらに高速で旋回する七色の力場。回転数は気違いじみた勢いで上昇し続け、停止するのを嫌悪するかのよう)

継星あかり「——いくよ」

あかり、背中が爆発。

蹴飛ばされたように加速する。

結月ゆかり「っ！」

ゆかり、咄嗟に槍を押し込む。

あかりの喉元に光の槍を突き立てようと試みる。

(肩と首から血が吹き出る)

が、光槍の刀身、無残に研削される。

あかり、唸喊。

その背中から莫大な七色の噴進炎を吹き出し、ロケットエンジンのように一瞬で高速度に達する。回転する剣身に推進力が加わり、月光の奔流を砕きながら突き進む。

(凶悪なまでに太い虹色の尾を描きながら、烈光の大河を遡上していく)

月光の屑が凄まじい速度で黒い海に撒かれていく。

黒色の海水は刃こぼれのエネルギーで一気に沸騰。

(気化していく海)

黒い水蒸気を暴虐に蹴散らして、金属結晶めいた七色の回転剣が突進。激光の噴流を叩き割る。

——あかり、極彩色に燃える。

(比喩ではない)

(あかりの全身が発火。玉虫色の炎に包まれる)

(七色の炎は熱量の大部分を切っ先に集め、剣身と旋風と劫火を融合させながら超高速で回転。光熱の残影が虹の尾に混ざる)

あかり、大加速。光刃の激流を易々と切り開いて猛進する。破壊された光の破片は虹色の炎で溶かされ消えていく。

(それは虹色の彗星だった)

結月ゆかり「……どうして」

ゆかり、あかりを見やり、唇を歪める。

あかり、烈光の怒濤を撃砕しながら瞬く間に距離を縮めていく。
(二度重ね掛けした光槍をもつてしても、あかりの虹焰は止められない)
ない)

(あと僅かで、妄執のように回転する先端がゆかりの中心に届く)
ゆかり、その切っ先を見据える。

(その向こうの、炎の塊になってしまった、あかりを)

結月ゆかり「どうして、来てしまうのですか」

(剣で貫けば、あかりの炎は間違はなく”さんがむりや”を焼き尽くす)
くす)

(ゆかりが異界へ赴くために貯め込んだ力もろとも)

(あかり自分もろとも)

結月ゆかり「置いていく私を、どうして許してくれないのですか」

(豪炎と烈風の回転螺旋、ついにゆかりの間近まで迫る)

(2人の距離、およそ腕一本分)

(一拍で消滅する距離)

(炎の砲弾)

(燃える生命)

(あかり)

結月ゆかり「どうして」

あかりを見続けるゆかり。

ゆかり。

ゆかり。

ゆかり——涙をこぼす。

結月ゆかり「どうして、わたしは……あなたと出会ってしまったの？」

”さんがむりや”次元、激震。

——ジャジャジャギユゲキシユキヤチャシミュケケケケ……!!

天頂の満月、異形音。

(空間内にあったエネルギーの全てを、無理やり一点に集めていく) 黒い海は沸騰から一気に冷却され凍結する。
青黒い天空がその光量を全て落とし、霞んで歪み、崩落する。

満月が異常なほど発光する。その光の強さに月自身が震動を始めてしまう。

月の震えは世界そのものに伝わり、空を割り海を砕く。
力の全てを絞り出すように輝く怪異の月。

結月ゆかり「さんがむりや」

ゆかり、月を見上げる。

月、中心部をゆかりに向ける。

ゆかり、それと瞳を合わせる。

月、ひときわ身震い。

ゆかり、目を閉じる。

満月、その異常な光輝の全てを一条の光芒にして、ゆかりに放つ。

(世界から急速に熱が消失する)

(止まった空気の層をぶち破り、光の柱がゆかりに届く)

ゆかり、狂った量の月光を槍で受け止める。

——光槍、爆裂。

開闢のような甚大な閃光が、暗黒の世界を灼き尽くす。

槍を持つゆかりの腕が光に吞まれる。

腕、冗談のようにひしゃげる。

ゆかりを固定する羽枝は全て千切れ。

肩と首、胸の皮膚が焼け爛れる。

あらゆるものを塗り潰す圧倒的な光の大爆発。

七色の回転力場、その分厚すぎる光爆に晒され粉碎。

剣を包んでいた烈火と疾風がその光の衝撃に一瞬抗うが、やはり破壊されて消滅。破却される。

露出した剣が回転速度をさらに上昇。爆光を掻き乱し、その蹂躪に耐える。しかし金属結晶めいた剣身は音を立てて罅割れ、あかりの突進が停止する。

光の激濤はあかりのみならず、全ての方向に駆け抜ける。

(爆縮レンズで超臨界に陥った核物質のように)

(もはや攻撃ではなく、自爆だった)

疾駆する超々高压の光の破壊力に、七色の剣が割れていく。

炎を光が吹き飛ばす。

継星あかり「——!!」

あかり、吠える。

炎を立てて激しく振動。その全身に亀裂が走る。

炎が光を燃やす。

あかり、進む。

剣が先端から砕けていく。

あかり、進む。

肉体のあちこちが破裂していく。

あかり、進む。

七色の爆発が体中に重なる。

あかり、進む。

体が火の玉に包まれる。

進む。

進む。

光が、剣の全てを粉碎する。

進む。

剣が塵に。その塵さえ光に還る。

あかり、光に吞まれる。

あかり、吠える。

進む。

指を伸ばす。

伸ばす。

伸ばして、

伸ばして、

触れる。

ゆかりの頬に。

結月ゆかり「……………（息が、とまる）」

玉虫色の指、確かに触れて、撫でて、散った。

あかりの指も手も、腕も肩も体も。

全て光に吞まれて溶ける。

光が全てを呑み込む。

結月ゆかり「あかりの軀へ手を伸ばそうとするが、あかりは形を保てず光の中で曖昧になる。ゆかり自身も瞬く間に光の中へ。視界が白く染まる」

光が全てを呑み込む。

ジャジャジャギユゲキシユキヤチャシミユケケケケ……!!

結月ゆかり「——（散ったあかりを目にする。口がわななく。その口の中から何かを叫び、そして吼える。今まで出したことのない声で）」

声はどこにも届かない。

光が声も叫びも呑み込んで消し去る。

光が全てを呑み込む。

第3幕・第10章：決着

○海の浜辺（昼）

”さんがむりや”を中心に広がる、青い空間の裂け目。その青い切れ目から、真っ白な烈光が唐突に吹き出る。

”さんがむりや”自身も発光。異形の音を立てながら光の柱になる。

光の柱、天を衝く。海岸が光に包まれる。

（町のどこからでも、その光景を見ることが出来た）

光が全て消え去る。

”さんがむりや”は消失。青い空間の断面も同じく。

代わりに、ゆかりとあかり、嵐の海岸に出現。

結月ゆかり「……（槍を持っていた右腕がひしゃげ、腕の皮膚が全て爛れている。爛れは裂傷を伴って肩や首にも広がっている）」

ゆかり、あかりを見る。

あかり、身体が玉虫色の塊になっている。

尋常の人の表面はひとつもなく、極彩色の煙をぶすぶすとあげている。全身が虹色に炭化していた。

結月ゆかり「あかりさん……」

ゆかりの呼びかけに応えはない。虹色の塊、ぴくりとも動かない。ただの塊のように。

結月ゆかり「（激しい雨に打たれ、全身をずぶ濡れにさせながら、あかりのもとへ近づこうとする、が）」

ゆかり、歩き出した一歩目で膝が崩れる。

膝をつき、苦しく胸を押さえる。

結月ゆかり「（荒い息。呼吸がぎこちない。普段そこまで使わない肺で強く呼吸）……力が、もう」

ゆかり、膝立ちのままなんとか進む。

濡れそぼったゆかりの体、強風に煽られ寒さに震える。
右半身の傷から血を流し続ける。

ゆかり、あかりのもとへ辿り着く。

結月ゆかり「(強い声で) あかりさん」

あかり、何も応えない。

毒々しい極彩色の塊が、人の形をしているよう。

その七色の焦げもどんどん明るさを落とし、黒ずんでいく。

結月ゆかり「あの性悪どもはもういないようですが」

ゆかり、折れてない方の手であかりに触れる。

手から粘糸を伸ばし、あかりの体を診る。眉根を寄せる。

結月ゆかり「人の肉が足りない。熱も……人体を維持するための力をごっそり持っていかれた」

あかりの体を診ていた糸、そのままあかりの七色の表面を突き破り内部へ侵入。続々と粘糸群が潜り込む。

結月ゆかり「……あなたもたいがい、たちが悪い」

ゆかり、肩胛骨のあたりから木の根に似た触腕を伸ばす。

大量の水を吸った砂浜に触腕を突き刺し、地中で枝分かれさせ伸長。地面の水分が干涸らびていく。

同時に多量の粘糸も空中に放出。ゆかりに叩き付けられる風が急速に弱まる。

水と風を喰う勢いに比例して、あかりの体内に潜り込む糸の量が増していく。

しかし。

結月ゆかり「(苦々しく顔を歪め)……足りない。糸たちが短い。窒素を分解しきれない。炭素源も遠い。台風からエネルギーを奪えるはずなのに」

ゆかり、震える。

結月ゆかり「嵐を食べるだけの力が、残ってない……」

雨と風を吸い込む触手の範囲は、ゆかりの周囲に限定されている。

少しずつその範囲を広げてはいるが、あかりの体が黒く変色する速度の方が断然早い。

ゆかり、その黒化を止められない。

結月ゆかり「(初めて使うような、ぎこちない悪態で)……くそ」
ゆかり、力なくうなだれる。自身の頭をあかりの頭に近付ける。
結月ゆかり「あかりさん……」

——頭上から、怪奇音。

虫の羽音と電子雑音をごちゃ混ぜにしたような、名状しがたい奇妙な大音声。

異形の高笑い。

ゆかり、見上げる。

暗黒の曇天。

舞っている。

金と銀の粒子。

黒い空を背景に、粒子達が形を変える。

” よ き あ そ び に ”

” む く い を ”

粒子の字、怪音とともに爆ぜて散って消える。

ごろごろという低音の唸り、緊迫する空気。

結月ゆかり「(はっとして、背中から羽枝を生やす)」
羽枝、空へ素早くまっすぐ伸びる。

天に閃光。

稲光と霹靂。海を灼く。雷が奔る。

稲妻、ゆかりに落ちる。羽枝に直撃。

雷鼓が響き渡る。

ゆかりの全身が発光、帯電。

体の傷があつという間に治る。ひしゃげていた右腕も高速で修復。力に満ちる。

結月ゆかり「(両手でしっかり、あかりの頭を包む)」

ゆかり、ぐつと背中を丸める。

背からいくつもの羽枝を新たに伸ばす。羽枝の表面には半透明の皮膜。

羽枝は大きく上空へ広がり、貪欲に嵐を吸い上げていく。

ぞぶり、と下半身から内臓めいた触腕が数多も這い出てくる。

触腕は既に地中に刺さっているものも含め、浜辺はおろか海中やコンクリート堤防、その先に広がる街や森へ瞬く間に伸びていく。

触腕の表面からより細かい粘糸が伸びる。小さな隙間、微粒の物質、そういつた些細な場所や物からも、エネルギーや養分を貪つていく。

あかりに潜り込んでいる粘糸、一気にその量と勢いを増す。

糸を通してゆかりから光が注がれる。光は夜光虫のような輝き方に変換され、次々とあかりの体内を駆け巡る。

あかりの黒ずむ速度が明らかに鈍っていく。

結月ゆかり「……(目を軽く瞑りながら、そつと、あかりの頭に口付ける)」

町中に張り巡らされた触腕の根から、羽枝の大触手があちこちでそり立つ。

(その大きさは“さんがむりや”顕現時に匹敵した)

(この触手たちは常人の眼には見えない)

しかし犬も猫も吼え立て、鳥という鳥は喚き、人間の子供が泣き叫ぶ。

嵐に遊んでいた不可視の生物達でさえ、次々と海の彼方へ逃げていく。

街を襲う嵐の力を、群生した大触手が奪い去る。

（大触手の根元から伸びる微細な触糸が、人間も鳥獣も問わず、虫や魚、一木一草に至るまで、僅かだがその熱と肉をかすめ取っていく）

光を注がれるあかりの体、玉虫色から淡い青へ変色する。

発光する糸がその体を完全に包み込む。完全変態する虫の繭のよう

に。
継星あかり「（徐々に光る糸が解けていく。その糸の下から少しずつ見えてくる、生身の人体。傷ひとつ無い、継星あかり）」

結月ゆかり「——（糸に包まれたままのあかりを、ぎゅつと抱き寄せる）」

嵐を貪る大羽枝の数、次々と増えていく。

根も糸もそれに合わせて量と範囲を広げていく。

（それはまるで森だった）

（“さんがむりや”の森）

不可視の森が街を覆い、

嵐を嘘のように消してしまうまで。

ゆかりはあかりを抱きしめていた。

あらそいが終わった。

終幕：人間火力発電所あかりさん、講和条約を締結

○結月家・ゆかりの部屋（夜）

あかり、ゆかりのベッドに横たわる。

ゆかり、椅子に座りながらあかりを眺める。

継星あかり「……っ（目覚める）」

あかり、戸惑いながら天井を眺め、はっとして周りを見回す。

結月ゆかり「起きましたか」

継星あかり「……ゆかりさん」

結月ゆかり「動けますか？」

継星あかり「ゆっくりと上体を起こす。手を握り、開き、また握る」

……大丈夫」

結月ゆかり「よかった」

継星あかり「（ベッドから降り、立ち上がる。少しふらつきながら）

ゆかりさん、が？」

結月ゆかり「そうです。あなたが死にかけていたので」

ゆかり、おもむろにあかりを平手打ち。

乾いた音が響く。

継星あかり「！（叩かれた頬を赤くし、きつ、とゆかりを強く見つ

め、平手でゆかりの顔を殴り返す）」

ゆかり、頬を殴られる。

赤い痕が付く。

継星あかり「（ゆかりの赤い痕に息を呑む）」

結月ゆかり「（平板な声音）あなたは、死ぬところだったんです」

継星あかり「ゆかりさんだって同じことしようとしてた」

結月ゆかり「私は死ぬわけではありません」

継星あかり「二度と会えないなら、同じだよ」

結月ゆかり「……」

継星あかり「……」

ふたり、見つめ合う。
沈黙が続く。

しばしの後、

ぐうう、と鳴動音。

あかりの腹から。

結月ゆかり「……」

継星あかり「……」

結月ゆかり「……食事にしましょう。食べたあとで、ゆっくり講和会議を開きましょう」

継星あかり「講和会議？」

継星あかり「ゆかりさんあかりさん戦争はこのゆかりさんの勝利に終わりましたが、お互い共倒れ寸前のピュロスの勝利なので、手打ちにしようと言うことです」

継星あかり「(ゆかりの言葉を一拍かけて呑み込み、はっとなつてうゆかりを凝視。そのあと、部屋の窓の外を見やる。嵐があつたとは思えないゆつくりとした空模様)……ゆかりさん、なんであかり、わななく。」

継星あかり「なんで、私——あの生き物が視えないの？」

ゆかり、わずかに目を瞑り、

結月ゆかり「食事にしましょう。父も母も待っています」

○結月家・ダイニングルーム(夜)

食卓を囲う四人(あかり、ゆかり、ゆかり父母)。

食卓には大量の食事(サフランライス、ビーフシチュー、タンドリーチキン、サーモンのマリネ、アボガドとベーコンのサラダ、トマトとモッツアレラチーズのインサラータ・カプレーゼ)

テーブル中央の大皿に盛られたサフランライスを、各自が必要な分

だけ取って食べるスタイル。

継星あかり「……（戸惑いながら、サフランライスを自分の取り皿にすくう）」

あかり、ライスをおそるおそる口にする。

継星あかり「!!（目を瞠る）」

あかり、ライスを何度も何度も噛み締め、一飲みにする。

そして慌てて食卓上の料理へ手を伸ばし、恐ろしい勢いで咀嚼していく。

継星あかり「……ゆかりさん！」

結月ゆかり「はい」

継星あかり「おいしい！」

結月ゆかり「はい」

継星あかり「……おいしいよ（言って、涙を流す）」

結月ゆかり「そうでしょう」

継星あかり「どうして……？」

結月ゆかり「我が家の料理ですから」

継星あかり「そうじゃな——……」

あかり、言いかけ、やめて、食べ続ける。

ゆかり父「あかりちゃん、もう大丈夫？」

継星あかり「大丈夫です！ おいしいです！」

ゆかり父「（あかりの応えに苦笑しつつ、窓の外を見やる。町並み。

海の方。それからあかりとゆかりを見て、小さく首を横に振る）」

ゆかり母「ご飯足りる？ 何か作る？」

継星あかり「あ、ごめん。私ばかり食べてて」

結月ゆかり「栄養とエネルギーを、あかりさんの体が欲しがっているのです。体を動かしたり維持したりする力が足りないのです」

ゆかり、スプーンを手にする。

結月ゆかり「手っ取り早くエネルギーを作るには、食べ物を分解して熱量を得るのが一番です」

ゆかり、言いながら、大皿のサフランライスをスプーンですくい、自分の皿によそう。

ゆかり、ライスを口に含む。

ゆかり、食べる。

継星あかり「……」

ゆかり父「……」

ゆかり母「……」

ゆかり以外の全員、目を大きく見開く。動きを止める。

食卓に静寂が降りる。

ゆかり、全員の注目を浴びながら、サフランライスを咀嚼。

結月ゆかり「(ぎこちなく、一度に飲み下せず、何度も小分けし、ようやく喉の奥に押し込む。特段感情のない声で)……肉ではない胃腸が誰かさんのせいで荒れているので、肉でできた胃腸を使わざるをえないのです」

継星あかり「ゆかりさん、もしかして、おなか、空いてるの?」

結月ゆかり「……そうなります」

あかり、がばつとゆかり母に振り向く。

継星あかり「ごめんなさい、やっぱり何か——」

ゆかり母「(あかりの台詞を遮り) うん、分かった」

ゆかり母、慌てて席を立ち、台所に行く。

ゆかり父「ごめん」

ゆかり父、あかりとゆかりに断ってから台所に行く。

食卓の2人からは見えないうところに結月夫妻が移動。

台所から、すすり泣く声。

継星あかり「(ゆかりを見る)」

結月ゆかり「(誰にも目を向けず、黙々と料理を食べる。箸の使い方が覚束ない。ときどき具材をこぼす)」

継星あかり「(何も言わず、自分も食べ続ける)」

ゆかり母、ハウレン草のソテーを運んで食卓に着く。

ゆかり父、白菜の浅漬けとザワークラウトをタッパーごと持ってくる。

4人、食卓を囲う。
皆で食事をする。
夏の夜。

○結月家・ゆかりの部屋（夜）

ゆかり、ベッドに力なく横たわる。

結月ゆかり「お腹が痛いです。食べ過ぎました」

継星あかり「椅子に座りながら）え、そんなに食べてないでしょ？」

結月ゆかり「あかりさんと違って、この肉体の胃腸は緊急用の補助器官にすぎないのです」

継星あかり「いつもは”さんがむりや”がご飯作ってるもんね」

結月ゆかり「普段なら、口から取り入れる必要も、それを排出する必要もないですから」

継星あかり「ゆかりさん大丈夫？ トイレの場所分かる？」

結月ゆかり「実はウォシュレットの使い方が分かりません」

継星あかり「ゆかりさん……」

結月ゆかり「とにかく今日はもう寝ましょう。お互い、休息と修理で忙しいですし」

継星あかり「講和会議は？」

結月ゆかり「眠たげな声音」明日、ゆっくり休んで、落ち着いてから、お話ししましょう」

継星あかり「……一緒に寝ていい？」

結月ゆかり「どうぞ」

あかり、椅子から跳ね上がり、猫のように丸まってベッドへ潜り込む。ゆかりに体を添わせて寝る。

ゆかり、布団をあかりに掛けながら、リモコンで部屋の照明を消す。暗くなる部屋。

結月ゆかり「自分の腕をあかりの枕にさせて）あかりさんは体温が高いですね」

継星あかり「ゆかりさんはひんやりしてる。気持ちいい」

結月ゆかり「あかりさんの中にいる分身の方が、私の本体の方より活発になっているのも、面白いですね」

継星あかり「うん？」

結月ゆかり「貯蓄空間は本体も分身も共有してるので、年貢の取り立てが楽しみです。悪代官の気分ですね」

継星あかり「なんの話？」

結月ゆかり「“さんがむりや”の分身があかりさんの中にいる、という話です」

継星あかり「……え？」

結月ゆかり「おやすみなさい」

継星あかり「いやそこで寝ないですよ！ こっちは寝れなくなるよ！」

結月ゆかり「(睡魔に負けている声)……明日に、しましょう。ゆかりさん史上最高に眠いので」

継星あかり「そんな」

結月ゆかり「明日です。明日なら、ちゃんと」

ゆかり、あかりの頭を撫でながら、

結月ゆかり「ちゃんと、あなたといますから」

ゆかり、眠りに落ちる。

あかり、ゆかりの寝顔をまじまじと見詰め、ぎゅっとゆかりに抱きつきながら、自分も眠る。

○海辺へ続く坂道(昼)

ゆかりとあかり、坂を降っていく。

台風一過の晴れやかな青空の下、車道に近い方を歩くゆかり、平坦な口調で言う。

結月ゆかり「やはり台風はいいです」

継星あかり「そうなの？」

結月ゆかり「そうなのです。この街全体に網を張って台風のエネル

ギーを掠め取ったのですが、それでも台風本体にとっては大したこと
でないらしく、そのまま北上していきました」

継星あかり「そのどのへんがいいの？」

結月ゆかり「地上のしがらみも何もかも一顧だにせず、圧倒的なエ
ネルギーと規模でひたすら我が道を進む存在感がたまりません」

継星あかり「強そう」

結月ゆかり「実際強いので」

継星あかり「”さんがむりや”でも勝てない？」

結月ゆかり「……あかりさんが、どうしてあの生き物達を見れない
のかは、私にも分かりません」

ゆかり、青空を見上げる。

結月ゆかり「あの性悪が靈感さえもぎ取っていったのか、”さんが
むりや”の修復に手違いがあつたのか、それとも一気に感覚と能力を
使いすぎた反動なのか……残念ながらよく分かりません」

継星あかり「戻るのかな」

結月ゆかり「分かりません。ただ、少なくともあの生き物達があか
りさんに住み着く心配はないので、そこはご安心下さい」

継星あかり「……”さんがむりや”の分身がいるから？」

結月ゆかり「そうです。あなたを修復する際、体中に植え付けまし
た。骨や血肉、細胞の隅々にまで分身の糸が張り巡らされています。
つまり、」

ゆかり、心底重たく溜息をつき、

結月ゆかり「あなたは私と同じになりました」

継星あかり「ゆかりさんと、同じ……」

結月ゆかり「と言っても、あかりさんの意思に”さんがむりや”が
応じるわけではないですし、水と空気をご飯にできるわけでもありま
せん。今まで通りエネルギーは三大栄養素と酸素です」

継星あかり「え、じゃあ私に分身残してる意味は？」

結月ゆかり「あかりさんはゆかりさんの植民地ですから」

さらりと言われ、あかり、唇を噛み締める。

継星あかり「……負けちゃったんだね、私」

結月ゆかり「はい。私の勝利です。宣言通りあかりさんは同居人の支配下に置かれ、その摂取エネルギーを私に貢ぐ形になります。年貢のように」

継星あかり「年貢」

結月ゆかり「税金のことです。以後、ゆかりさんはあかりさんの宗主となり、あかりさんの体内環境の運営権を行使できます」

継星あかり「つまり？」

結月ゆかり「あなたは私のものです」

継星あかり「(はつと息を呑む)……いいの？」

結月ゆかり「期限付きですが」

継星あかり「？」

結月ゆかり「私がここではないどこかに行くためのエネルギーを、昨日の戦争で使い果たしました。さらに最後の頼みの綱だった台風も、誰かさんを救命するのにほとんど使ってしまったので、現状エネルギーの貯蓄がありません」

継星あかり「だって」

結月ゆかり「だって？」

継星あかり「ゆかりさん、私のこと好きって言ったから。だから絶対に助けてくれるって思った」

結月ゆかり「……どこでそんな悪魔的なこと覚えたんですか」

ゆかり、肩を上下させ、溜息。

結月ゆかり「またエネルギーを貯めなくてはなりません。ここではないところに行くための」

継星あかり「私から吸い上げた力で？」

結月ゆかり「そうです。もつとも、あかりさんを健全に運営しながらなので強引な税収はできず、けっこうな時間が掛かるでしょう」

継星あかり「……来年とかじゃなくて？」

結月ゆかり「来年は流石に無理です。火力発電所を乗っ取って地方一帯を停電に陥らせる、みたいな強攻策をとらない限り」

継星あかり「つまり私はゆかりさん専用の人間火力発電所ってこと？ 胃はそのボイラー室？」

結月ゆかり「そうなります」

継星あかり「私が食べ過ぎたら、そのご飯はゆかりさんのお腹に行くってこと？」

結月ゆかり「そうなります」

継星あかり「つまりいくら食べても大丈夫ってこと？　むしろいっぱい食べた方が良くってこと？」

結月ゆかり「……そうなります」

継星あかり「すごいよゆかりさん！」

あかり、顔を輝かせてから、はたと気付く。

継星あかり「（みるみる顔を不安にさせて）でも力が溜まったら、また行っちゃうの？」

結月ゆかり「それはあかりさん次第ですね」

ゆかり、ふふつと笑う。

あかり、ゆかりの笑顔に瞠る。

結月ゆかり「あかりさんが何もしなければ、私はあかりさんを奴隷にしてストレスの捌け口にしてさんざん弄んだ挙げ句にぽいっと捨てて一人どこかに行きます。そういう話でしたよね？」

継星あかり「ゆかりさん……」

結月ゆかり「あかりさんに猶予をあげます」

ゆかり、あかりよりも前へ進み、坂を下る。距離を作る。

ゆかり、くるりと振り返る。あかりを見上げる。

あかり、ゆかりの表情がよく見える。

結月ゆかり「（穏やかに微笑み）私を、守ってくれるのでしょうか？」

継星あかり「……！」

あかり、ゆかりのもとへ駆け出す。

距離が縮まる。

あかり、ゆかりの手を掴む。

ゆかり、あかりの手を握り、振り返って坂を下りていく。

結月ゆかり「あの生き物達も見えず、性悪達の手も借りられず、同居人にも接触できないあかりさんが、どこまで抗えるのか楽しみです」

継星あかり「視えない私は、好きじゃない？」

結月ゆかり「そういうの、本当にどこで覚えてくるんです？」

ふたり、手をつないだまま歩く。

笑ったまま。

夏空の下。

真昼の白い月の下で。

ふたり。

(終幕)